

---

鶴ヶ島市

---

# 横田遺跡

---

首都圏中央連絡自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告

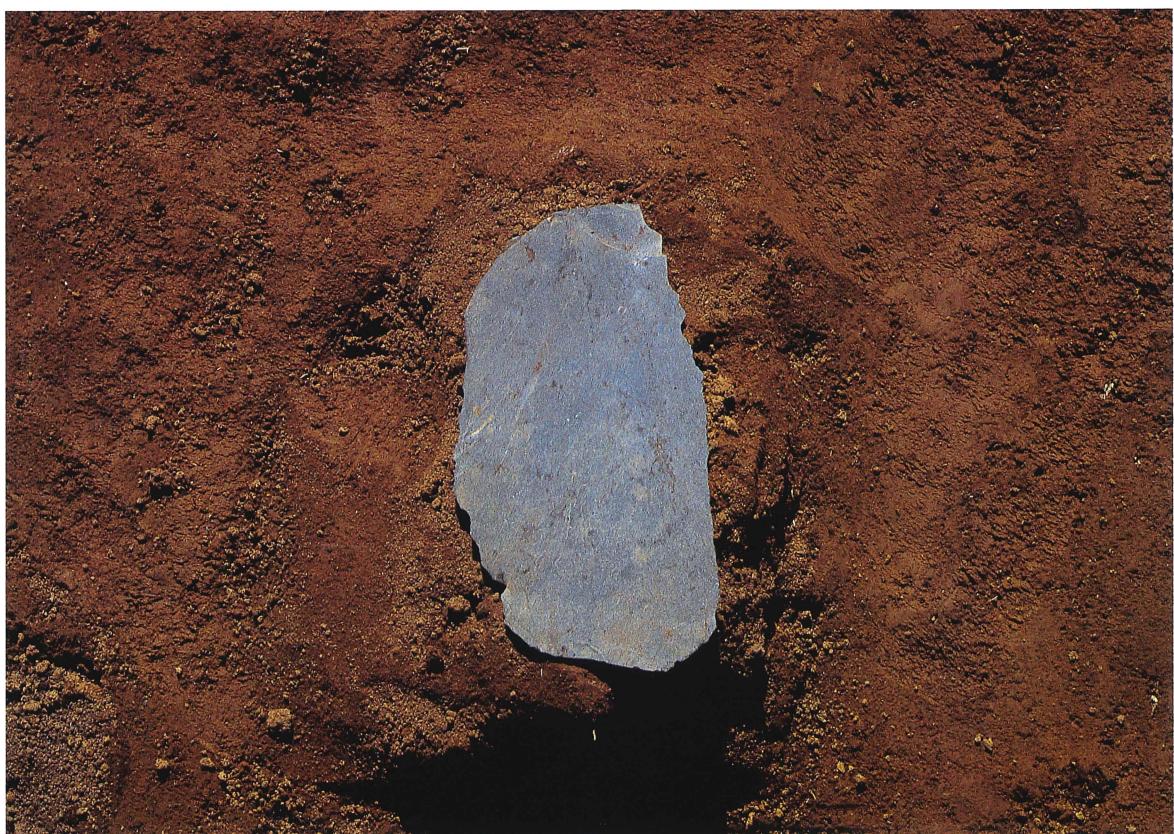
—VI—

1995

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



遺跡遠景（西から）



打製石斧出土状況



ナイフ形石器・尖頭器



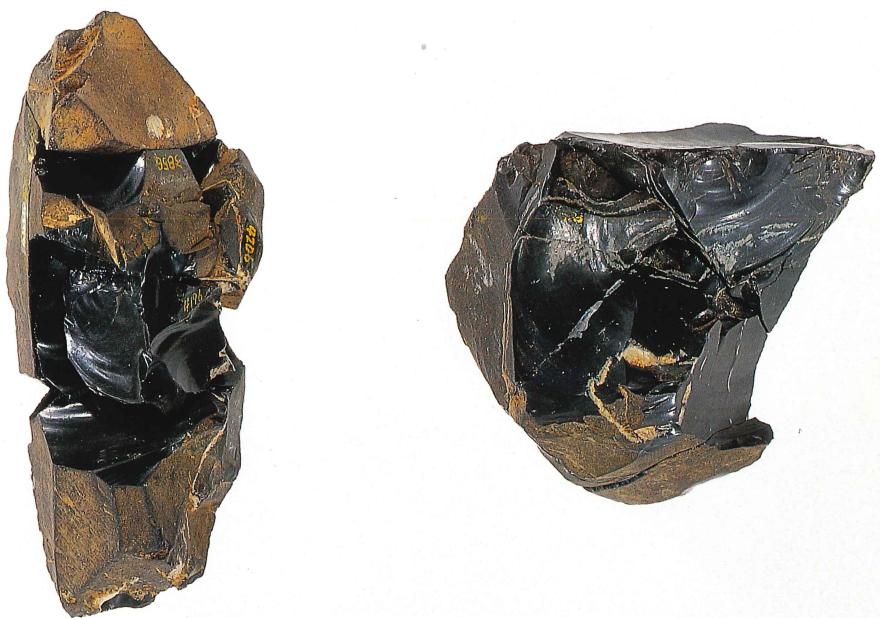
打製石斧



細石核



細石刃



細石器接合資料



黑曜石原石

## 序

埼玉県の位置する首都圏はその基幹道路が、人口の増加に伴う自動車の利用によって飽和状態に近づいています。このままでは慢性的な交通渋滞を招き、本県の発展にも深刻な影響を与えかねません。そこで東京近郊の高速道路を環状に結んで、各都市間を相互に連絡する交通網の整備が切望されていたところであります。首都圏における広域的な多核都市の複合体を作りだしながら、県内各地域の基盤整備としての役目を背負って、首都圏中央連絡自動車道は計画されました。

首都圏中央連絡自動車道は、まず埼玉県鶴ヶ島市から東京都青梅市までの区間で、事業計画が策定されました。しかし県内の建設予定路線内には、埋蔵文化財包蔵地が数多く所在しており、これらの取り扱いについて関係諸機関と慎重に協議が重ねられてまいりました。どうしても避けられない遺跡については建設省の委託を受けて当事業団が発掘調査を実施し、記録保存を行うことになりました。

鶴ヶ島市内には若葉台遺跡や脚折遺跡などの大集落跡がありますが、首都圏中央連絡自動車道の路線内にも向山遺跡をはじめ、横田・柳戸・青棚・新山・三ツ木・後Aの7遺跡が所在しております。本書はこの内の横田遺跡の調査記録をまとめたものであります。

横田遺跡からは先土器時代から奈良時代までの、多くの遺物や遺構が出土しました。特に先土器時代については、終末期にあたる尖頭器文化と細石器文化に属する5000点近くにものぼる石器が検出されました。どちらも県内ではかつて、本遺跡に匹敵するだけの資料はなく、本県文化の歴史の空白を埋める貴重な資料といえます。

本書はこれらの成果をまとめたものであり、埋蔵文化財の保護や学術研究の基礎資料として、また、普及・啓発や教育機関の参考資料として広く御活用いただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査から本書の刊行に至るまで御指導、御協力をいただきました埼玉県生涯学習部文化財保護課をはじめ、建設省大宮国道工事事務所・埼玉県土地開発公社圏央道事務所・鶴ヶ島市教育委員会、並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成7年9月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
理 事 長 荒 井 桂

## 例 言

1. 本書は、埼玉県鶴ヶ島市大字三ツ木732番地の1他に所在する横田遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査届けに対する文化庁長官からの指示通知は以下のとおりである。

平成3年7月5日付け委保第5の875号

平成3年7月8日付け委保第5の878号

平成5年4月21日付け委保第5の4号

平成5年11月2日付け委保第5の1359号

2. 遺跡名の略号は、YKTである。

3. 本遺跡の発掘調査は、首都圏中央連絡自動車道の建設に伴う事前調査である。埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整のもと、建設省大宮国道工事事務所からの委託によって、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4. 発掘調査は各年度ごとに下記の職員が担当した。

平成3年4月1日～平成3年9月30日

井上尚明・佐藤康二

平成4年11月1日～平成4年12月31日

村田健二・石坂俊郎

平成5年8月1日～平成6年1月31日

田中英司・上野真由美

整理作業は田中英司が担当して、平成6年4月1

日から平成7年9月30日まで行った。発掘調査と整理作業の組織は第I章に記述した。

5. 遺跡の基準点測量と航空写真は朝日航洋株式会社、黒曜石の化学分析については(株)第四紀研究所に委託した。

6. 航空写真以外の発掘調査時の写真については、前記した各担当者が撮影した。報告書に用いた遺物写真については巻頭カラー写真を小川忠博氏に委託し、その他は田中英司が撮影した。

7. 出土品の整理と図版の作成、本文の執筆については、縄文土器について黒坂禎二、奈良時代の土器については大谷徹、それ以外は田中英司が担当した。

8. 本書の編集は資料部長塩野博、同副部長谷井彪の監修のもと、資料整理第一課の田中英司が行った。

9. 本書にかかる資料は平成8年度以降、県立埋蔵文化財センターが保管する。

10. 発掘調査ならびに報告書作成に際しては、下記の方々・機関から御教示を賜った。(敬称略)

麻生 優・早川 泉・白石浩之・岡本東三・荒井幹夫・実川順一・織笠 昭・堤 隆・鶴ヶ島市教育委員会

## 凡 例

1. X・Y座標による表示は、国家標準直角座標第IX系に基づく座標値を表し、方位はすべて座標北を示した。
2. 横田遺跡に関しては、『(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団年報(12~14)』・『埋文さいたま』第17号などに概要が掲載されているが、遺物の考察や遺構数については本書が優先する。
3. 縮尺は原則として先土器時代石器集中図を1／60、礫群実測図を1／30、先土器時代石器実測図については細石刃は1／1、それ以外は4／5を基本とした。先土器時代以降については、縄文・奈良時代の遺構図を1／60、縄文土器拓影図を1／2、奈良時代の土器実測図を1／4、石器については石鏃を1／1、それ以外は1／3にした。例外は挿図中に記入した。
4. 先土器時代の石器集中に用いた記号は、それぞれ挿図中に凡例を示した。縄文・奈良時代の遺構図中の網かけは、炉址と焼土の範囲を示した。
5. 土層説明中の色調については『新版標準土色帖』によった。

# 目 次

口 絵

序

例 言

凡 例

目 次

I 調査の概要 .....	1	V 繩文・奈良時代 .....	197
1. 調査に至る経過 .....	1	1. 遺構 .....	197
2. 発掘調査・報告書作成の経過 .....	2	2. 遺物 .....	211
3. 発掘調査・報告書刊行事業の組織 .....	3	VI 結語 .....	227
II 遺跡の立地と環境 .....	5	1. 調査成果 .....	227
III 遺跡の概要と層位 .....	7	2. 先土器時代の問題 .....	227
IV 先土器時代 .....	10	付編	
1. 遺構 .....	10	横田遺跡出土の黒曜石製石器の化学分析 .....	240
2. 遺物 .....	41		

## 挿図目次

第1図 横田遺跡の位置	6	第36図 尖頭器(2)	49
第2図 遺跡周辺の地形	8	第37図 尖頭器(3)	50
第3図 遺跡層位図	9	第38図 尖頭器(4)	51
第4図 先土器時代調査深度図	11	第39図 尖頭器(5)	52
第5図 先土器時代遺構・遺物分布	12	第40図 尖頭器(6)	53
第6図 石器集中1・2	15	第41図 尖頭器(7)	54
第7図 石器集中3	16	第42図 尖頭器(8)	55
第8図 石器集中4	17	第43図 細石核(1)	56
第9図 集中1~4の石器	18	第44図 細石核(2)	57
第10図 石器集中5	19	第45図 ブランク(1)	58
第11図 石器集中6	20	第46図 ブランク(2)	59
第12図 石器集中7	21	第47図 ブランク(3)	60
第13図 石器集中8	22	第48図 調整剝片	61
第14図 石器集中9・10	23	第49図 細石刃(1)	62
第15図 集中5~10の石器	24	第50図 細石刃(2)	63
第16図 石器出土状態	25	第51図 細石刃(3)	64
第17図 石器集中11	26	第52図 細石刃(4)	65
第18図 集中11の石器(1)	27	第53図 細石刃(5)	66
第19図 集中11の石器(2)	28	第54図 細石刃(6)	67
第20図 石器集中12	29	第55図 削器・搔器(1)	68
第21図 石器集中13	30	第56図 削器・搔器(2)	69
第22図 集中12~13の石器	31	第57図 削器・搔器(3)	70
第23図 石器集中14	32	第58図 削器・搔器(4)・石錐・楔状石器	71
第24図 石器集中15	33	第59図 削器・搔器(5)	72
第25図 石器集中16	34	第60図 打製石斧	73
第26図 石器集中17	35	第61図 磔 器	74
第27図 集中14~17の石器	36	第62図 敲 石	75
第28図 磔群(1)	37	第63図 台石(1)	76
第29図 磔群(2)	38	第64図 台石(2)	77
第30図 石器・礫接合図(1)	39	第65図 石核(1)	78
第31図 石器・礫接合図(2)	40	第66図 石核(2)	79
第32図 石器実測図の表記	42	第67図 石核(3)	80
第33図 ナイフ形石器(1)	46	第68図 石核(4)・原石	81
第34図 ナイフ形石器(2)	47	第69図 剥 片	82
第35図 尖頭器(1)	48	第70図 接合資料(1)	84

第 71 図 接合資料(2) .....	85
第 72 図 接合資料(3・4) .....	86
第 73 図 接合資料(5の1) .....	87
第 74 図 接合資料(5の2) .....	88
第 75 図 接合資料(6) .....	89
第 76 図 接合資料(7) .....	90
第 77 図 接合資料(8・9) .....	91
第 78 図 接合資料(10) .....	92
第 79 図 遺構分布 .....	198
第 80 図 繩文時代遺構・遺物分布 .....	199
第 81 図 1号住居跡 .....	202
第 82 図 2号住居跡 .....	203
第 83 図 遺構出土繩文土器 .....	204
第 84 図 3号住居跡 .....	205
第 85 図 3号住居跡遺物分布 .....	206
第 86 図 3号住居跡出土遺物 .....	207
第 87 図 土壌(1) .....	208
第 88 図 土壌(2) .....	209
第 89 図 集石 .....	210
第 90 図 遺構外出土土器(1) .....	215
第 91 図 遺構外出土土器(2) .....	216
第 92 図 遺構外出土土器(3) .....	217
第 93 図 遺構外出土土器(4) .....	218
第 94 図 遺構外出土土器(5) .....	219
第 95 図 繩文時代の石器(1) .....	222
第 96 図 繩文時代の石器(2) .....	223
第 97 図 繩文時代の石器(3) .....	224
第 98 図 繩文時代の石器(4) .....	225
第 99 図 尖頭器の長軸方向 .....	228
第 100 図 石質別石器群 .....	230
第 101 図 石質別石器分布(1) .....	231
第 102 図 石質別石器分布(2) .....	232
第 103 図 細石刃の計測値 .....	233
第 104 図 二次加工のある細石刃分布 .....	234
第 105 図 大谷川周辺の細石器遺跡 .....	235
第 106 図 黒曜石別細石器 .....	237
第 107 図 黒曜石化学分析 .....	243

## 表 目 次

第1表 先土器時代石器組成表 .....	43
第2表 先土器時代石器一覧 .....	93
第3表 先土器時代礫一覧 .....	178
第4表 繩文時代石器一覧 .....	226
第5表 化学分析表 .....	241

## 図 版 目 次

図版1 遺跡全景 遺跡全景(南から)	石器集中3 調査風景
図版2 石器集中1 石核(石器集中1)	図版5 打製石斧(石器集中4) 石器集中5 調査風景
図版3 石器集中2 削器	図版6 石器集中6 台石(石器集中6)
図版4 石器集中3	図版7 磕器(石器集中6) 敲石(石器集中6)

図版8	ナイフ形石器(石器集中8)	石核(2)
	石核	図版27 接合資料(ホルンフェルス母岩1)
図版9	石器集中11(南から)	縦長剥片(ホルンフェルス母岩1)
	石器集中11(北から)	図版28 尖頭器未製品
図版10	剥片・石核(石器集中12)	黒曜石原石
	尖頭器(石器集中13)	図版29 1号住居跡
図版11	調査風景	2号住居跡
	石器集中14	図版30 3号住居跡
図版12	石器集中15	3号住居跡カマド
	台石(石器集中15)	図版31 1号土壙
図版13	細石核(石器集中15)	18号土壙
	石器集中17	図版32 6号土壙(1)
図版14	石器出土状態の記録(1)	6号土壙(2)
	石器出土状態の記録(2)	図版33 3号集石
図版15	1号礫群	4号集石
	2号礫群	図版34 縄文土器(1)
図版16	3号礫群	縄文土器(2)
	4号礫群	図版35 縄文土器(3)
図版17	ナイフ形石器	縄文土器(4)
	尖頭器(1)	図版36 縄文土器(5)
図版18	尖頭器(2)	石鎌
	尖頭器・碎片(チャート母岩1)	図版37 スタンプ形石器
図版19	細石核	磨石・石皿
	細石刃	図版38 86—2
図版20	細石核接合資料	86—3
	調整剥片	86—8
図版21	細石器接合資料(黒曜石母岩2)	86—1
図版22	礫器	86—9
	敲石	図版39 墨書き土器(86—2)
図版23	削器・搔器(1)	墨書き土器(86—1)
	削器・搔器(2)	図版40 反射電子写真: 資料No.1(上)・
図版24	打製石斧	資料No.2(中)・資料No.3(下)
図版25	台石(1)	図版41 反射電子写真: 資料No.4(上)・
	台石(2)	資料No.5(下)
図版26	石核(1)	

# Ⅰ 調査の概要

## 1. 調査に至る経過

首都圏中央連絡自動車道は、東京都心から40～50kmに位置する中核都市を相互に連結するとともに、首都圏から放射状にのびる各高速道路（東名・中央・関越・東北・常磐・東関東）を結び、地域間の交通の円滑化及び土地利用の適正化を図ることを目的として計画された。埼玉県内では入間市の都県境から関越自動車道鶴ヶ島ジャンクションまでの延長19.8kmで事業が進められてきた。本県としても県内の主要都市間を1時間以内で移動できる道路網の整備構想のもとに、積極的に本事業の推進を図ってきたところである。

当事業にかかる埋蔵文化財包蔵地の取り扱い等について文化財保護課では、昭和62年度に関係市町村教育委員会の協力を得て分布調査を実施してきた。併せて、事業の進捗状況に応じて、関係者間で協議を重ねてきた。

建設省事業地については、平成元年7月24日付け大國調第117号、平成2年3月30日付け大國調第30号、平成3年6月21日付け大國調二第5号で、関東地方建設局大宮国道建設事務所長から埼玉県教育委員会教育長あて、埋蔵文化財包蔵地の所在について照会があった。

文化財保護課では分布調査の結果等にもとづき、それぞれ平成元年9月4日付け教文第703号、平成2年4月16日付け教文第37号、平成3年8月19日付け教文第397号で次の埋蔵文化財包蔵地の所在等について回答した。

日高市（谷津遺跡・西ノ久保遺跡・長山甲遺跡・上猿ヶ谷戸遺跡）

川越市（光山遺跡・笛原遺跡）

鶴ヶ島市（向山遺跡・横田遺跡・柳戸遺跡・青棚遺跡・新山遺跡・三ツ木遺跡・後A遺跡）

上記の埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、事業の計画変更が不可能と判断されたので、記録保存の措置を講ずることとし、発掘調査の実施について建設省関東地方建設局大宮国道事務所・文化財保護課・財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の三者で協議をした。その結果、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施することとなった。

平成2年4月18日付け建関道第145号で建設省関東地方建設局長から、文化財保護法第57条の第3項の規定による埋蔵文化財発掘について通知が提出された。文化財保護法第57条第1項の規定による発掘届は、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から平成2年6月27日付け財理文第607号で提出された。発掘調査は事業の進展に応じ、平成3年～5年度に継続された。各年度の発掘調査届及びこれに対する文化庁長官の通知は、以下のとおりである。

平成3年3月30日付け財理文第954号

平成4年11月20日付け財理文第549号

平成5年7月21日付け財理文第297号

平成3年7月5日付け委保第5の875号

平成3年7月8日付け委保第5の878号

平成5年4月21日付け委保第5の4号

平成5年11月2日付け委保第5の1359号

（文化財保護課）

## 2. 発掘調査・報告書作成の経過

首都圏中央連絡自動車道、略して「圏央道」に関わる埋蔵文化財の発掘調査は、埼玉県内では昭和63年度から日本道路公団地区から開始された。横田遺跡に関する建設省の工事地区では、平成元年度から対象遺跡について発掘調査が始まった。

鶴ヶ島市三ツ木に所在する横田遺跡は、平成3年度より可能な範囲から部分的に発掘調査が始まり、平成5年度に全対象範囲の調査が終了した。

### 発掘調査

**平成3年度** 平成3年4月1日から9月30日まで行った。遺跡範囲の東側部分の約4800m<sup>2</sup>が発掘調査対象となった。表土剥ぎの後、遺構確認に入る。全体に耕作による攪乱が激しい。先土器時代についてはIII層のソフト・ロームからハード・ローム層にかけて、尖頭器や細石器の集中が2箇所発見された。縄文時代では落し穴状の遺構と早期などの土器片が見つかった。それ以外の時期では奈良時代の住居跡が1軒と、中・近世かと思われる土壙が検出された。

**平成4年度** 平成4年11月1日から平成4年12月31日までの期間で、遺跡西部の400m<sup>2</sup>を調査した。その結果、前年度に引き続き細石器を中心とした先土器時代の石器集中3箇所と、縄文前期黒浜期の住居跡2軒が見つかった。住居は一辺が2mあまりの小形の住居であった。

**平成5年度** 平成5年8月1日から平成6年1月31日まで、遺跡の残り部分4100m<sup>2</sup>の調査を行った。先

土器時代の石器集中が12箇所、礫群4箇所が検出された。石器集中は北寄りに尖頭器が多く、南にいくにつれて細石器やナイフ形石器が認められた。縄文時代では引き続き黒浜期の土器片が出土したが、同時期と思われる集石が見つかったのみで、住居跡等は検出されなかった。1月に遺跡全景の航空写真を撮影した後、すべての現地作業を終了した。

### 整理事業

**平成6年度** 報告書作成事業は平成6年4月1日から平成7年9月30日まで実施した。平成6年度は4月から図面整理、石器の水洗・注記・計測・分類、同じく土器の水洗・注記・接合・復元を行った。

先土器時代の石器については、計測等の作業が終了したものから順次、実測・トレースを行った。年度中は、主にこの作業に集中した。パソコンを使った遺物分布図の作成、計測表も同時に作成した。礫群などの遺構についても下図を作成した。縄文式土器については、拓本を探り、断面を実測した。土師器等についても同じく実測を行った。

**平成7年度** 4月から遺構の図面、石器の実測図・土器の実測図をトレースをして版組・割り付けを開始した。版組みが終了した時点で、遺物の写真撮影をした。現像から紙焼きをして写真図版を作成した。

各作業と並行して、原稿を執筆し、9月に原稿と版下を印刷所に納めた。校正作業を経て報告書を刊行した。

### 3. 発掘調査・報告書刊行事業の組織

#### (1) 発掘調査(平成3年度)

理事長 荒井修二  
副理事長 早川智明  
常務理事兼 倉持悦夫

管理部長

理事兼調査部長 栗原文藏  
庶務経理

庶務課長 高田弘義  
主査 松本晋  
主任 長滝美智子  
経理課長 関野栄一  
主事 江田和美  
主事 福田昭美  
主事 腰塚雄二  
主事 菊池久

発掘調査

調査副部長 梅沢太久夫  
調査第一課長 坂野和信  
主任調査員 井上尚明  
調査員 佐藤康二

#### (2) 発掘調査(平成4年度)

理事長 荒井修二  
副理事長 早川智明  
常務理事兼 倉持悦夫  
管理部長

理事兼調査部長 栗原文藏  
庶務経理

庶務課長 萩原和夫  
主査 賢田清  
主任 菊池久  
経理課長 関野栄一  
主任 江田和美  
主事 福田昭美  
主事 腰塚雄二

発掘調査

調査副部長 梅沢太久夫  
調査第二課長 坂野和信  
主査 村田健二  
主任調査員 石坂俊郎

#### (3) 発掘調査(平成5年度)

理事長 荒井桂  
副理事長 富田真也  
専務理事 横川好富  
常務理事兼  
管理部長 柴崎光生  
理事兼調査部長 中島利治  
庶務経理  
庶務課長 萩原和夫  
主査 賢田清  
主任 菊池久  
主事 関野栄一  
主任 江田和美  
主事 長滝美智子  
主任 福田昭美  
主事 腰塚雄二

発掘調査

調査副部長 高橋一夫  
調査第二課長 大和修  
主査 田中英司  
調査員 上野真由美

#### (4) 整理事業(平成6年度)

理事長 荒井桂  
副理事長 富田真也  
専務理事 桜原嗣雄  
常務理事兼  
管理部長 加藤敏昭  
理事兼調査部長 小川良祐  
庶務経理  
庶務課長 及川孝之

主査	市川 有三	常務理事兼	
主事	長瀧 美智子	管理部長	新井 秀直
主事	菊池 久	理事兼調査部長	小川 良祐
専門調査員兼		庶務経理	
経理課長	関野 栄一	庶務課長	及川 孝之
主任	江田 和美	主査	市川 有三
主事	福田 昭美	主任	長瀧 美智子
主事	腰塚 雄二	主事	菊池 久
整理事業		専門調査員兼	
資料部長	塩野 博	経理課長	関野 栄一
資料副部長兼		主任	江田 和美
資料整理第一課長	谷井 彪	主任	福田 昭美
主査	田中 英司	主任	腰塚 雄二
整理事業		整理事業	
(5) 整理事業(平成7年度)		資料部長	塩野 博
理事長	荒井 桂	主幹兼資料副部長兼	
副理事長	富田 真也	資料整理第一課長	谷井 彪
専務理事	吉川 国男	主査	田中 英司

## II 遺跡の立地と環境

横田遺跡の位置する鶴ヶ島市は、武藏野台地の東部地域にあたる。坂戸・鶴ヶ島台地と呼ばれ、高麗川によって形成された扇状地の中央部に立地している。この坂戸・鶴ヶ島台地は東方に傾斜していて、横田遺跡はその標高40m付近に位置している。関越自動車道の西にあたり、東武東上線の鶴ヶ島駅から同じく西におよそ3kmである。

鶴ヶ島市の周囲には湧水が多く、そこを水源とする小河川が台地を横切っている。横田遺跡の西端にもこうした小河川の一つである大谷川が流れ、下広谷で他の河川と合流し越辺川に注ぎ込んでいる。遺跡はこの大谷川右岸の台地上にあり、低地との比高差は1mほどである。台地の周辺は川に沿って突出したり、小さな谷を作り出したりしながら複雑な地形を成している。

横田遺跡の主要な時代の関連遺物を近隣にもとめると、先土器時代遺跡では横田遺跡の東方約3kmの鶴ヶ丘遺跡が著名である(埼玉県教育委員会1976)。ただし鶴ヶ丘遺跡はナイフ形石器の砂川期に属する石器群であり(田中1987)、横田遺跡からは同時期の石器群は出土していない。

圈央道関連の遺跡では横田遺跡に連なる柳戸・向山・新山遺跡などから、先土器時代の石器が出土して

いる(埼玉県埋蔵文化財調査事業団1995)。横田遺跡の北東に隣接する柳戸遺跡からは、細石器文化の石器集中が3箇所検出された。8点の細石核が出土したことは、横田遺跡との位置関係からも注目される。向山遺跡でも尖頭器と細石刃が数点出土している。横田遺跡の南西1kmあまりに位置する新山遺跡からも細石器文化の石器集中が3箇所見つかっている。細石核も6点出土しており、横田遺跡との関係が注目される(第1図)。

縄文時代では柳戸・向山遺跡で横田遺跡と同じく山型の押型文土器が出土しているが、横田遺跡に認められたような黒浜期の住居跡は確認されていない。Tピットと呼ばれる土壙は7基検出されている。同様の土壙は新山・向山・柳戸遺跡でも見つかっており、大谷川に面した台地の縁辺に広く設置されていたことがわかる。

横田遺跡で1軒のみ確認された奈良時代の住居跡の類例については隣接地ではなく、およそ2km北方の光山遺跡群が当該期の大集落である(埼玉県埋蔵文化財調査事業団1994)。横田遺跡の範囲以外にも当時期の遺構が存在する可能性も考えられるが、光山遺跡群ほどの大集落を形成するかは疑問である。

## 引用・参考文献

埼玉県教育委員会 1976『鶴ヶ丘』埼玉県遺跡調査報告第8集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1985『鶴ヶ丘(E区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第45集

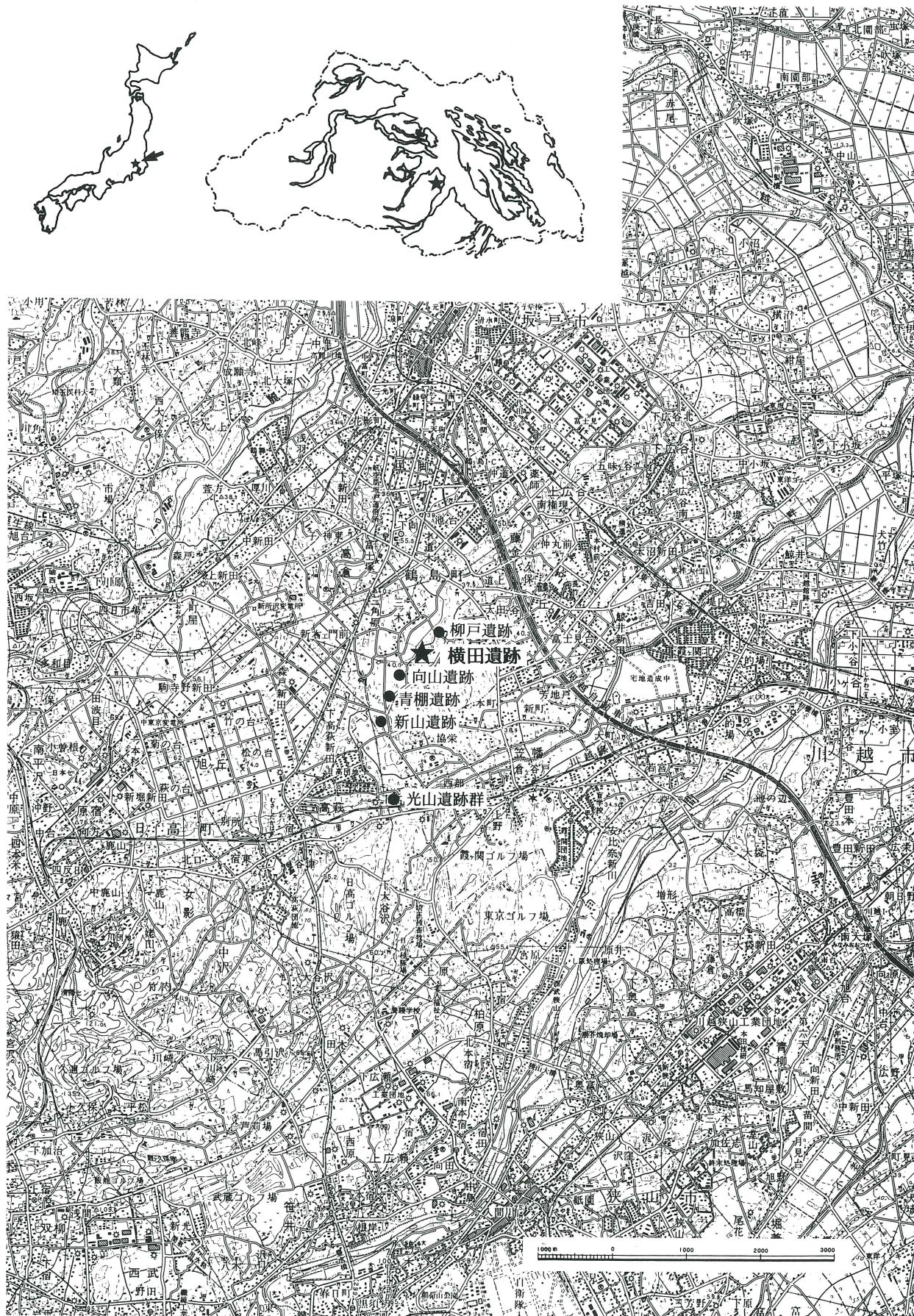
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994『光山遺跡群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第137集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995『柳戸／新山／向山／青棚／光山遺跡群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第154集

田中英司 1987「埼玉の先土器文化」埼玉の文化財第27号 p. 4~41

鶴ヶ島町 1991『鶴ヶ島町史—原始・古代・中世編—』

第1図 横田遺跡の位置



### III 遺跡の概要と層位

横田遺跡は大谷川右岸の台地上に位置している。遺跡の標高は40m前後で、低地との比高差は約1mほどと大きくない。横田遺跡が所在する台地は大谷川に沿って凹凸を描きながら、小さな谷を作り出している(第2図)。遺跡はその谷のもっとも突き出した部分に位置する。

調査以前の横田遺跡は縄文前期・中期の集落址として周知されていた。現況は畠地とそれに続く山林であり、耕作等による影響を遺跡全体が受けている。表土も20cm前後と薄く、縄文時代の土器片が表面に散布していた。

横田遺跡の層位については第3図に掲げた。色調については『新版標準土色帖』によった。

第I層は黒褐色土層で、色調は10YR2/3。20cm前後の層厚を持ち、粘性はなく砂質。耕作土であり、トレンチャーによる攪乱が縦横に走る。現代のゴミから縄文土器片までを含む。

第II層は黄褐色土層で、色調は10YR4/3。I層と同じく20cm前後の層厚を持ち、やや砂質。若干の炭化粒と赤色のスコリア粒を微量に含む。下部にいくほどローム質となり、次のIII層への漸移層的な性格を持つ。先土器時代の石器群が出土し始める。

第III層は黄褐色土層で、色調は10YR5/6。いわゆる

ソフト・ローム層で、先土器時代石器群の包含層である。30cm前後の層厚がある。軟質でやや粘性があり、赤色のスコリア粒を微量に含む。

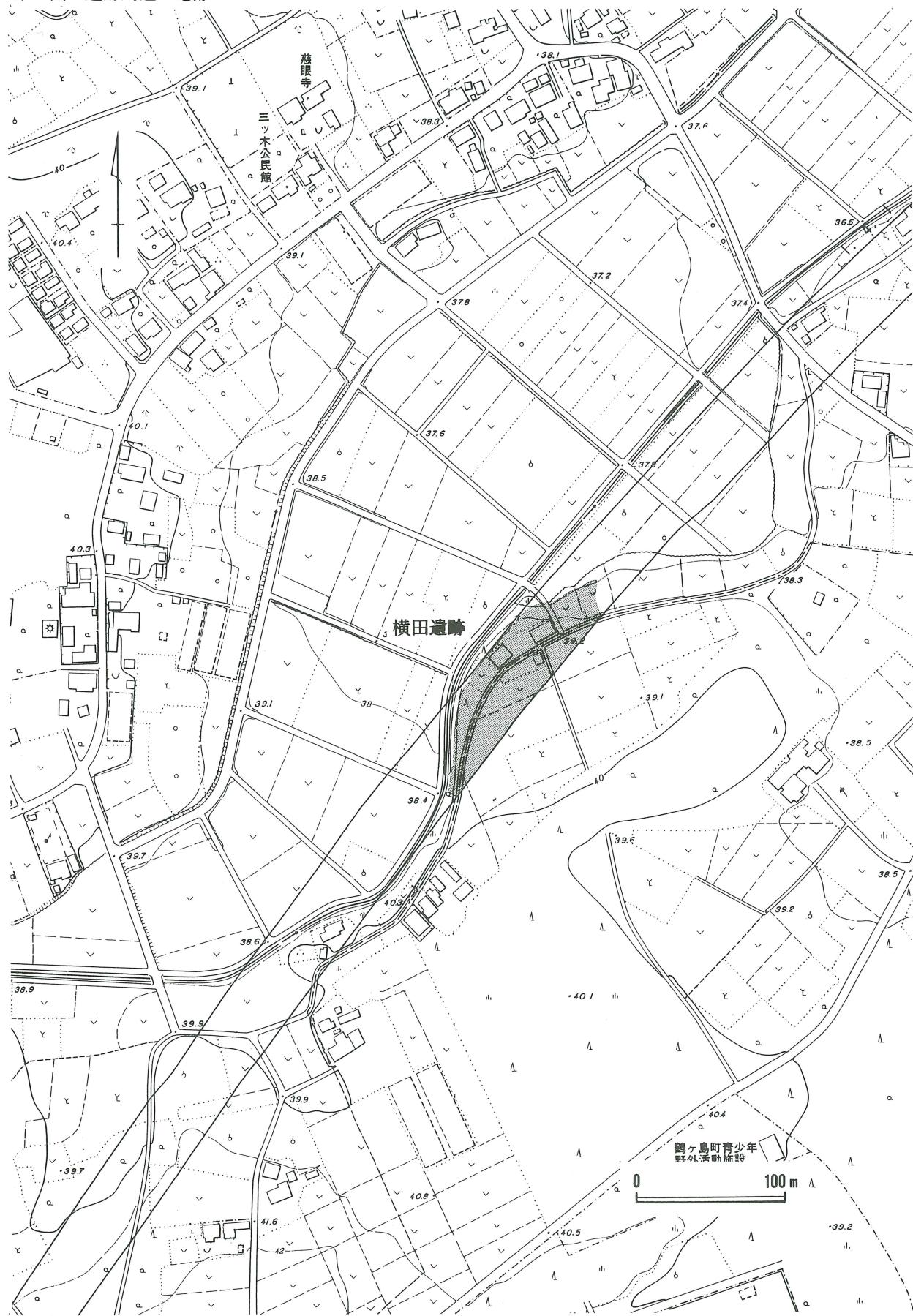
第IV層は黄褐色土層で、色調は10YR5/8。いわゆるハード・ローム層にあたる。粘性があり、堅くしまる。III層との境界では、引きちぎられたように凹凸を描く。先土器時代の資料はこの層の上半部まで続く。

第V層は暗褐色土層で、色調は10YR3/4。V層に比べて、黒色が強い。40cm前後の層厚を持つ。武蔵野台地で認められる、いわゆる第II黒色帯の上半部に相当すると考えられる。粘性があり、白色の火山ガラスの粒子が混入してくる。IV層上面に顕著だったソフト化は、一部本層にまで及んでいる。

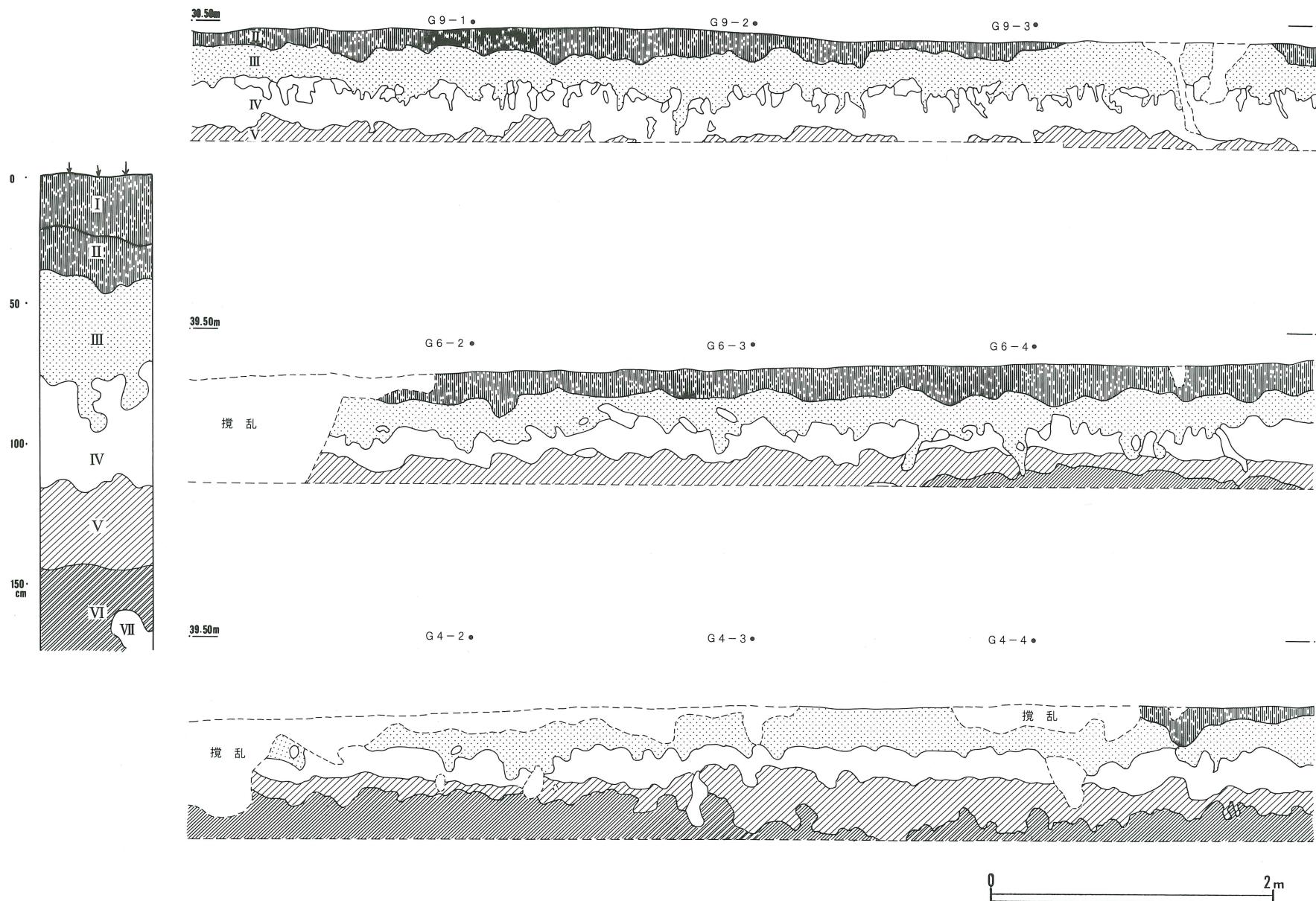
第VI層は暗褐色土層で、色調は10YR3/3。V層よりもはるかに黒味が強い。50cm前後の層厚を持ち、V層と同じく、白色の火山ガラスが混入する。粘性があり、下部にいくほど水気を帶びて、有機質が腐蝕したような黒い混入物が目につく。第II黒色帯の下半部に相当すると思われる。

第VII層は暗褐色土層で、色調は10YR3/4。VI層の中に一部レンズ状に入り込む。谷に面した斜面付近で認められることが多い。粘性があり水気を強く帶びて、VI層と同じく、層中に黒色の有機物を多く含む。

第2図 遺跡周辺の地形



第3図 遺跡層位図



# IV 先土器時代

横田遺跡の先土器時代の調査は、平成3年度から台地東部のもっとも標高の高い部分からはじまった。細石器等が出土していた第III層を中心として進められ、一部は第V層まで確認のためのグリッドが深掘りされた(第4図)。翌平成4年度には台地西端の小範囲が調査されて、やはり細石器が出土した。平成5年度には残りの部分の調査が進められて第III層をほぼ完掘し、第IV層から第VI層までおよんだ。ただし、第V層以下は水気を帯びて、さらに低地に近づくと湧水があり調査の遂行が困難となった。

石器は第III層からIV層上部を中心として出土し、第V層以下の層からは検出されなかった。

## 1. 遺構

### 1 石器集中

ここで石器集中と呼ぶのは、あくまでも調査時・整理時に視覚的に抽出した集中範囲を便宜的に設定したもので、それ以上のものではない。個々に集中の密度は異なり、無論、その範囲についても明確に区切ることは不可能である。ひとつの集中には同時期の石器群も含まれるが、当然時期の異なる石器も混在しているよう。

横田遺跡からは、おおよそ17箇所のまとまりとして認識できる先土器時代の石器集中箇所が検出された。各集中は北から南へと順に番号を付した(第5図)。

石器集中は台地の張り出しに沿って、西半部に弧状を成すように分布している。東半部、特に台地の奥部に続く標高のもっとも高い範囲には確認されていない。個々の集中について以下に説明を加える。

#### 石器集中1(第6・9図)

遺跡の北部にあたるE・F9グリッド付近に位置する。IV層の上面を中心として、平面的には長径3mほどの規模である。10点前後の石器からなり、集中の密度は薄い。1号礫群と重複する。石器は黒曜石製の横長剝片を用いたナイフ形石器(637)、凝灰岩製の石核

(875)などがある。石器の特徴と、他の集中よりも下位に位置する出土層位からして、尖頭器や細石器よりも古期の石器群と思われる。

#### 石器集中2(第6・9図)

F9グリッドにあり、長径6mほどと他と比較して大形である。III層中に400点を越える碎片や尖頭器が検出された、尖頭器の製作址である。本遺跡の尖頭器は黒曜石製のものが殆どを占めるが、本集中にはチャート製同一母岩の尖頭器未製品(333・262)とその碎片が多数認められる。

#### 石器集中3(第7・9図)

F・G9グリッドに位置する。II層下面からIII層にかけて出土する。長径6m前後の細長い分布となっているが、これは集中の南東部を現道によって削平されているためで、本来はさらに南東に分布が伸びていたと考えられる。構成する石器は11点の黒曜石製尖頭器の未製品と300点を越える多数の碎片を含む、尖頭器の製作址である。

#### 石器集中4(第8・9・16図1)

F7・8グリッドに分布する。III層全体に包含されている。長径6mほどに400点以上の石器が検出された。内容は尖頭器の製作に関連した製品・未製品と碎片類である。やはり尖頭器の製作址であろう。

本集中に関連して注目されるのは、集中密集部の西から粘板岩製の打製石斧が出土したことである(862)。層準の上からもやはり尖頭器石器群の所産とみなされる。石斧の裏面、すなわち素材となった剝片の主要剝離面側を上にし、刃縁を北に向けて出土した(第16図1)。石斧は斧身を東西方向にやや傾けていた。着柄されていたとすれば裏面を使用者側にむける横斧の1種、柄を東西のそれぞれに向ける縦斧で2種考えられる(田中1983)。

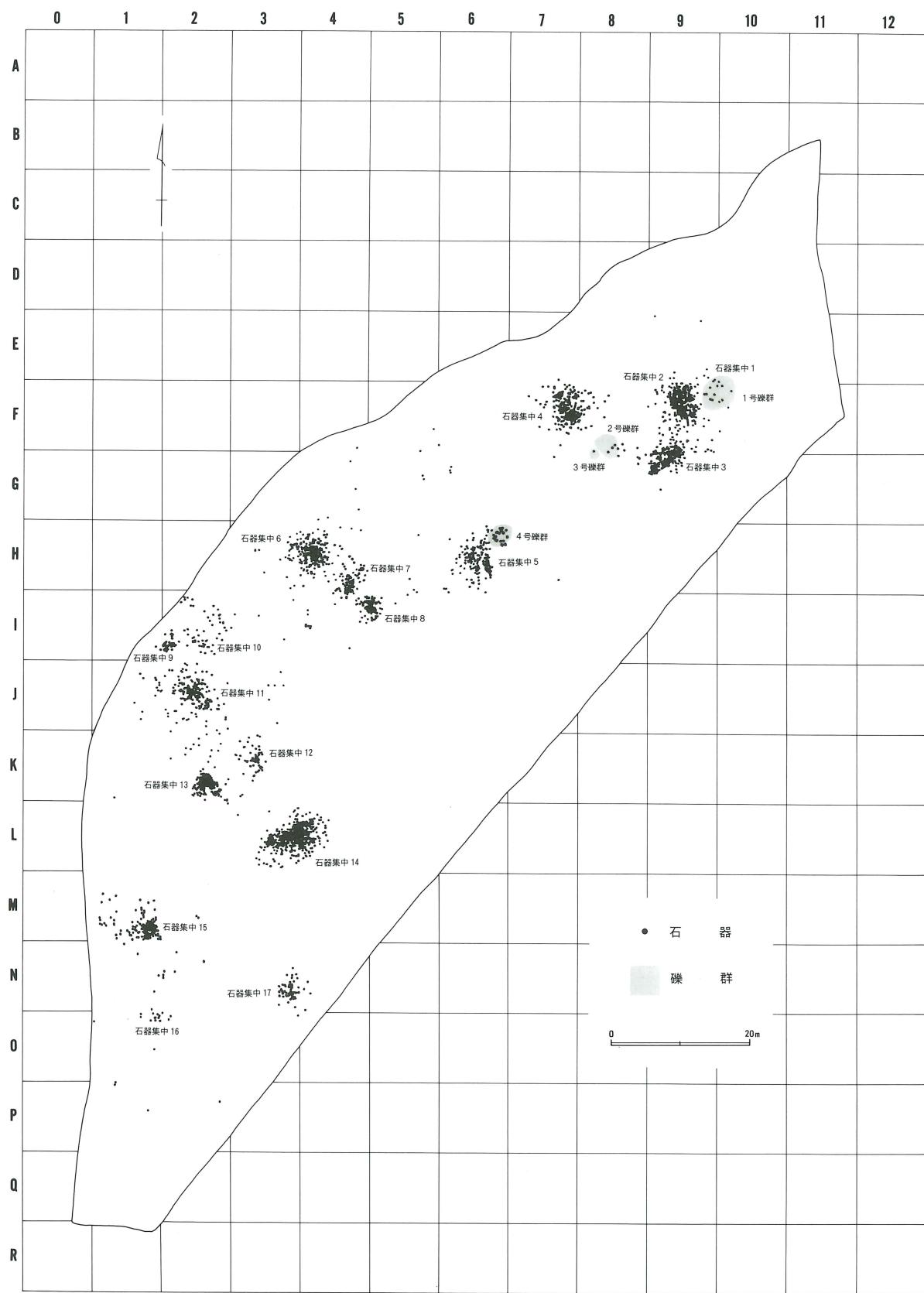
#### 石器集中5(第10・15図)

H6グリッドに広がる。III層全体に包含され、長径8m前後に200点以上の石器が分布している。北部に

第4図 先土器時代調査深度図



第5図 先土器時代遺構・遺物分布



は4号礫群があたり、同一層準であることから本石器集中との関連が推定される。

#### 石器集中6(第11・15・16図2)

H 3・4グリッドに分布する。II層下部からIII層全体にかけて分布している。長径5mほどに300点を越える碎片を中心とした尖頭器の製作址である。その製作址にまじって、礫器・敲石・台石といった大形石器が東半部のIII層上面に点在する。中央がくぼむ台石(2240)は、そのくぼむ正面を上にしてほぼ水平の状態で出土した(第16図2)。台石から1mあまり東に敲石(2241)、2m足らず北東に礫器(2242)が裏面を上にして検出された。尖頭器の製作に加えて、調理や加工処理などの異なる作業の痕跡が混在しているようだ。

#### 石器集中7(第12・15図)

H・I 4グリッドに200点あまりの石器が、長径5mほどに集中していた。集中は北東方向に細長く、III層全体に広がっていた。出土した石器は尖頭器とその碎片類が主の尖頭器製作址であるが、なかに1点細石刃がまじっている(1528)。

#### 石器集中8(第13・15図)

I 4・5グリッドのII層下部からIII層全体にかけて分布していた。長径4mほどに100点足らずの石器集中である。黒曜石製尖頭器の製作址の中に、1点のみ粘板岩製のナイフ形石器(2129)がまじる。

#### 石器集中9(第14・15図)

遺跡最西端のI 1・2グリッドに所在する。長径3mに40点あまりの石器という、密度の疎な集中である。石器もナイフ形石器・尖頭器・細石核の3者が混在している。

#### 石器集中10(第14・15図)

集中9に接する、I 2・3グリッドに位置している。やはり密度は薄く、細石刃・碎片など50点が散在する。集中9と分布を区切りがたい。

#### 石器集中11(第17~19図)

J 1・2グリッドに所在する長径10m、石器数350点を超える、本遺跡でも最大の細石器を中心とした集中である。II層からIII層上面にかけての範囲に集中する

傾向がある。ブランク・細石核・細石刃などを主体とし、安山岩製の削器類(4453・4157・3874・3824・4216)も細石器石器群に属すると考えられる。しかし同じ集中から出土したナイフ形石器(3690・4201・4159)やホルンフェルス製同一母岩の石器群(4003~3833)については、隣接する集中にも存在するため、同一時期か混在かは検討が必要であろう。

#### 石器集中12(第20・22図)

K 3グリッドにあり、III層に分布する長径3m、石器数60点あまりの小規模な集中である。構成する石器は黒曜石製の小形ナイフ形石器(2073~2057)とホルンフェルス製同一母岩の石器群(2024~2028)であり、集中11に認められた同一石器群は本集中を主体とすると考えられる。

#### 石器集中13(第21・22図)

集中12に接する、K 2グリッドに所在する。石器数は170点あまり、長径4mでII層からIII層の上面にかけて分布する。石器は尖頭器を主に、若干の細石刃が混じる。細石刃は西半部にかたよる傾向があり、その延長には細石器主体の集中11が隣接する。

#### 石器集中14(第23・27図)

L 3・4グリッドに位置する。長径10m足らずの細長い集中である。II層からIII層全体にかけて分布し、尖頭器とその碎片を主体とする製作址である。1000点を超える石器の中には、細石刃(2388~2770)も一定量含まれている。

#### 石器集中15(第24・27図)

M 1グリッドに位置し長径5mあまりで、II層からIII層上部にかけて分布している。200点足らずの石器で、ほぼ細石器関係に限られている。集中の中央部には砂岩製の台石(3536)が配置されている。この台石を中心として細石刃製作が行われたと考えられる。

#### 石器集中16(第25・27図)

本遺跡最南端のO 1・2グリッドに所在し長径4mの範囲に、わずか20点足らずの石器がIII層からIV層上面にかけて出土した。石器にはナイフ形石器(2226・2207)や横長剝片の石核(2221)があり、集中1と同じ

く、尖頭器や細石核よりも古期の石器群と考えられる。石器にまじって破碎した小礫が分布する。特に礫群として分離されていないがやはり集中1と同じく、石器集中にかかわる調理遺構かもしれない。

#### 石器集中17(第26・27図)

N 3・4 グリッドに所在する。II層からIII層にかけて分布する長径3mの集中である。70点あまりの石器群で碎片類が多いが、なかに細石刃(3601・3559)が点在する。

## 2 磕群

#### 1号礫群(第28図)

F 9・10グリッドに所在する。224個の礫からなる。IV層の上面を中心として分布する。耕作のためのトレンチャーによって、広範囲に溝状の攪乱を受けている。そのためか平面分布での密度は薄い。8割以上がチャート製礫で占められる。他の礫群よりも下位に位置し、本遺跡では古期の石器群である石器集中1と分布が重複することからも、いわゆる「IV下」の遺構と考えられる。

#### 2号礫群(第29図)

F・G 8 グリッドに分布する。362個の礫が2m四方によく集積し、本遺跡の中では密度は濃い。石器集中4に近接するが、本礫群のほうがやや下位に位置する。1号礫群と同じくIV層のナイフ形石器文化期の所産とも思われるが、使用石材は砂岩が4割近くを占めている。

#### 3号礫群(第29図)

2号礫群に接するように、やはりF・G 8 グリッドに所在する。19個の礫で構成されるごく小規模の礫群である。IV層上面という層位の点からも2号礫群の一部とも思われるが、使用石材はチャートがほとんどで

その点では異なる。

#### 4号礫群(第29図)

H 6 グリッドにある。1m四方の範囲に72個の礫からなる。尖頭器の製作址である石器集中5に接している。垂直分布でもIII層の同一層準に位置し、石器集中5と同一時期の可能性が高い。

## 3 接合関係

#### 石器の接合(第30・31図)

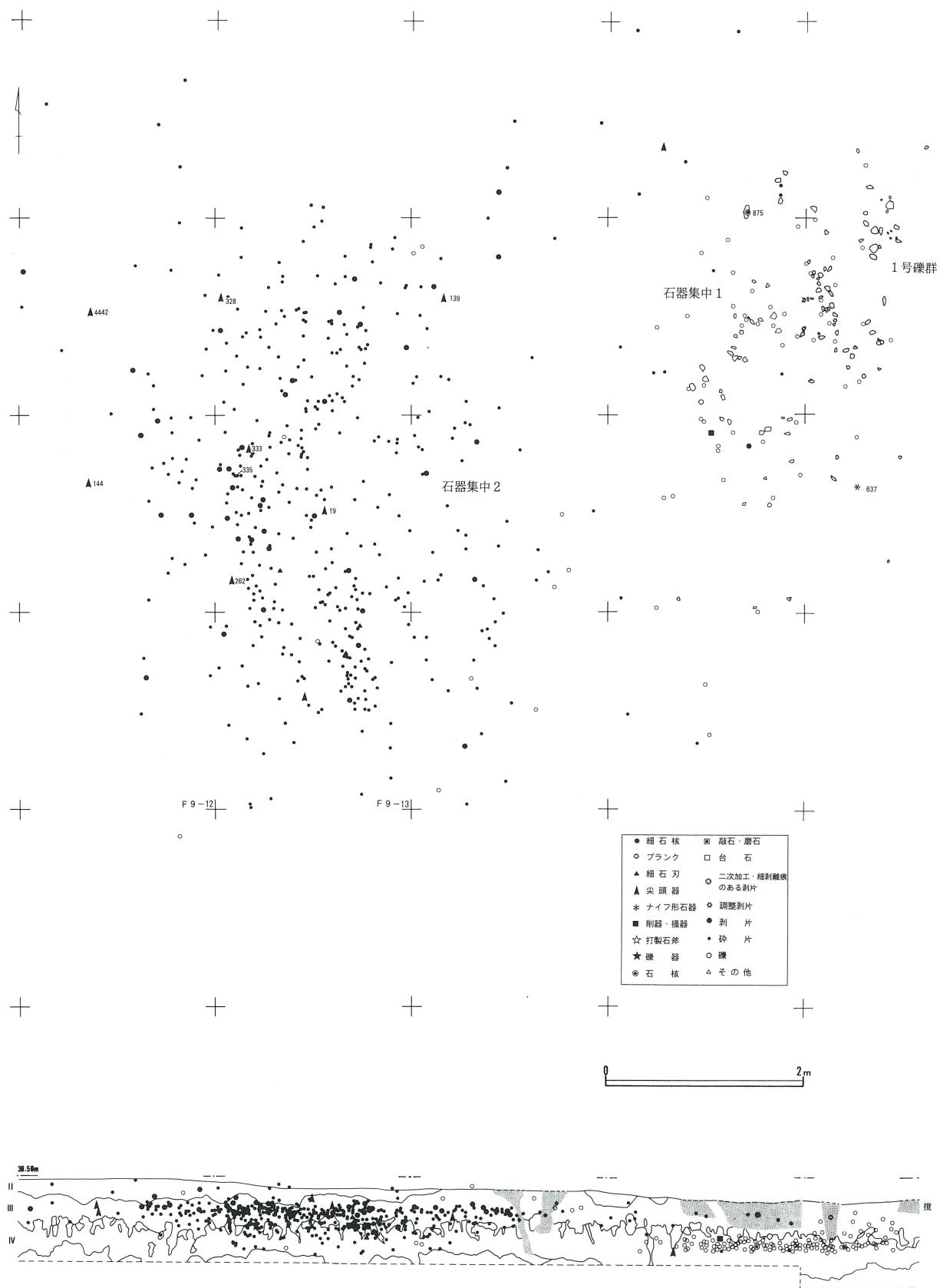
石器の接合関係は尖頭器と細石器に関連した、集中2・6・8～15に認められる。尖頭器と細石器のどちらも母岩に分けにくい黒曜石製のものがほとんどで、その点では総点数の割に接合の数が少ないかもしれません。

接合は全体に個々の集中間では認められても、複数の集中のあいだではごく少ない。個々の集中でも2・3・11・14以外では散発的である。もっとも接合例が多いものが集中11である。集中11は細石器を中心としているが、接合例は細石刃剥離以前のブランク段階のものが多い。本集中のブランクから集中10や15に接合関係を持つ例がある。また、ホルンフェルス製の縦長剥片の接合例も本集中に認められる。尖頭器は集中14から9・10へと接合例がのびるが、それ以外には検出できなかった。

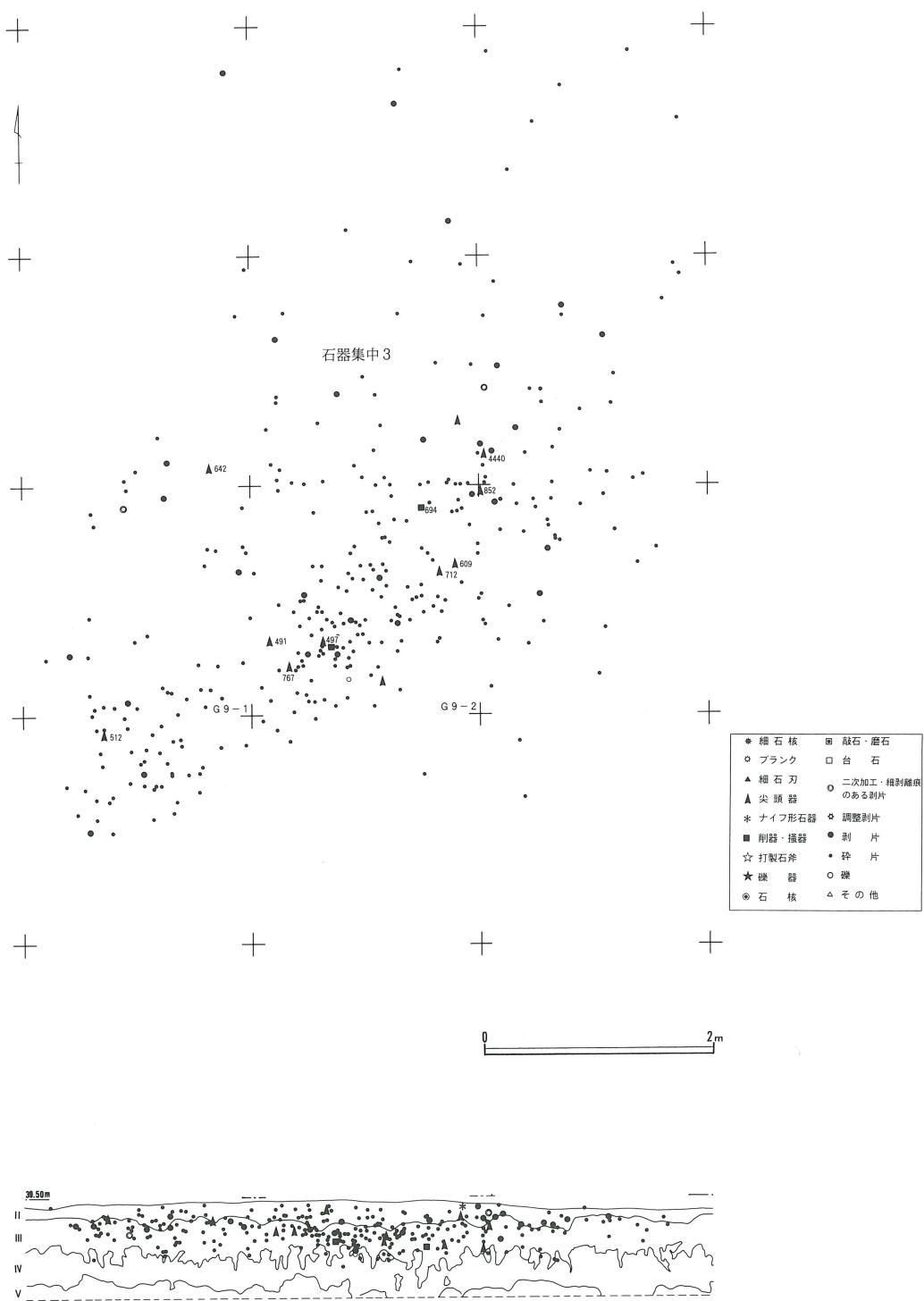
#### 礫の接合(第30図)

礫の接合も個々の群内が中心である。興味深いのは時期的に古期の1号礫群の礫が、より新期の3・4号礫群に接合関係を持つことである。単なる流入か、古い礫の一部が再利用されたのか。どちらにしろ新旧の遺物や遺構が、接合関係を持つような面上にあったことを示している。

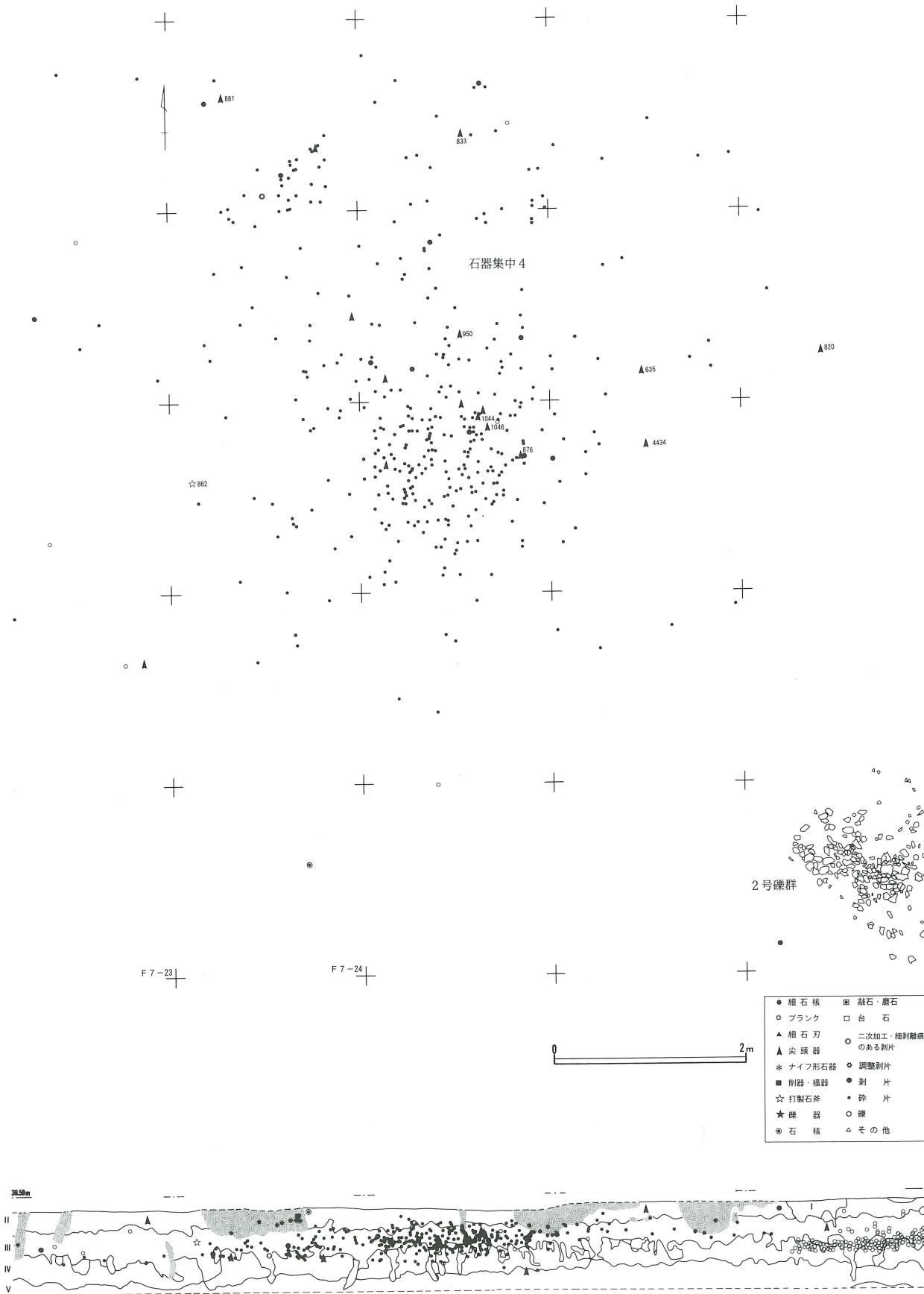
第6図 石器集中1・2



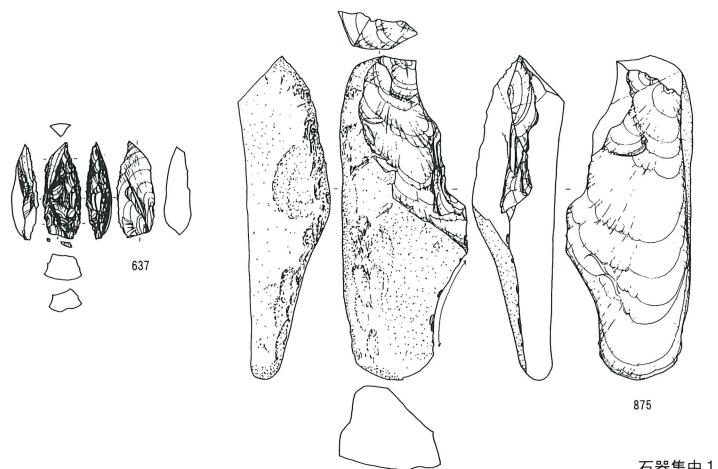
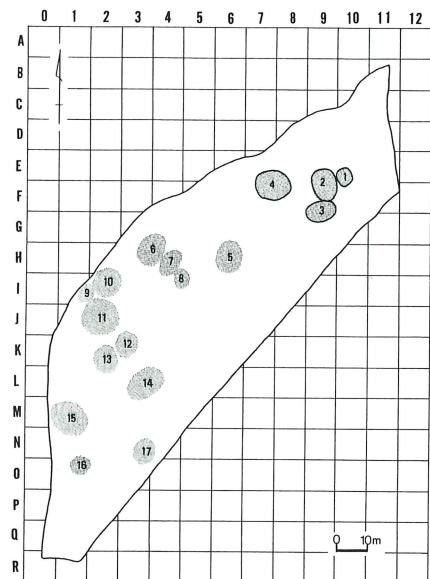
第7図 石器集中3



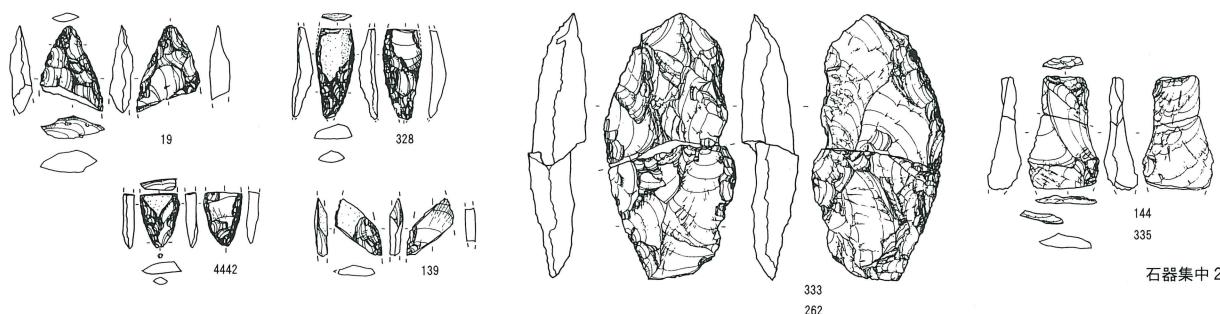
第8図 石器集中4



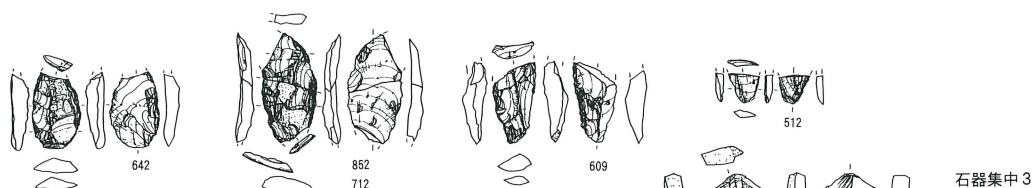
第9図 集中1～4の石器



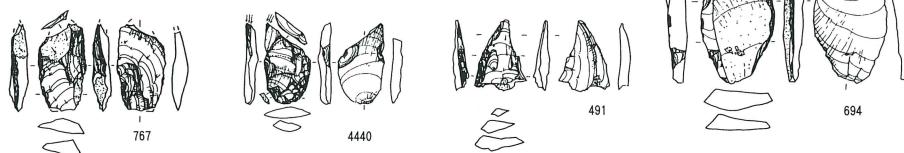
石器集中1



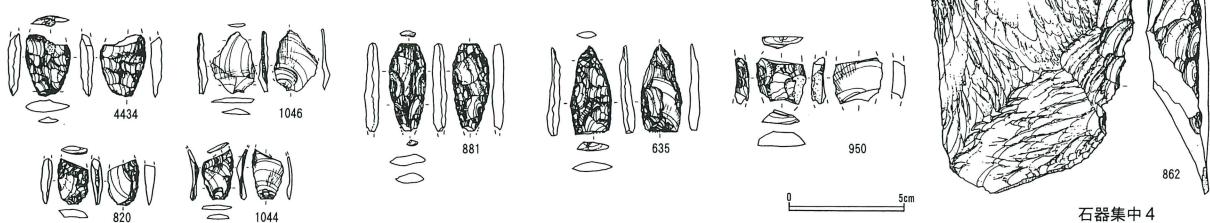
石器集中2



石器集中3

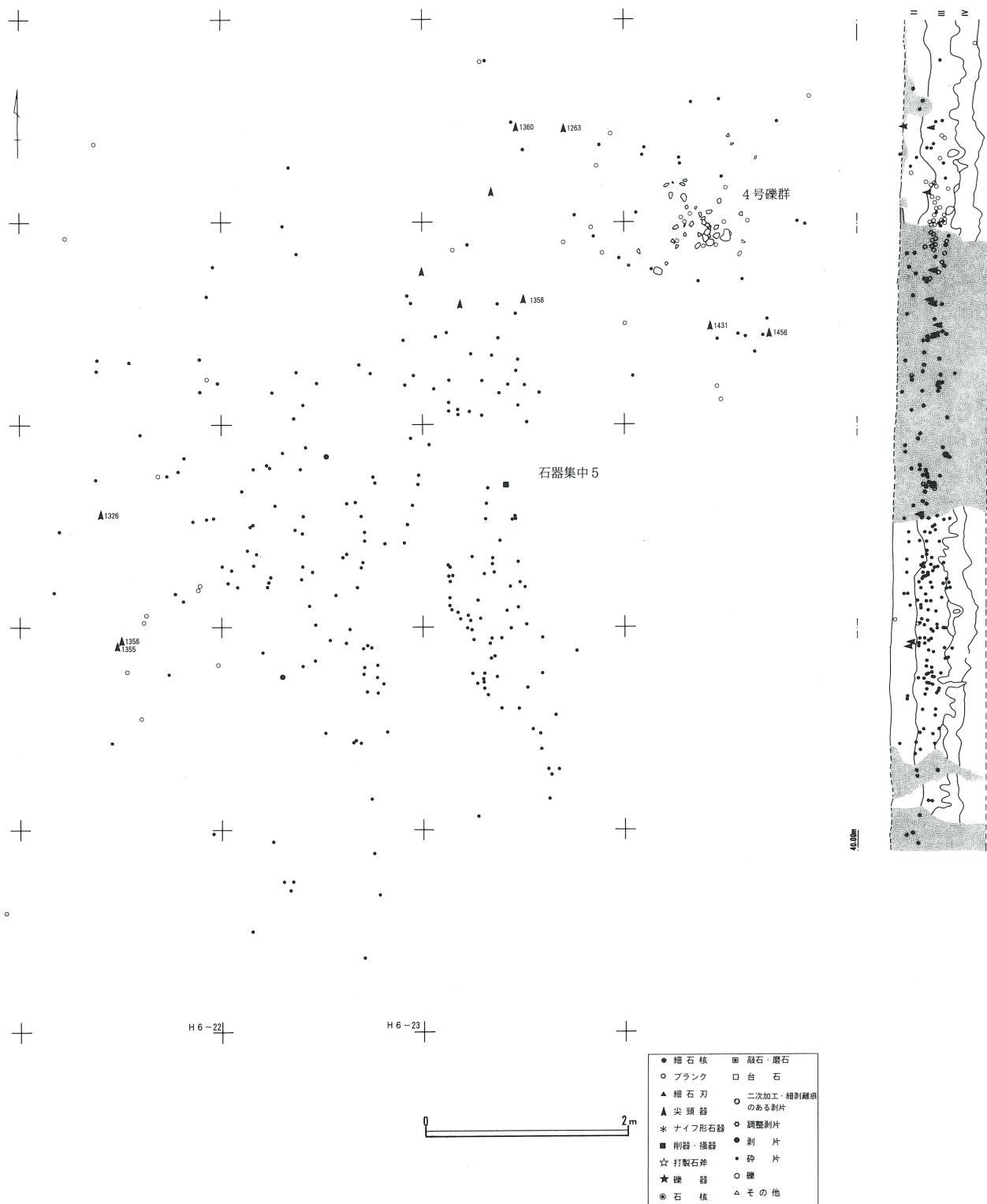


石器集中3

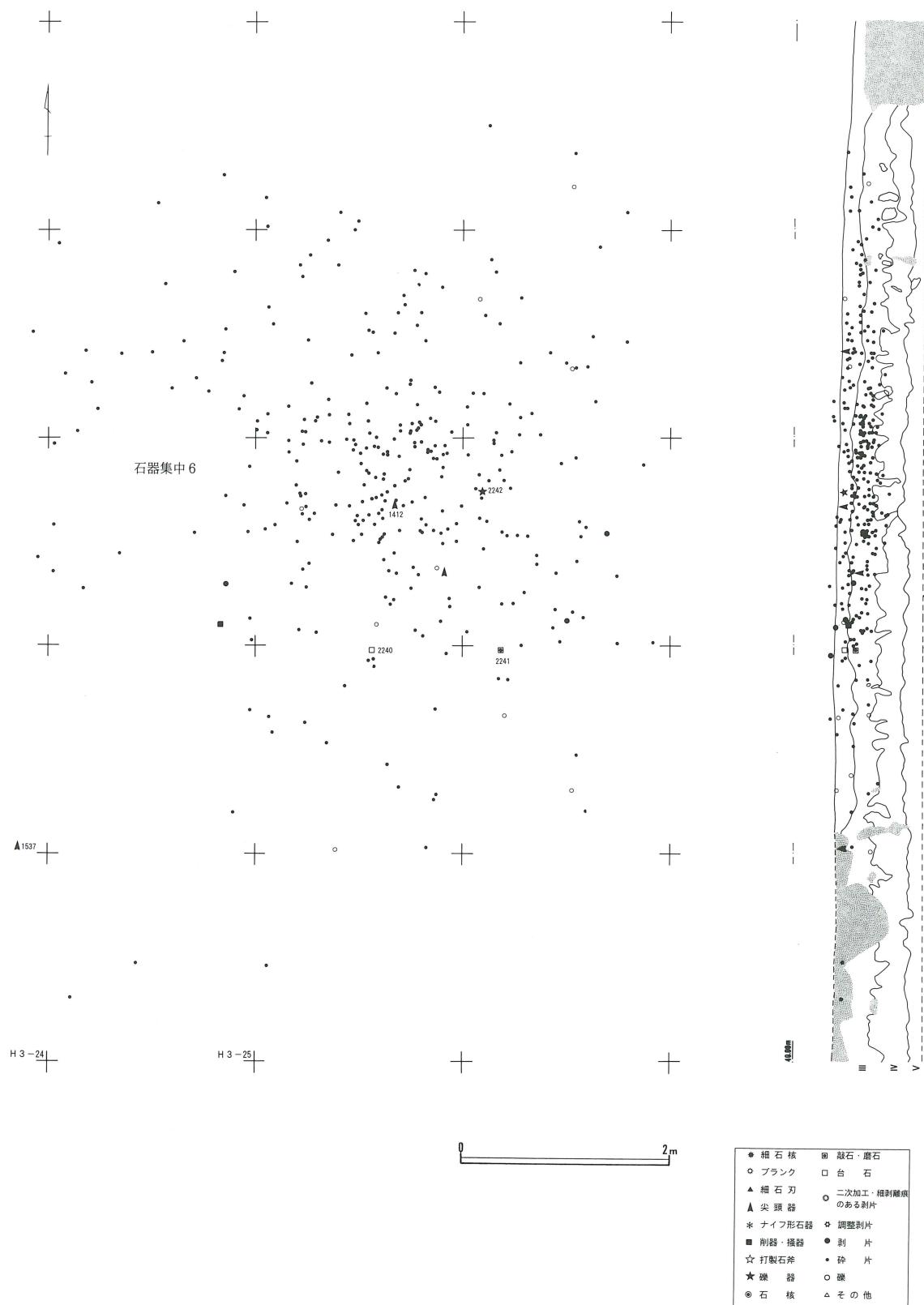


石器集中4

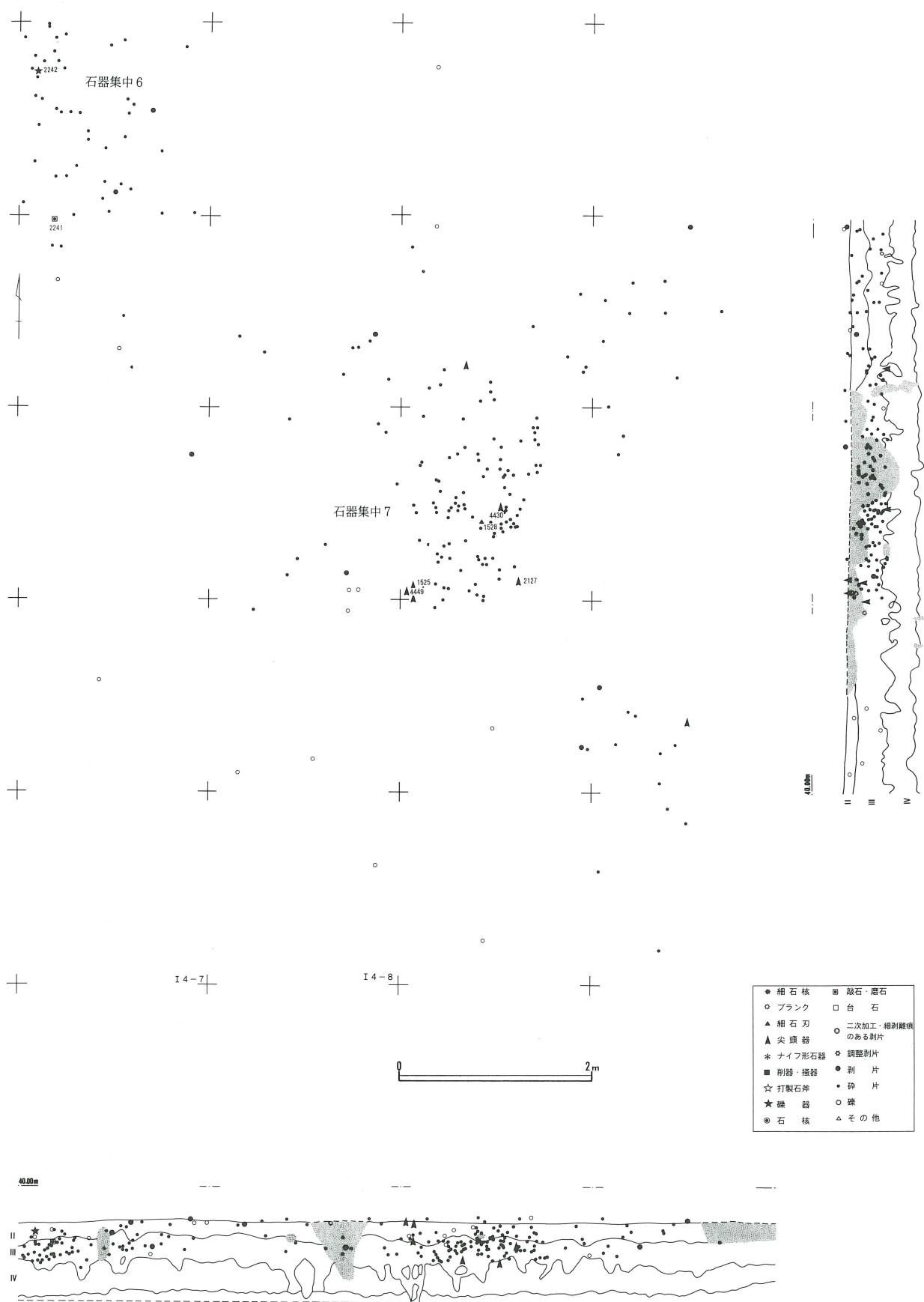
第10図 石器集中 5



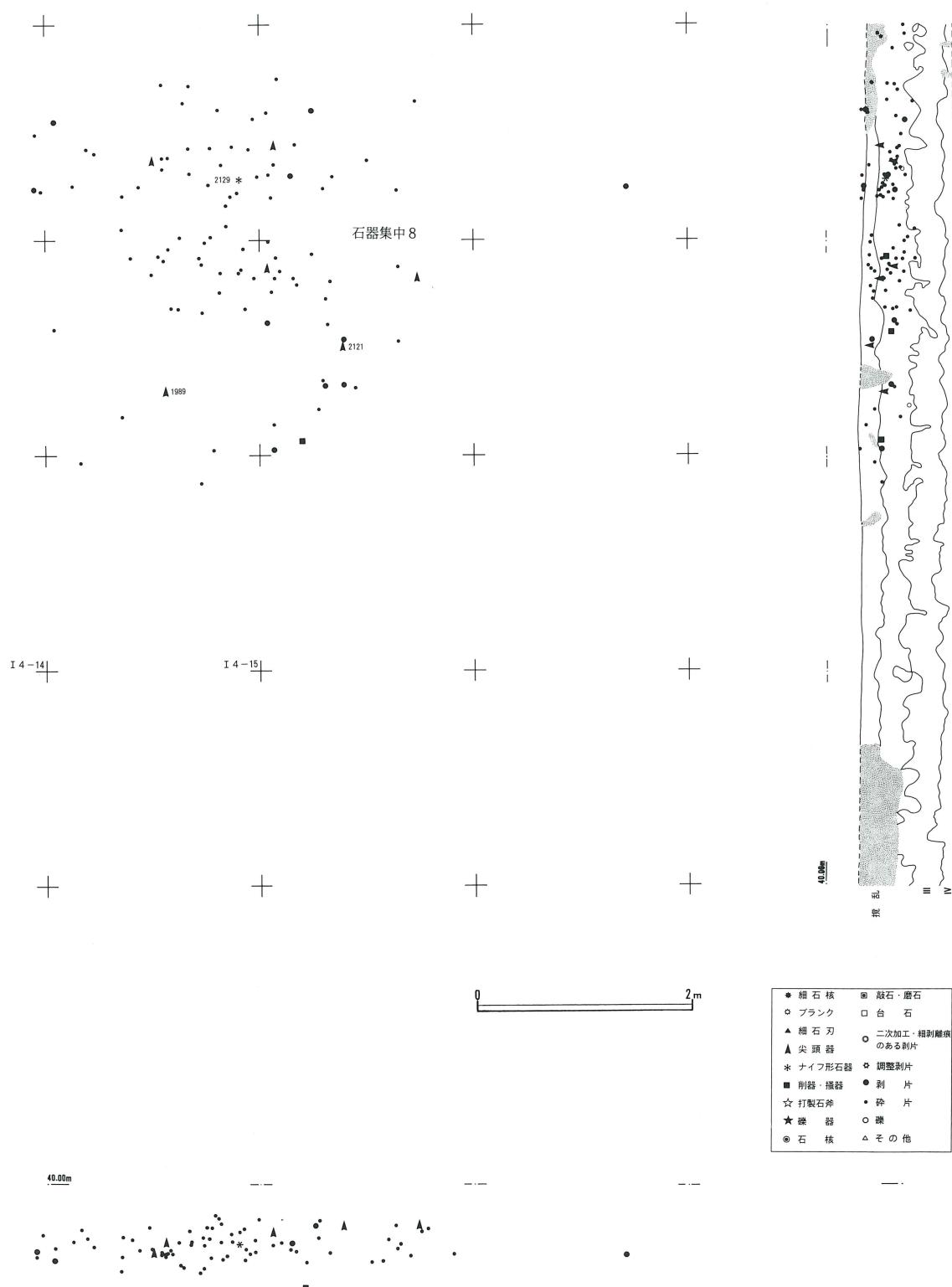
第11図 石器集中 6



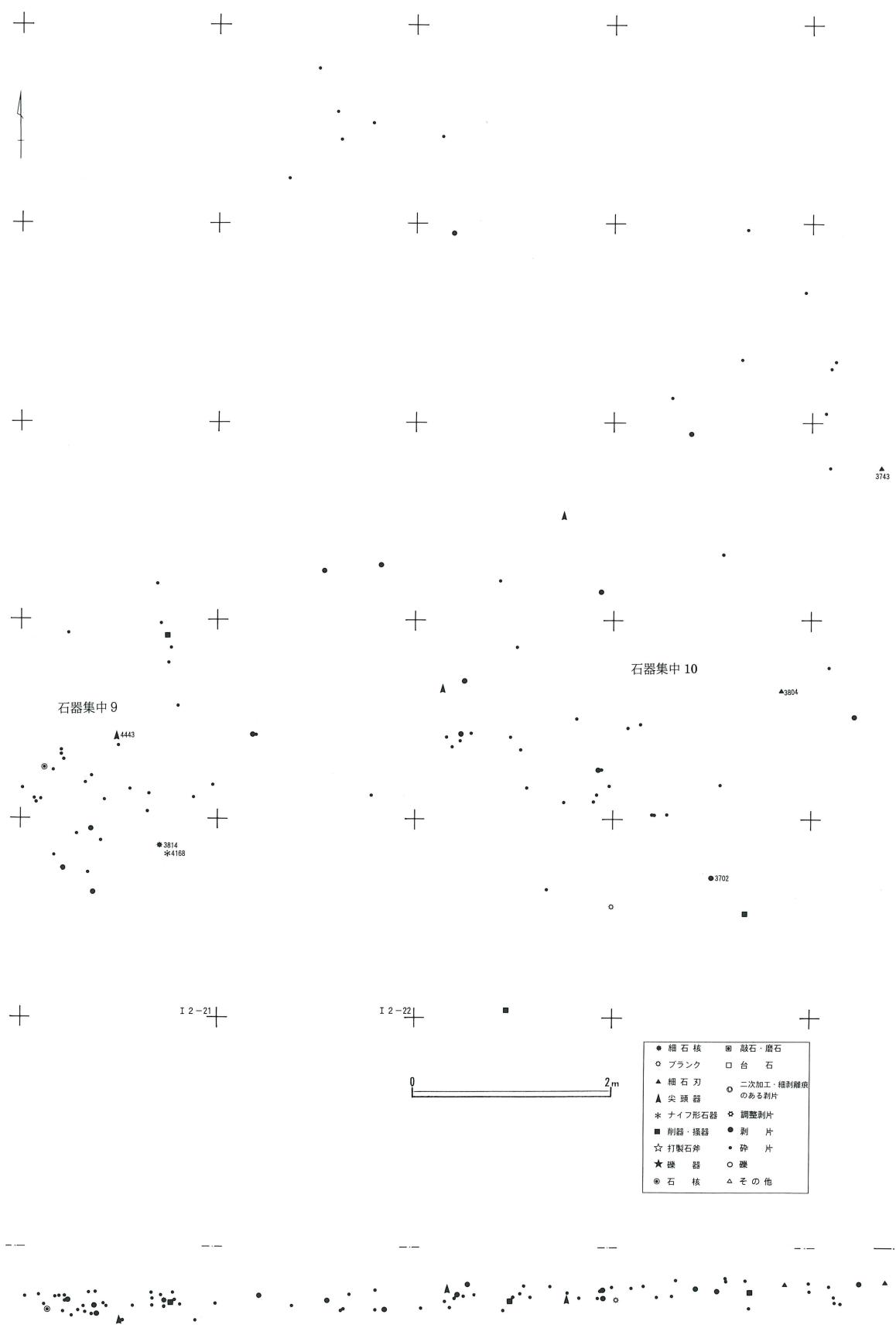
第12図 石器集中 7



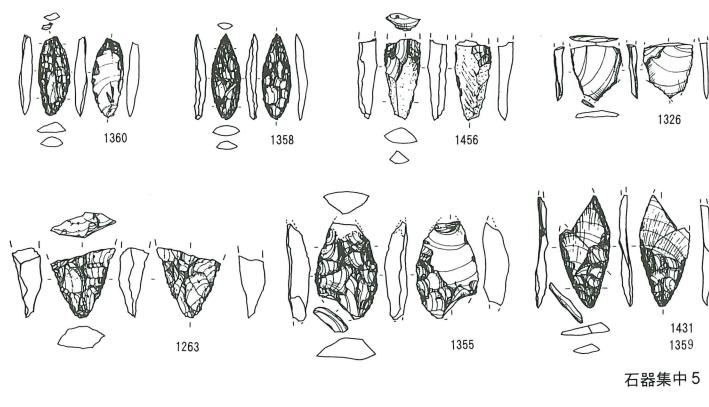
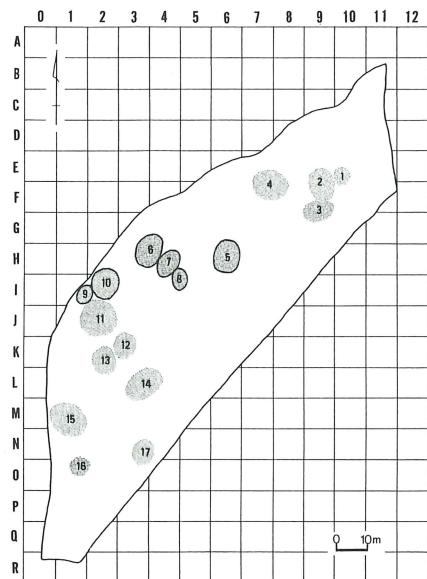
第13図 石器集中 8



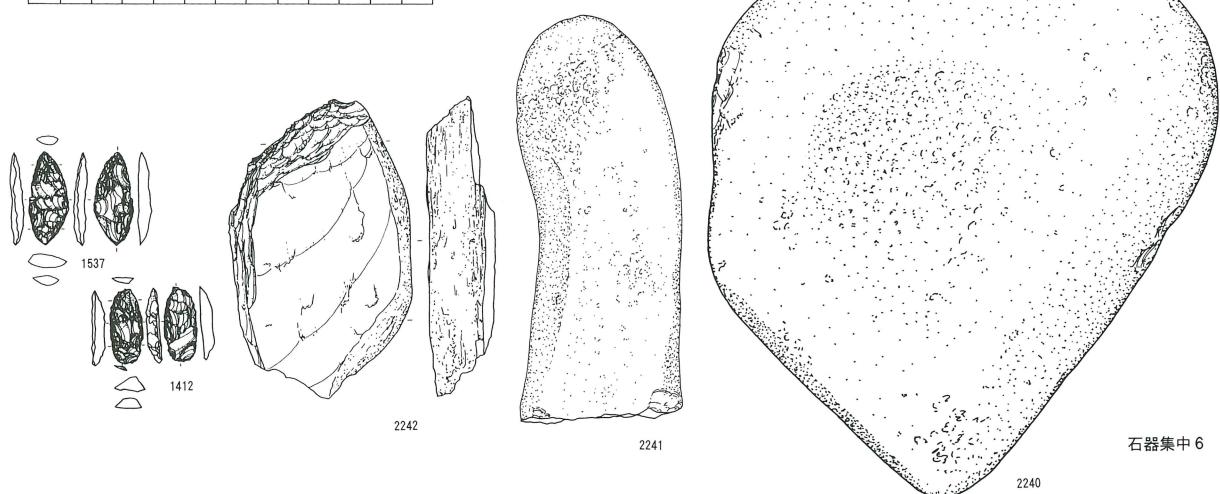
第14図 石器集中 9・10



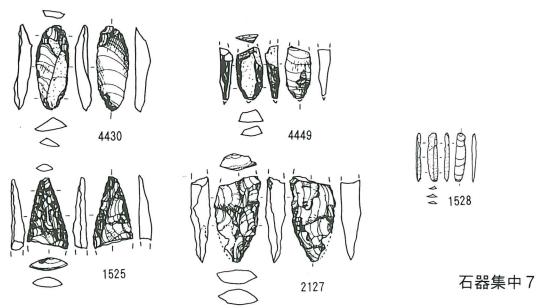
第15図 集中5～10の石器



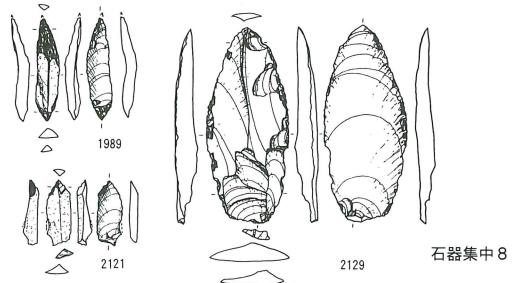
石器集中5



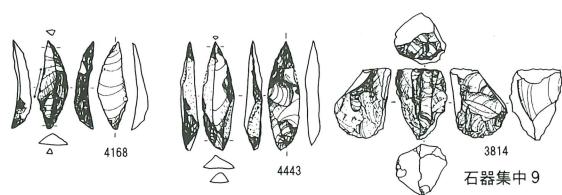
石器集中6



石器集中7



石器集中8



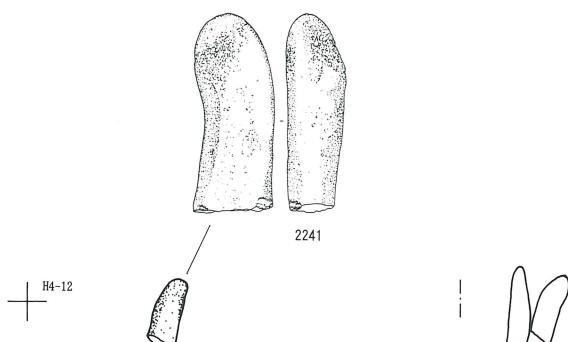
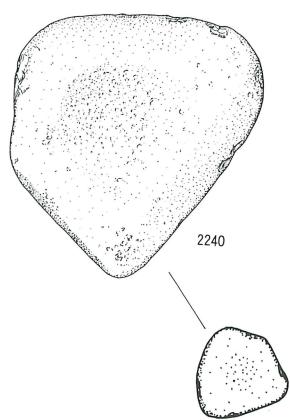
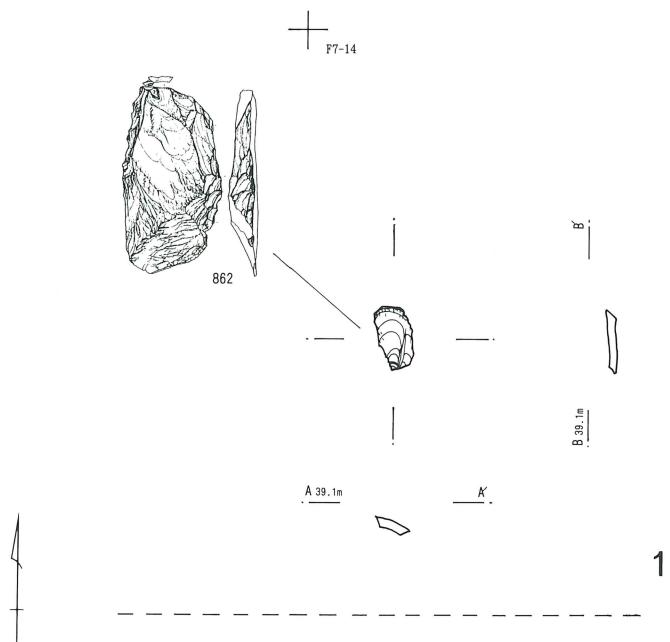
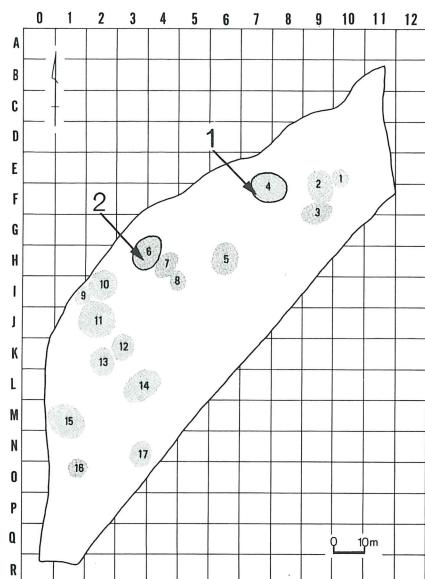
石器集中9



石器集中10

0 5cm

第16図 石器出土状態



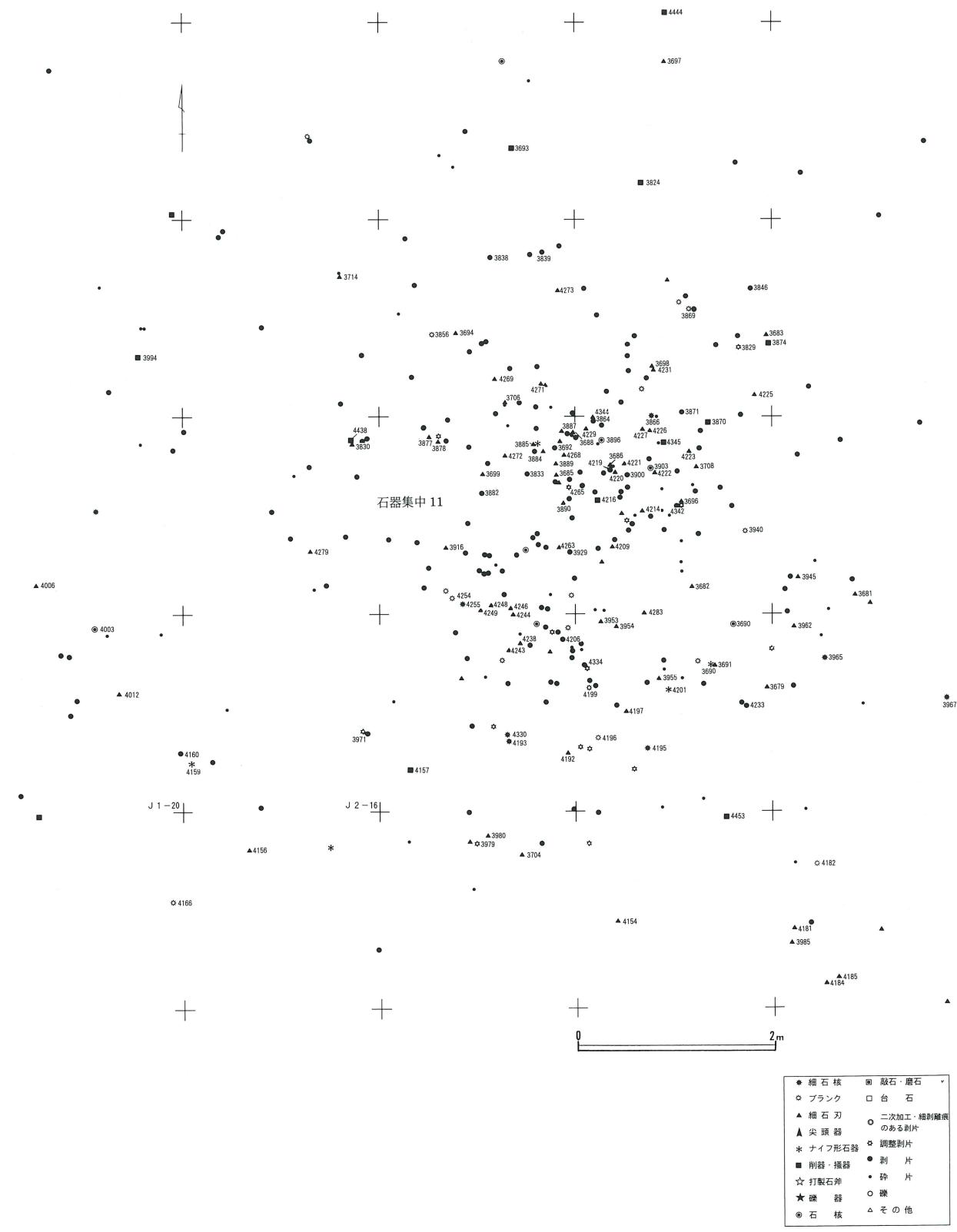
A 39.7m

B 38.1m

2

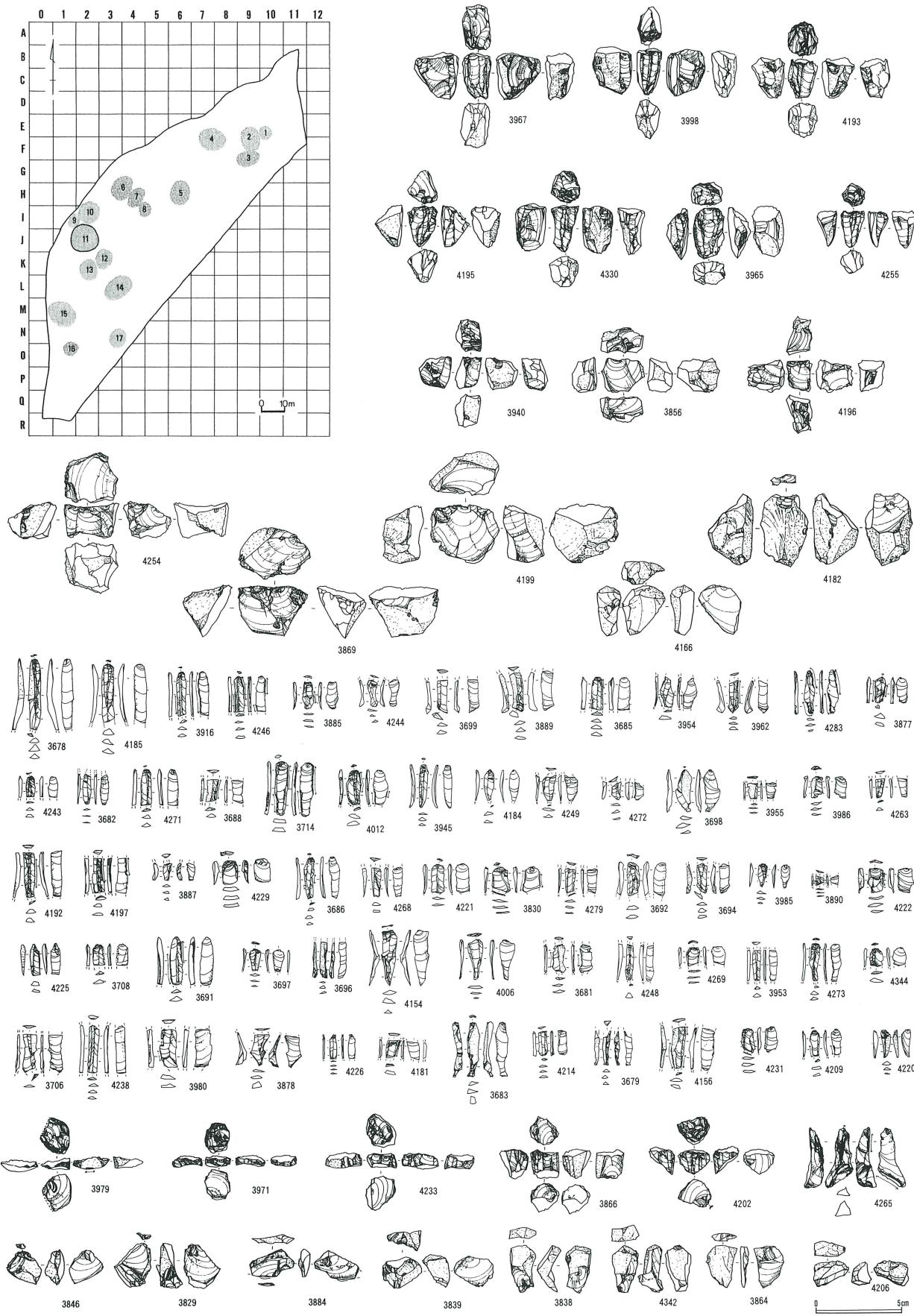
50cm

### 第17図 石器集中II

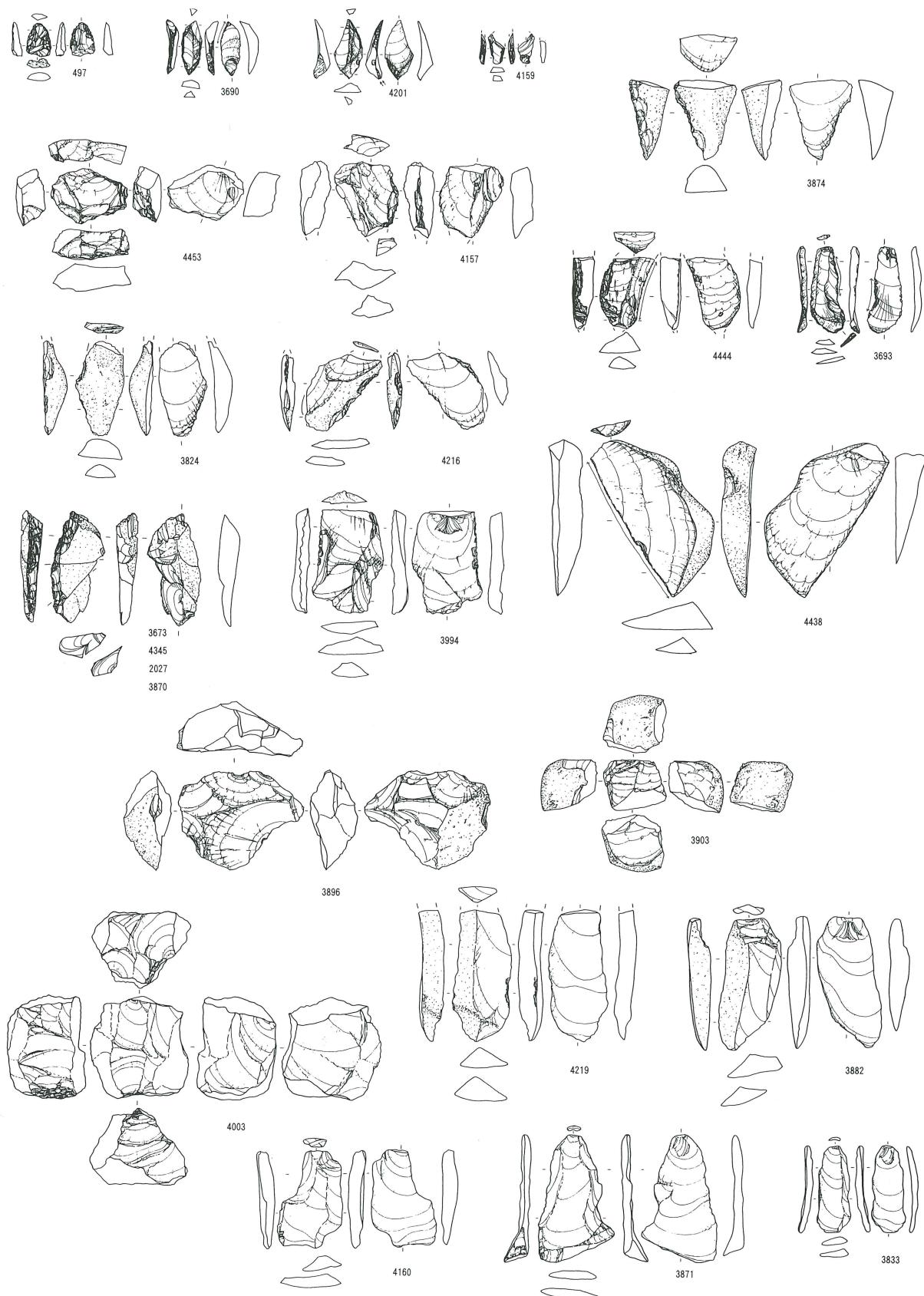


— 26 —

第18図 集中IIの石器(Ⅰ)



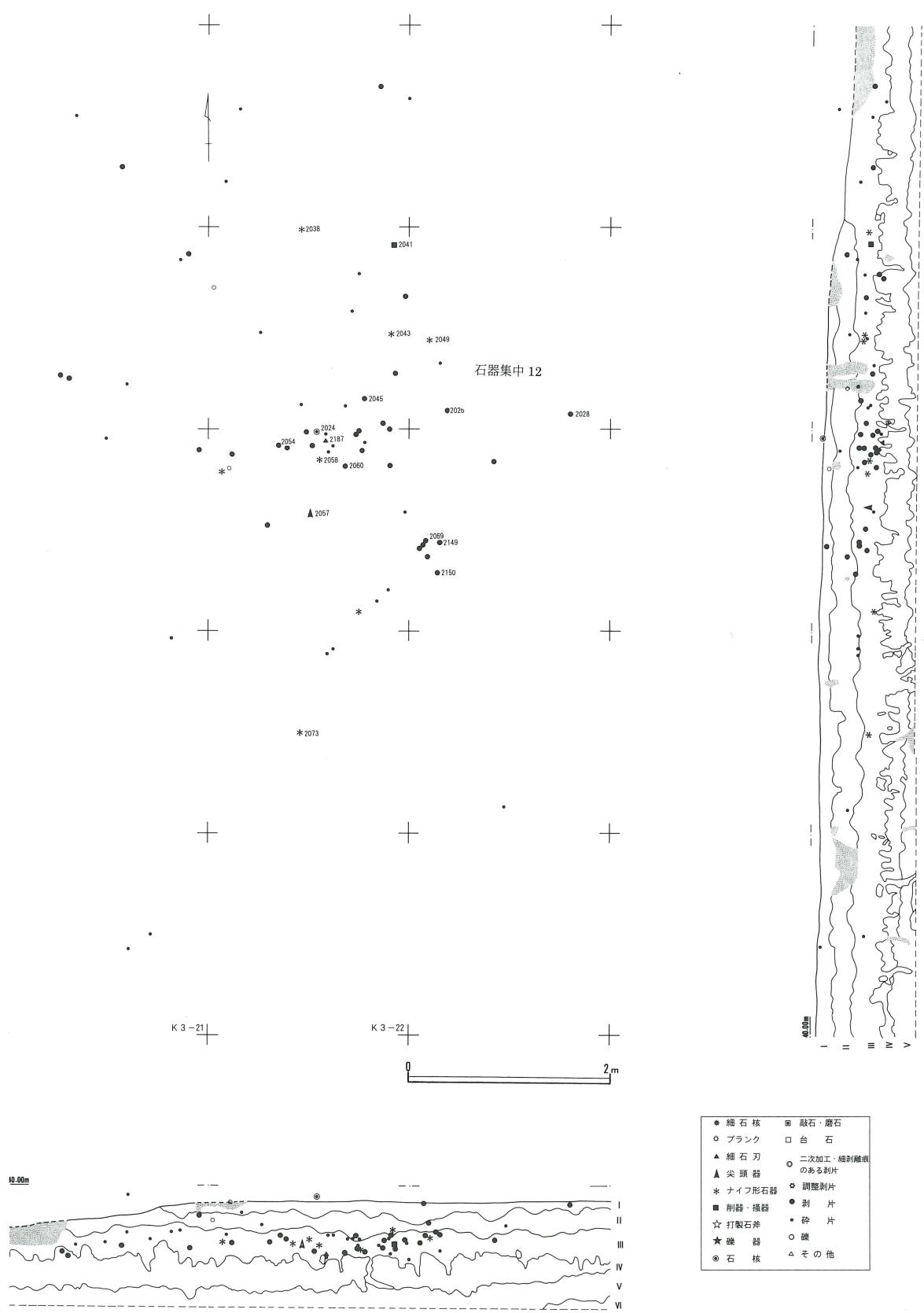
第19図 集中IIの石器(2)



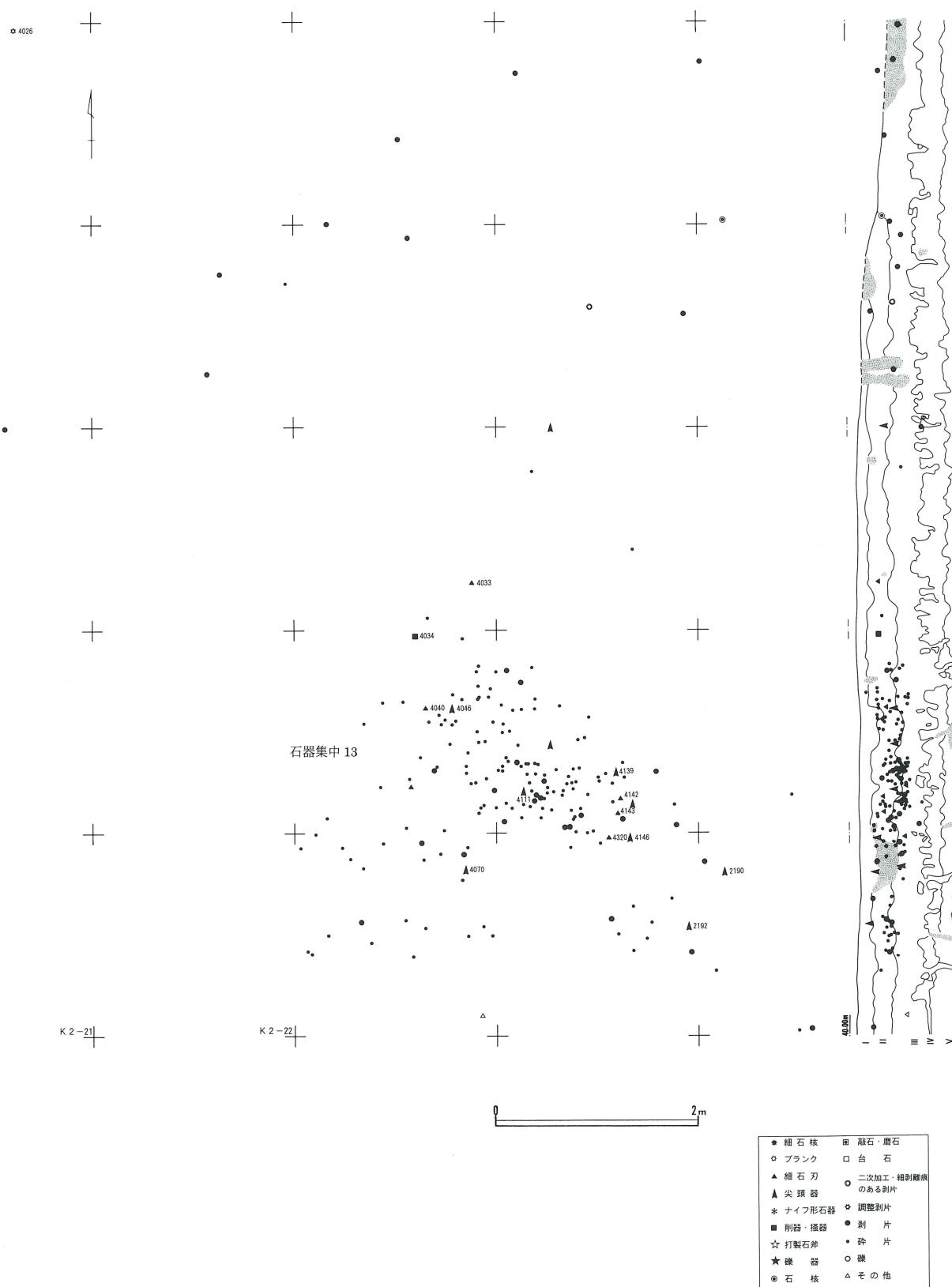
石器集中 II

0 5cm

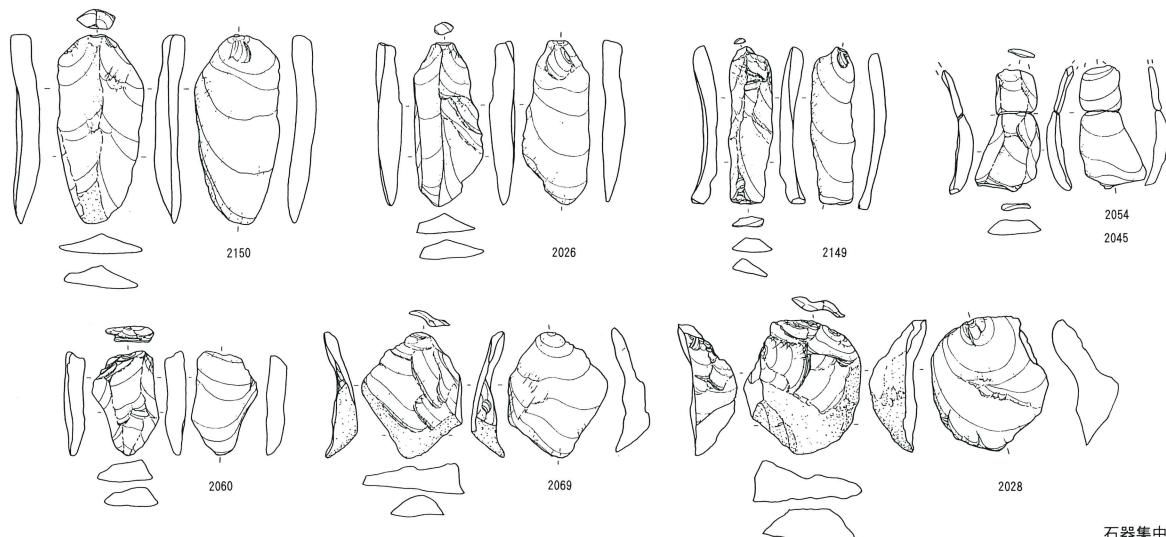
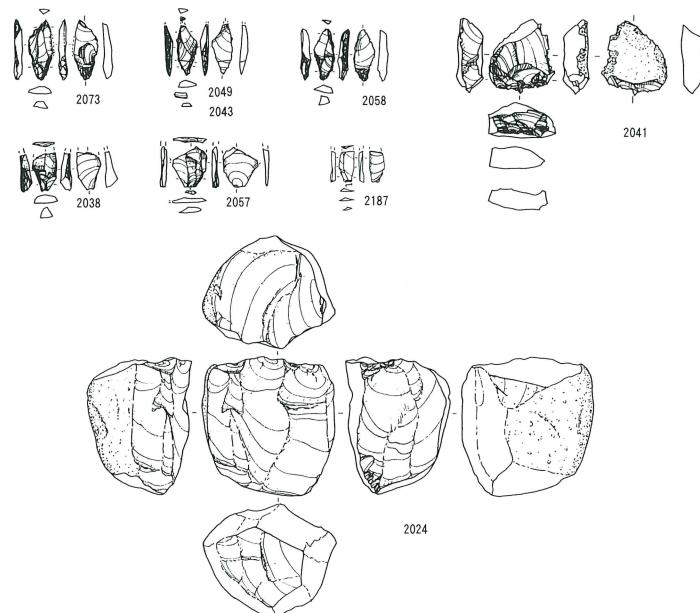
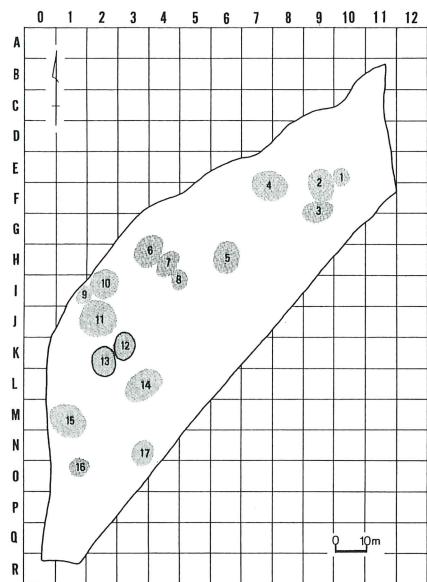
第20図 石器集中12



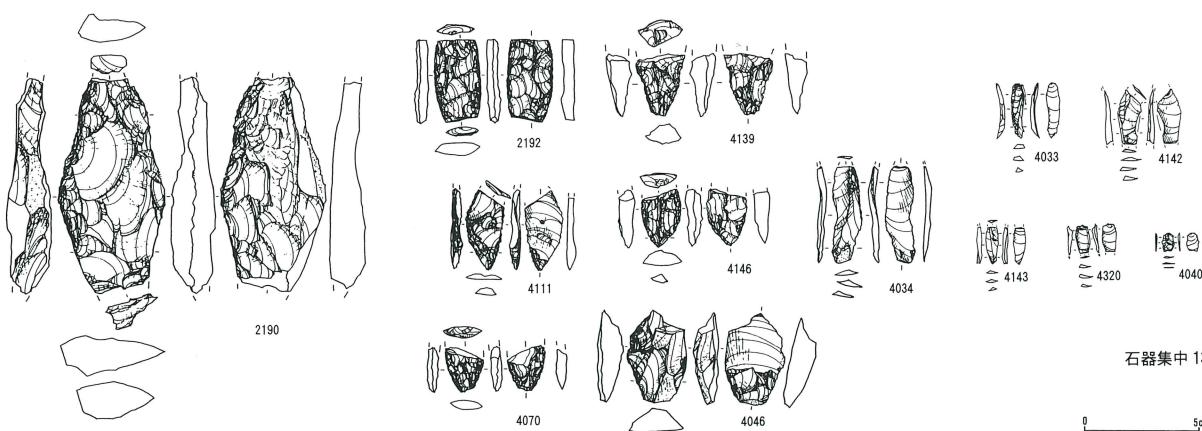
第21図 石器集中13



第22図 集中12～13の石器



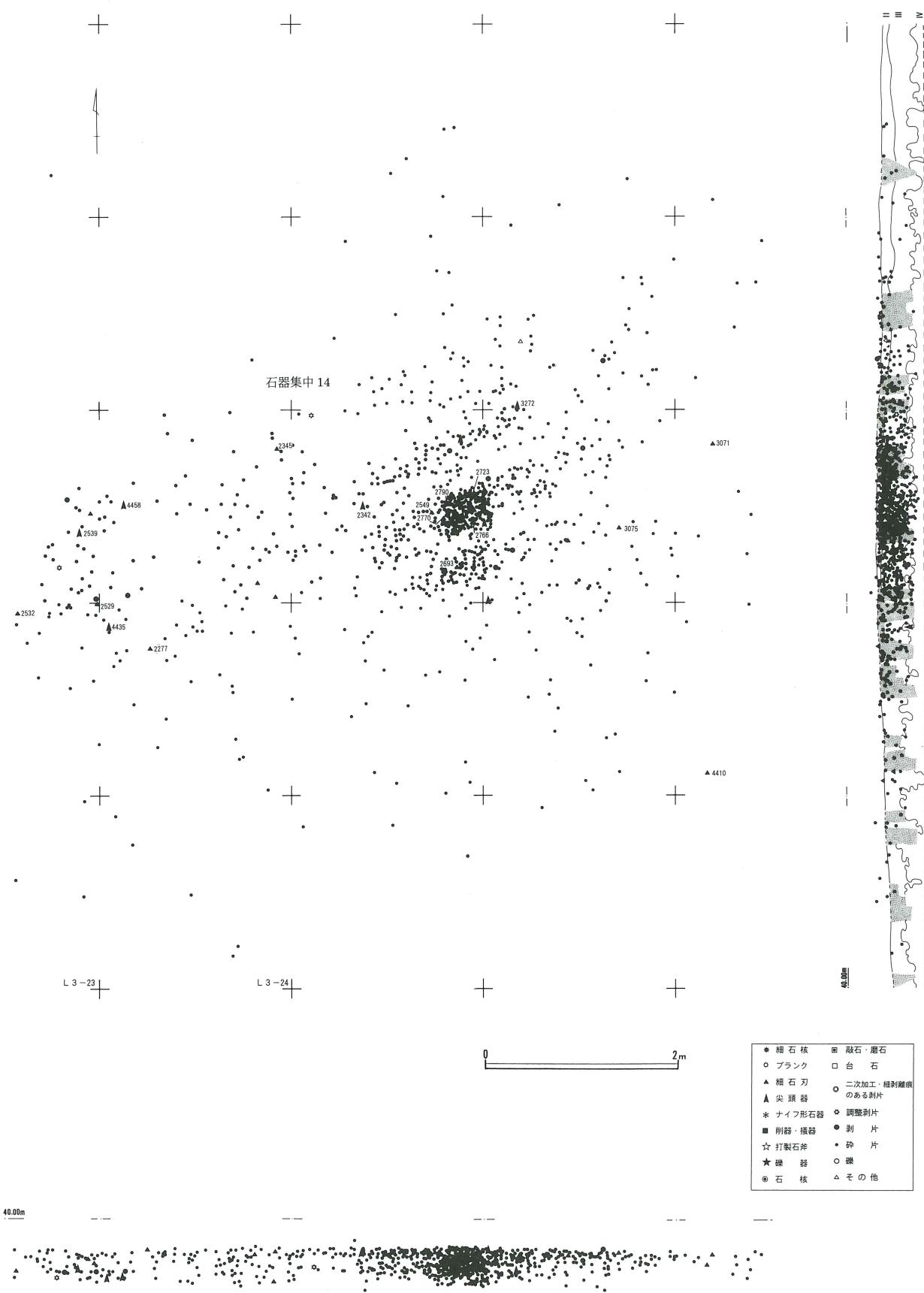
石器集中 12



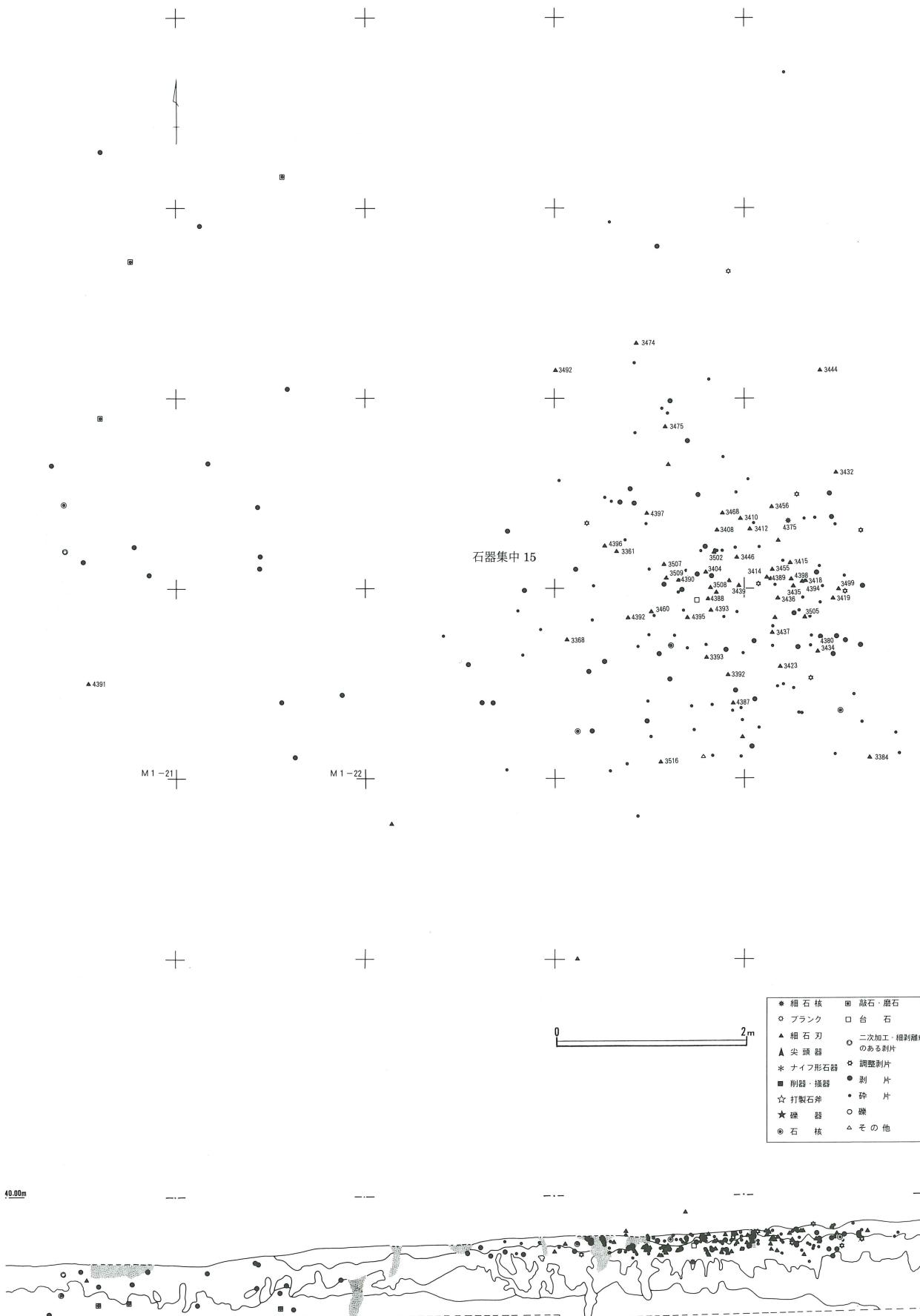
石器集中 13

0 5cm

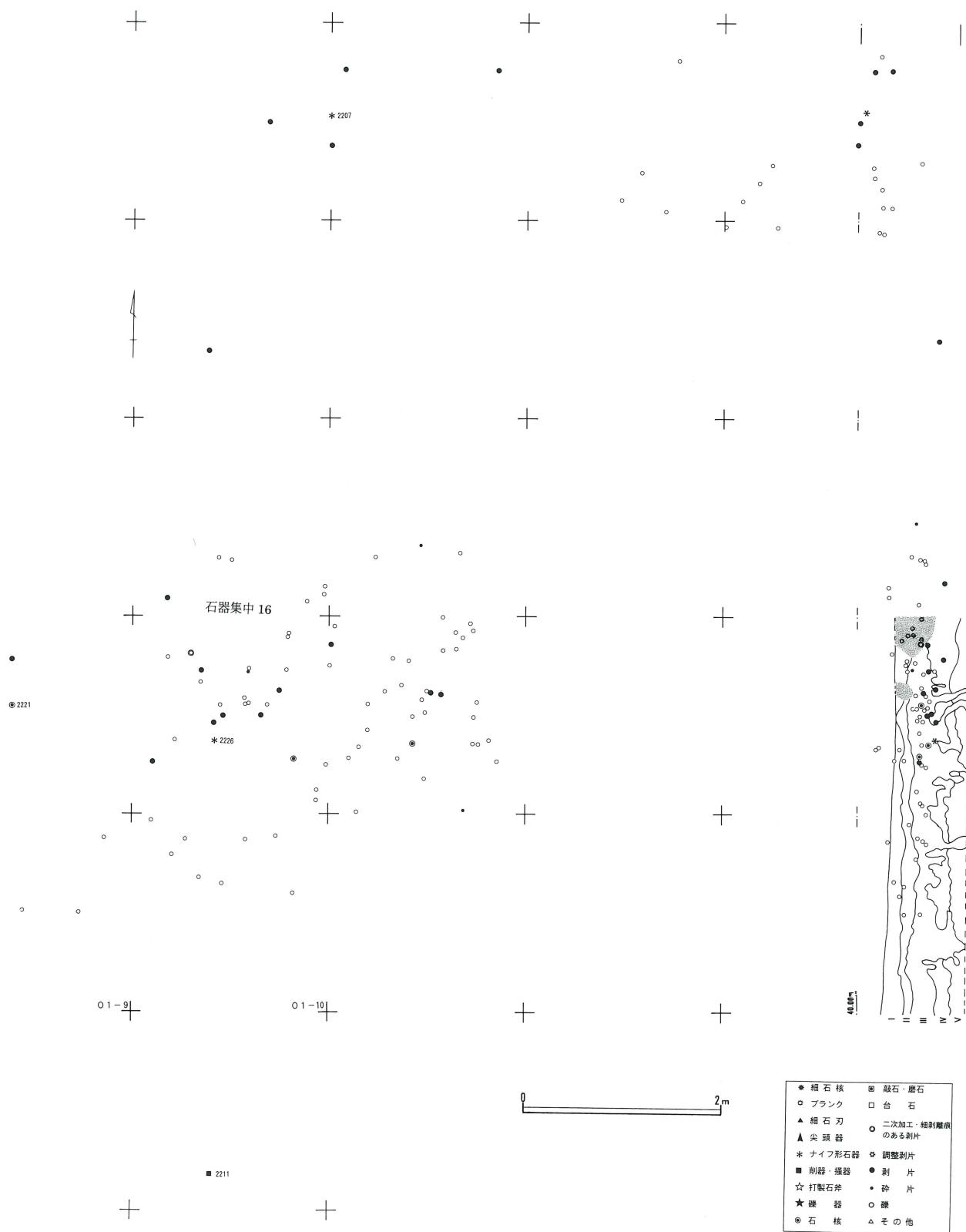
第23図 石器集中14



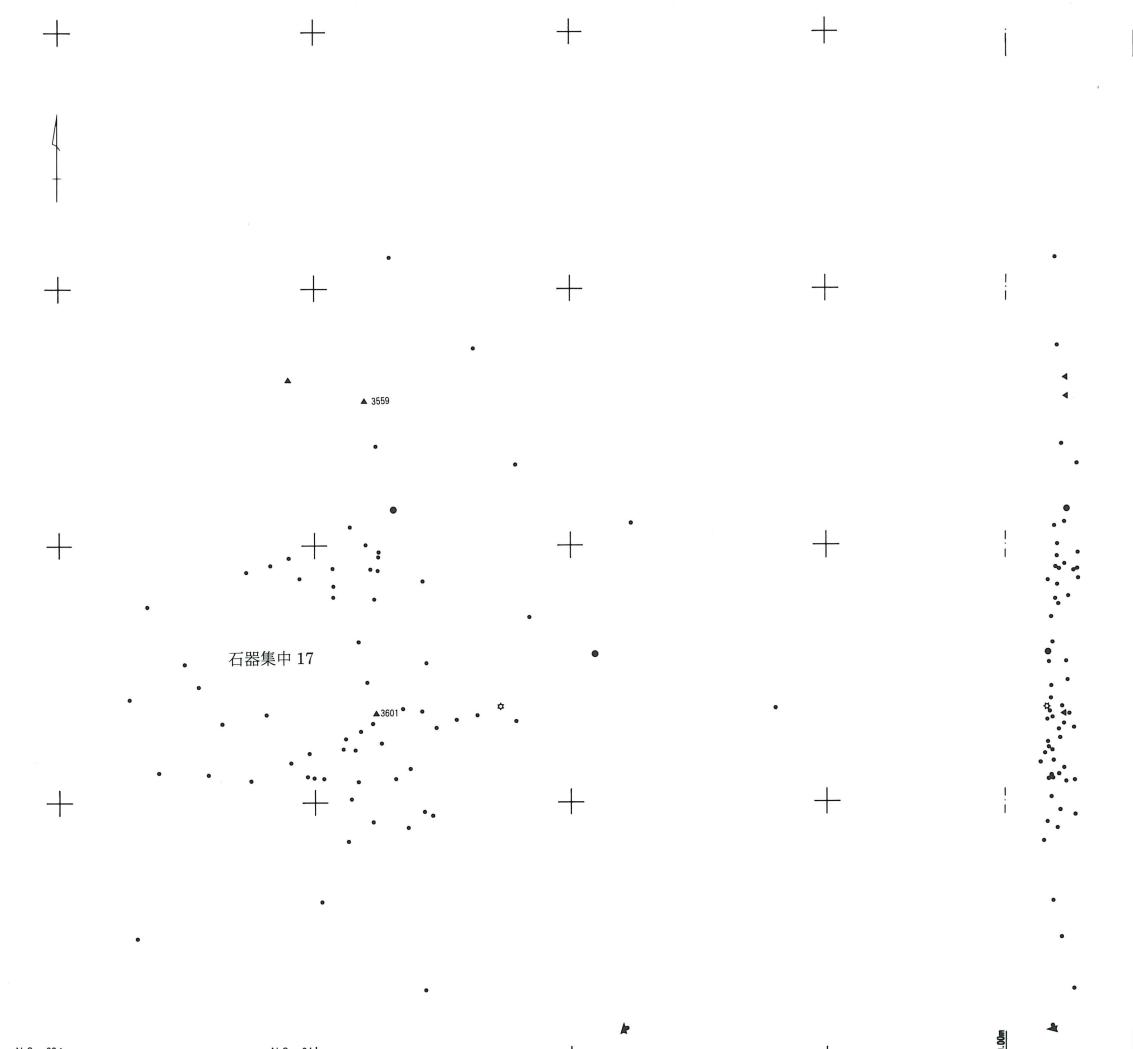
第24図 石器集中15



第25図 石器集中16



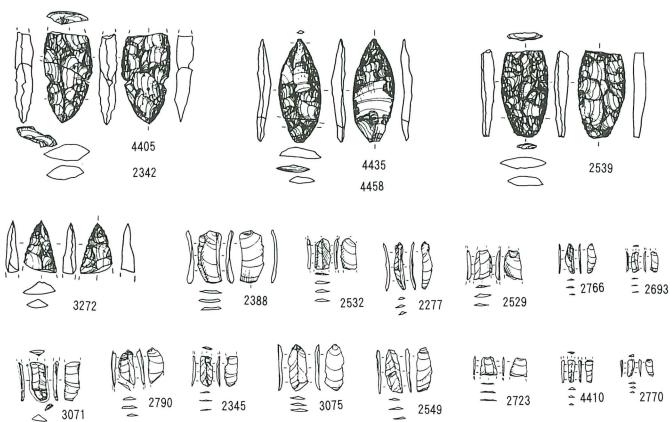
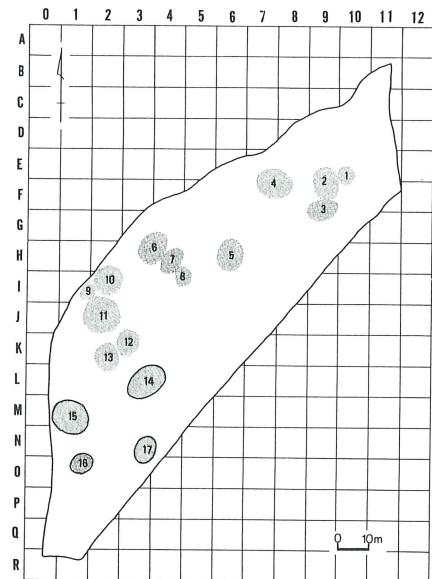
第26図 石器集中17



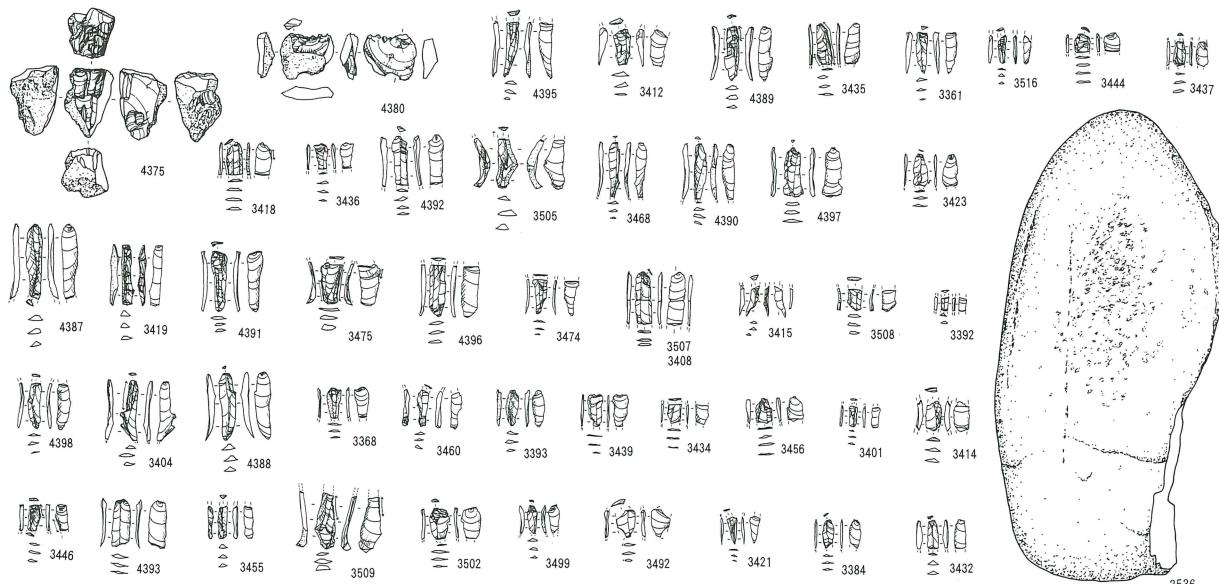
● 細石核	■ 薙石・磨石
◇ ブランク	□ 台石
▲ 細石刃	○ 二次加工・粗剥離痕 のある剥片
▲ 尖頭器	◆ 調整剝片
* ナイフ形石器	● 剥片
■ 刮器・搔器	○ 碎片
☆ 打製石斧	○ 踏
★ 跡器	△ その他
◎ 石核	△ その他



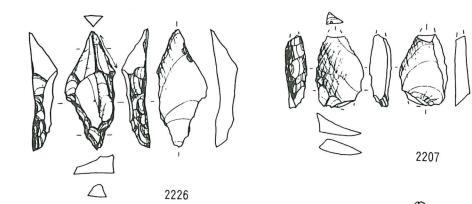
第27図 集中14~17の石器



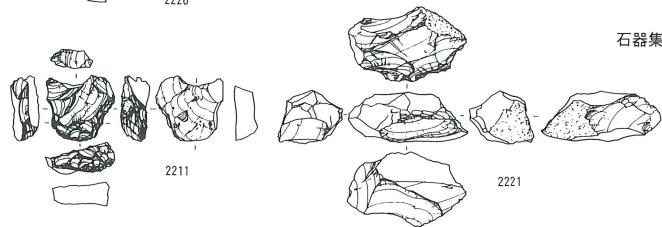
石器集中 14



石器集中 15



石器集中 16



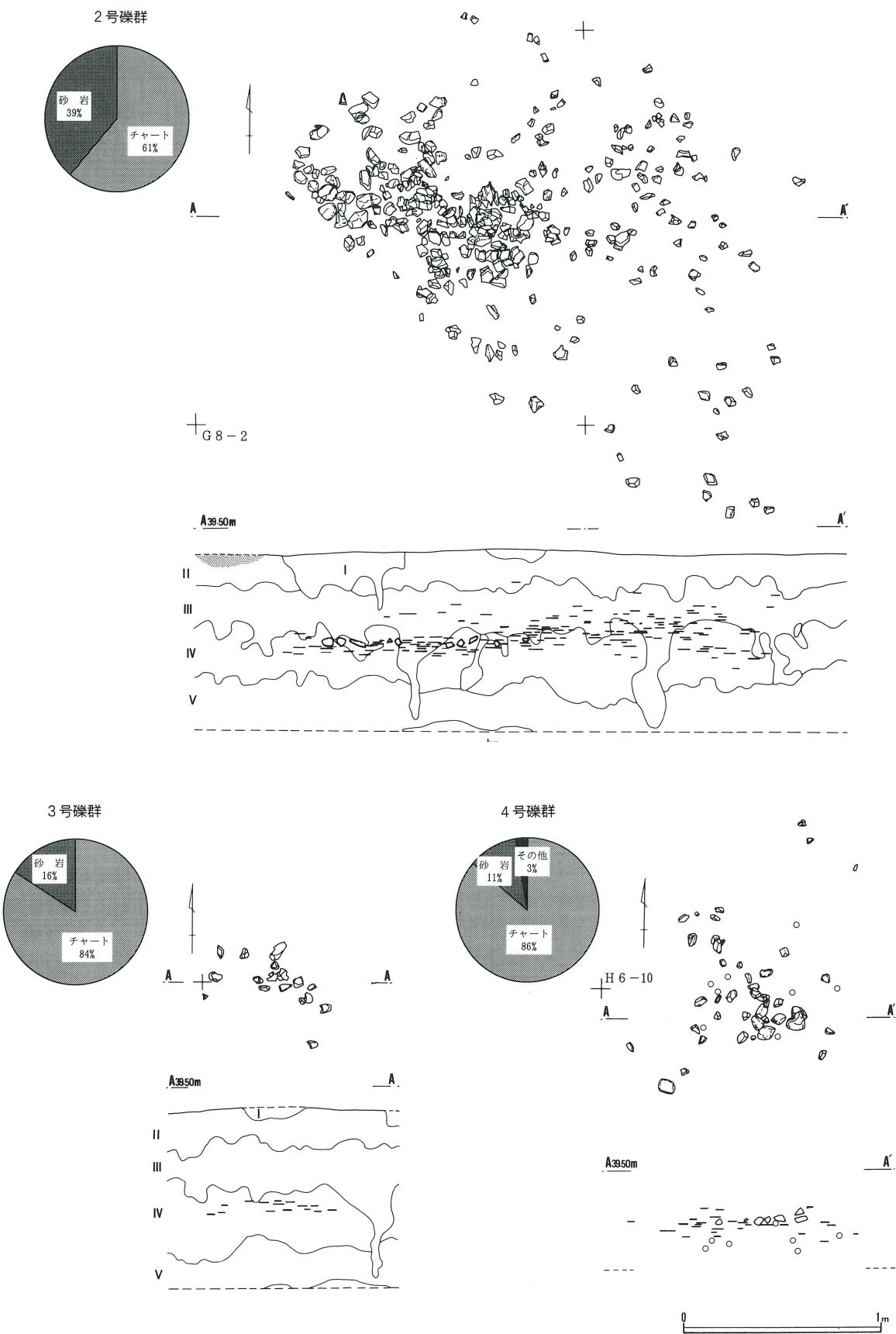
石器集中 17

0 5cm

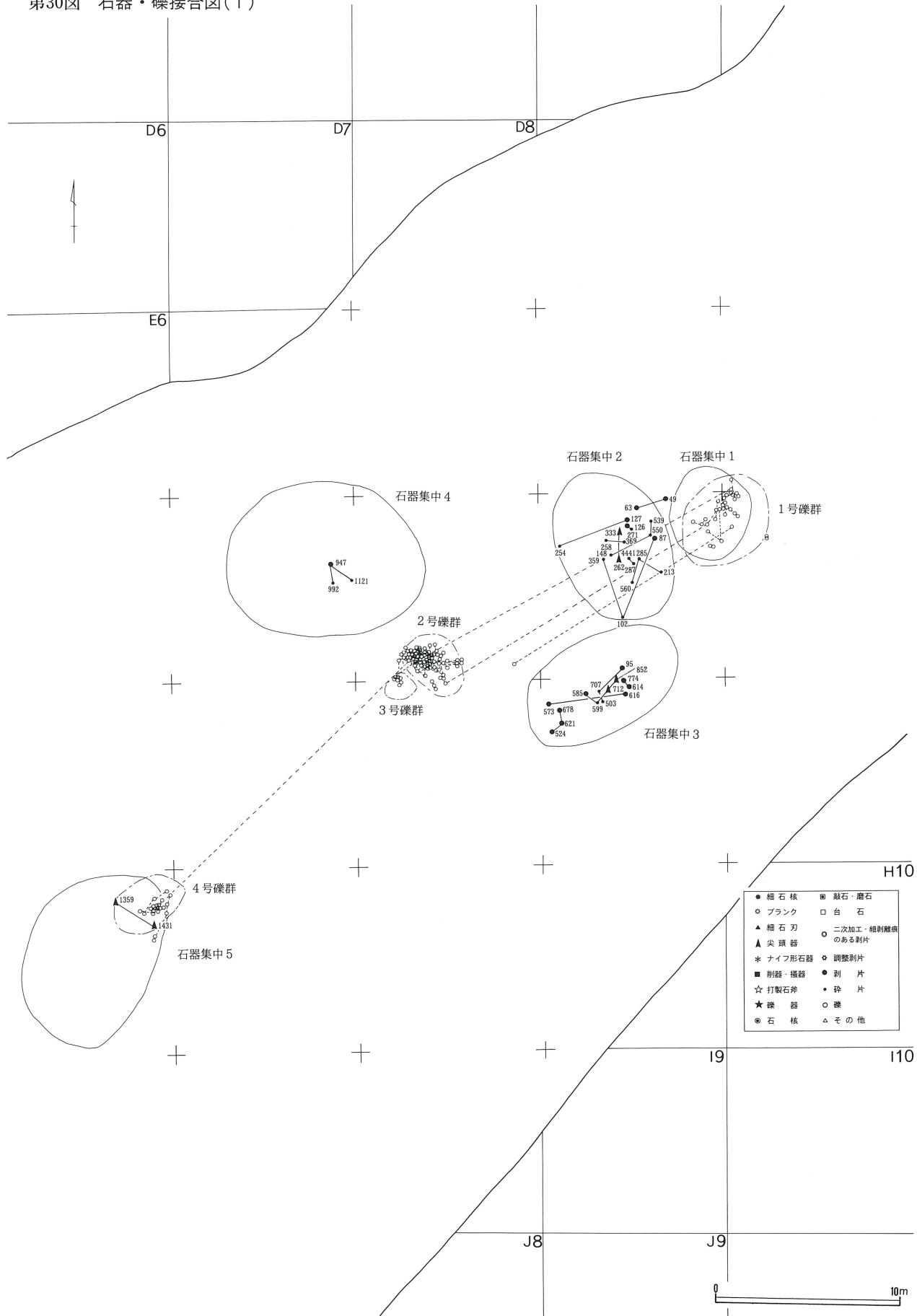
第28図 磯群(1)



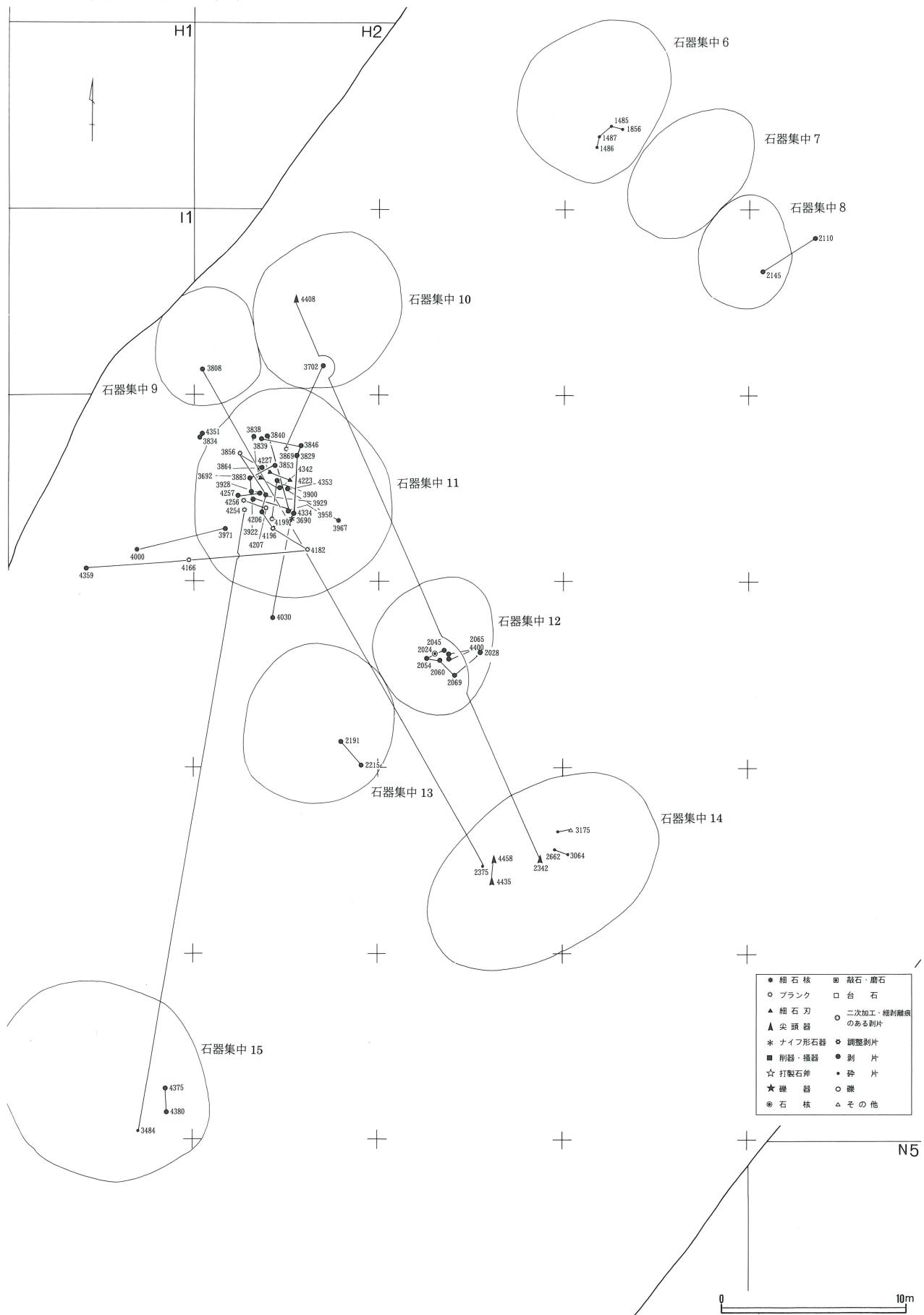
第29図 磯群(2)



第30図 石器・礫接合図(Ⅰ)



第31図 石器・礫接合図(2)



# 1. 遺物

## 1 石器実測図の表記

本遺跡から出土した先土器時代の石器の説明をする前に、作成した実測図について述べておきたい。

石器実測図については学史的な背景を分析しながら、今後の展望について触れたことがある(田中1991)。工業製図における正投影図第三角法を基本とするが、それに考古学独自の表記を加味して、統一していく必要がある。しかし現状はいまだ錯綜した状況であるために、まず表記のしかたについて説明しておく(第32図)。筆者(田中)の作成した石器実測図は、基本的に以下に示したような原則に基づいている。

第32図1は図の基本的な投影法と、その呼称である。A～Fまでは正投影図第三角法の投影による。Aを正面とし、Bを裏面とする。本来、正面には「背面」、裏面ならば「表面」となるが、「背面」はナイフ形石器などの二次加工部(blunting)を背部と呼ぶ場合があること、「表面」の呼称を用いると例えば、「裏面の表面には傷があり」等と、まぎらわしいことなどから、正面・裏面を組み合わせて使用する。C～Fの各面は正面(A)の方向を向いて、第三角法に従いその垂直か水平かの延長線上に置く。

ついで断面と指示線について述べる。実測図はA～Fまでの各面を見通した図に加えて、特定の場所を選んで横断面図と縦断面図を作成した。通常は横断面図を、石器先端・中央・基部付近の三箇所、縦断面図は石器長軸の中央付近を一箇所ぬきだしてある。

断面図の場所はa～dまでの指示線の位置にある。aはもっとも中心となる線で「基準指示線」としておく。この基準指示線aは左右側面・裏面の投影図にも関連するために、正面・右側面・裏面間にも必ず入れておく。上面(E)・下面(F)の投影を示すe・fはそれぞれ正面間にに入る。それ以外の指示線b・cは、正面(A)の左右にのみ記入する。

bのように基準指示線aよりも上の横断面図は、上面図(E)上のHの場所に置く。この場合HもEのように、第三角法によりAの方向をむくかたちとなる。a

以下の横断面図はそれぞれ下面図(F)の下に、aの横断面図はIに、cの場所の横断面図はJの位置で、やはり正面(A)にむいて描く。指示線dの縦断面図は、裏面(B)に背を向けるようにGの位置に置く。以上の表記や配置基準を、上・下面を抜いて示したものが2である。この図に示された各面が、今回の石器実測図の基本形となる。

さらに表記について付け加えると、3の矢印gの指示線は接合した折れ面の位置を示す。折れ面の左右端の位置によるため、基準指示線等のように平行しない。横断面図はg'のように基準指示線の断面図について、指示線gと平行するように配する。断面にはリング等もいれて破損状態の表示を兼ねる。4も同じく破損部の図示を兼ねる事例で、この場合はhが基準指示線の上に位置するために、h'のように最初に当該断面実測図がくる。

5のiの破線は調査時の破損を示し、当然ながらこれにはリング等は入れない。jの実線は過去の破損部で、ここには剥離の状態をj'の位置に作図する。同じ過去の破損でも6では、kの矢印の場所から再加工されており、破損部が変質したと考えて破損を示す指示線は入れない。7のlは細剝離痕の範囲を示し、それがもっとも顕著に現われている面に入れる。mの左側面図には素材面と区別するために、二次加工の範囲のみリング等を描く。8では二次加工による素材の変化を示すために、nのように横断面図中に二重に線を重ねた表現を用いている。

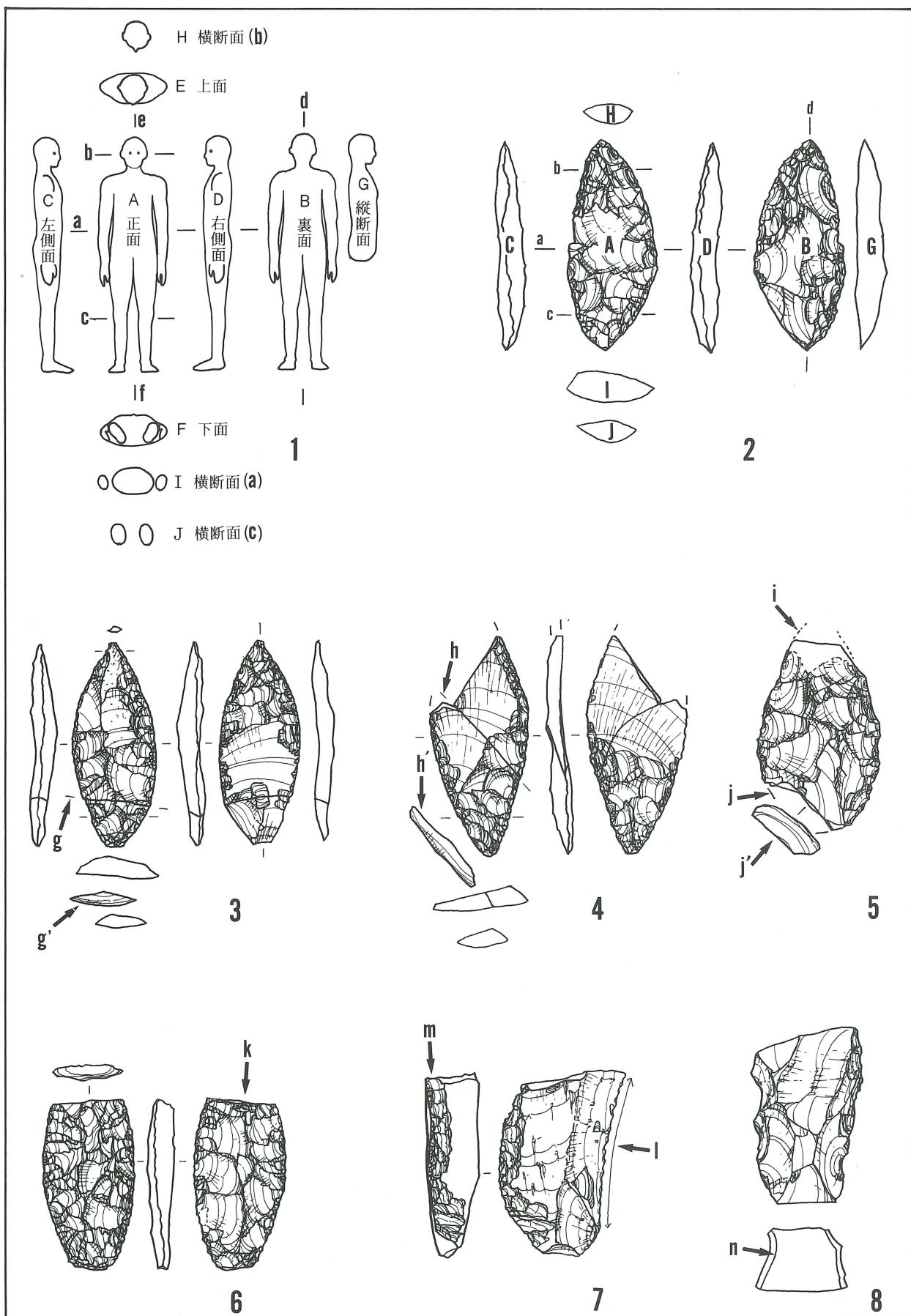
## 2 石器

横田遺跡からは4,000点を超える先土器時代の石器が出土した。その内訳は第1表のようになる。

### ナイフ形石器(第33図・第34図)

出土したナイフ形石器は大きく二つに分類できる。黒曜石製の縦長剝片を用いた、細身で小形の一群(第34図4168～4159)とそれ以外(第33図2129～第34図2207～1397)とである。後者には中央に稜線が通る縦長の例(2129・2226)、と横長に用いた例(3527・637)

第32図 石器実測図の表記



第1表 先土器時代石器組成表

	黒曜石	チャート	ホルソフェルス	安山岩	凝灰岩	砂岩	水晶	粘板岩	頁岩	その他	合計
ナイフ形石器	16	1		2				2	1		22
尖頭器	72										72
尖頭器未製品	15	4				1		1			21
細石核	11										11
ブランク	24										24
調整剥片	29										29
細石刃	174										174
削器・搔器	22	3		6				3	1		35
石錐	1										1
加工剥片	4	1									5
打製石斧								1			1
礫器		1	1			1					3
台石						2					2
石核	1	8	4	8	2	2					25
原石	1										1
剥片	271	84	46	50	4	9	4	19	7	1	495
碎片	3294	160	2	4		7	4	9			3480
敲石						4					4
楔状石器	3	1									4
合計	3939	262	53	70	6	26	8	35	9	1	4409

がある。3527は厚みのある剥片を使って先端角が直角に近く、637は先端角がより鋭角で、左右両側縁の加工は鋸歯状に仕上げられている。第34図2207・1397はやや幅の広い剥片を用いている。3527・637を除く4例はいずれも、打面部を下位に設定することで共通する。

第34図4168～4159は「黒3」母岩とした、透明度の高い良質の黒曜石を用いた、縦長で細身のナイフ形石器である。両側縁に加工が加えられているものが殆どであるが、4201の基部加工は裏面側に施されている。基端に彫器の刻面に似た剥離痕がある。2073～4159は全長2cm前後の非常に小形の一群である。素材にはやはり小形の縦長剥片を使って、両側縁に加工を施している。形状の上でも斉一性があるが、出土する範囲も石器集中12付近にまとまっている。

#### 尖頭器(第35図～第42図)

横田遺跡から出土したものは、ほとんどが黒曜石製の尖頭器である。製作址の常で全体的に破損品や未製品類が多く、完成品と判断できるものはごく少ない。透明度のある良質の黒曜石を用いるものが多い。全長は5cm以下、3cm～4cmのものが多く、なかには2cm前後的小形のものもある(第35図821・497)。最大幅も2cm以下のものがほとんどで、結果的に細身の柳葉形

を成す。両面に加工の施されるもの以外にも、第35図4430・4443・1989や第39図2121など、先端と基部への最小限の加工で作り上げているものもあり、素材と調整加工との対応関係をよく示している。

興味深いのは破損品を再加工したもので、第35図4435・4458、第36図2539・2192・881・1360・635・4405・2342などは、破損した先端や基部からの再加工を試みた痕跡が残されている。また、第38図4440は破損面からの加工が彫器の刻面のように加えられている。

第40図4046～9は製作初期の未製品である。基部付近に集中して加工が施されているものや(4046・9)、大きな剥離によって全形を整えようとしているものがある(2125)。

第41図333・262と第42図2190は、それぞれチャート製と砂岩製の尖頭器未製品である。同様の石材はほぼこの2例に限られ、他に製品はない。333と262の接合例は他にも同一母岩の碎片類が出土している。全形の大まかな形状が整え始められた段階で、胴中央部から半裁してしまっている。333・262ともに破損面から再加工が試みられている。完形品だとしたら全長10cm近い大形例であったろう。2190も同じく両端を欠く大形

の未製品である。

第42図1046～2057は両面加工石器の製作時に生じるポイント・フレイクを用いた尖頭器である。いわば廃物利用とでもすべきだろうか。加工は急斜な周縁加工に限られるが、素材の大きさからしても、ほぼ完成品に近いものなのだろう。

#### 細石核(第43図～第44図)

細石核は11点出土した。すべて黒曜石を用いている。「黒2」とした漆黒の良質のものが多い。残核の容量は全体に近似した印象をうける。側面のどこかに自然面や剥離面を残しているものが多く、素材として厚みのある剥片が用いられたと推定できる。この事は出土したブランクからもうなずける。打面には細石刃剥離面側から縦位方向に調整加工が施されているもの多く、側面から横位方向になされいるものは少ない(第43図3967・第44図4375・4193)。打面は上からみたとき長方形にちかいものが多く、その場合、細石刃の剥離作業が短辺に残るものもある(第43図3967・3998・3670・第44図4375)。それ以外に比較的長辺側のもの(第43図4330・3814・第44図3965)、打面を半周するものがある(第44図4000)。また、3967・4000は打面調整をおこなった段階で剥離作業が静止している。4255は他の細石核と異なり、被熱によるのか表面が褐色のすりガラス状となっている。打面と剥離面との角度は80度前後のものが多い。

#### ブランク(第45図～第47図)

細石刃の剥離作業を行う前段階の状態を、ブランクと総称しておく。第45図3940～4254までは比較的石核調整の作業が進行した状態といえる。六面体のサイコロ状に近く、3940・4196では打面の短辺、3856・4254は長辺が主要な剥離面として意識されている。以上と比較すると、第45図4414～第47図4182はまだごく初期の段階である。厚みのある剥片類の一部に加工痕を残している。

#### 調整剥片(第48図)

細石核の打面部に関連する調整剥片のうち、特に打面全体を更新したようなものを主に図示した。

4366～3866はまさに打面再生剥片とも呼ぶべき例である。3866の下面には打撃痕が残る。大きく剥離された調整剥片にさらに打撃を加えて、細石核として再生しようとしている。4265は断面が両面加工石器の製作に関連する、断面三角形の調整剥片である。尖頭器に関連するのかもしれない。

#### 細石刃(第49図～第54図)

細石刃はごく小片のもの等を除く156点を図示した。部位による内訳は完形のもの39(第49図4388～第50図2790)、下部を欠くもの55(第50図4158～第52図3499)、両端を欠くもの26(第53図4156～3890)、頭部を欠くもの36となってい(第53図3505～第54図4410)。3691・3844・3945・4238の細石刃には被熱によるのか、表面が褐色のすりガラス状となっている。

側縁に微細な刃こぼれとは異なる、二次加工と判断される痕跡を持つ例が33点ある。両側縁に加工が施されたものの中には、正・裏面の両方かどちらか一面の左右側縁上下の対照的な位置に、部分的な二次加工が入るものがある(第49図3714・4283・第51図3691・4246・3685・4012・3435・第53図4156・4197)。

#### 削器・搔器(第55図～第59図)

刃部の位置によって剥片の側縁にあるものを削器、末部にあるものを搔器としたが、両者の区別は厳密には下しがたい。

搔器はすべて黒曜石製で、円刃が剥片の末部にめぐる拇指状のもの(第55図856～2211)、鋸歯状の直刃に近いものなどがある(2041)。3693は円刃と凹刃とが組み合わさり、4444も円刃が側縁から末端にのびる。

削器には黒曜石に加えて安山岩製のものもある(第57図4455～第58図3874)。細石器主体の石器集中11から多く出土している。同様の削器類は、群馬県市之關前田遺跡でも細石器に伴って出土している(宮城村教育委員会1991)。本遺跡でも細石器に共伴する石器とみなされる。

#### 楔状石器(第58図4021)

黒曜石製の楔状石器である。両面の両端に崩れたような打撃痕が残る。縦断面形は凸レンズ状を呈し、裏

面側は平坦な剝離面となり、こうした打撃方法の特徴を示している。

#### 石錐(第58図3649)

黒曜石製の石錐が1点出土している。正面に自然面の残る厚手の剝片を用いている。大小の剝離によって尖頭部を作り出している。

#### 打製石斧(第60図862)

尖頭器の製作址である石器集中4に接する位置から出土した、粘板岩製の大形打製石斧である。片理面に並行する打撃で、素材となった板状の剝片を得ている。素材の主要剝離面の打瘤は扁平にちかく、原石を台石に直接打ちつける、いわゆる「ブロック・オン・ブロック」の打撃方法によるような特徴を示している。両面に素材の剝離面を大きく残して、両側縁の頭部よりの範囲に、鋸歯状を成す周辺加工が加えられている。刃部は素材面をそのまま片刃状に用いている。刃縁にも自然面が残り、特に細部調整は加えられていない。

#### 礫器(第61図2242・2246)

2242は板状剝片の両端に、斜めの刃をついている片刃の礫器である。断面形は平行四辺形となる。2246も同じく片刃の礫器である。刃部は斜刃となる。裏面には自然面が残る。

#### 敲石(第62図2241)

砂岩製の敲石であり、2242の礫器や2240の台石に隣接して出土した。頭部付近を中心として打撃の痕跡が残っている。

#### 台石(第63図2240・第64図3536)

2240は砂岩製の台石である。図の正面を上にして設置されたような状態で出土した。正面中央部がややくぼむが、石皿のような使用による損耗ではなく、自然面の凹部を利用したと思われる。裏面及び周縁に敲打痕が残る。第64図3536は細石器主体の集中15の中央部から出土した。やはり砂岩製の円礫で、正面の平坦部に鋭利な石器による、崩れたような打撃痕が残ってい

る。おそらく、細石刃製作に関連した台石としては貴重な検出例だろう。

#### 石核(第65図2024～第68図2247)

第65図2024と4003の2点は、ホルンフェルス製の同一母岩である。表面の風化が著しい。両例とも六面体に近く、上下に大きな打面が位置している。4003は両説打面となっている。両側縁が並行する縦長剝片を得るための石核であるが、砂川型式のようなナイフ形石器は見つかっていない。第66図3710と3896は幅広の剝片を剝離している。3896は正面に求心的な剝離痕がめぐっている。第66図2221～第67図875は剝片製の石核である。特に石器集中16から出土した2221は、翼状に近い横長剝片を剝離している。同集中が尖頭器類よりも古期の、いわゆる「IV下」のナイフ形石器文化期であることと整合性をもつ。第67図2244・第68図2247は大形円礫のチャート製石核である。打面はほとんど調整せずに剝離している。全体に片理が多く入り、あまり良質とは思えない。チャート製の石器は削器や剝片類に若干あるが、尖頭器の1母岩を除き、本遺跡では少数派である。

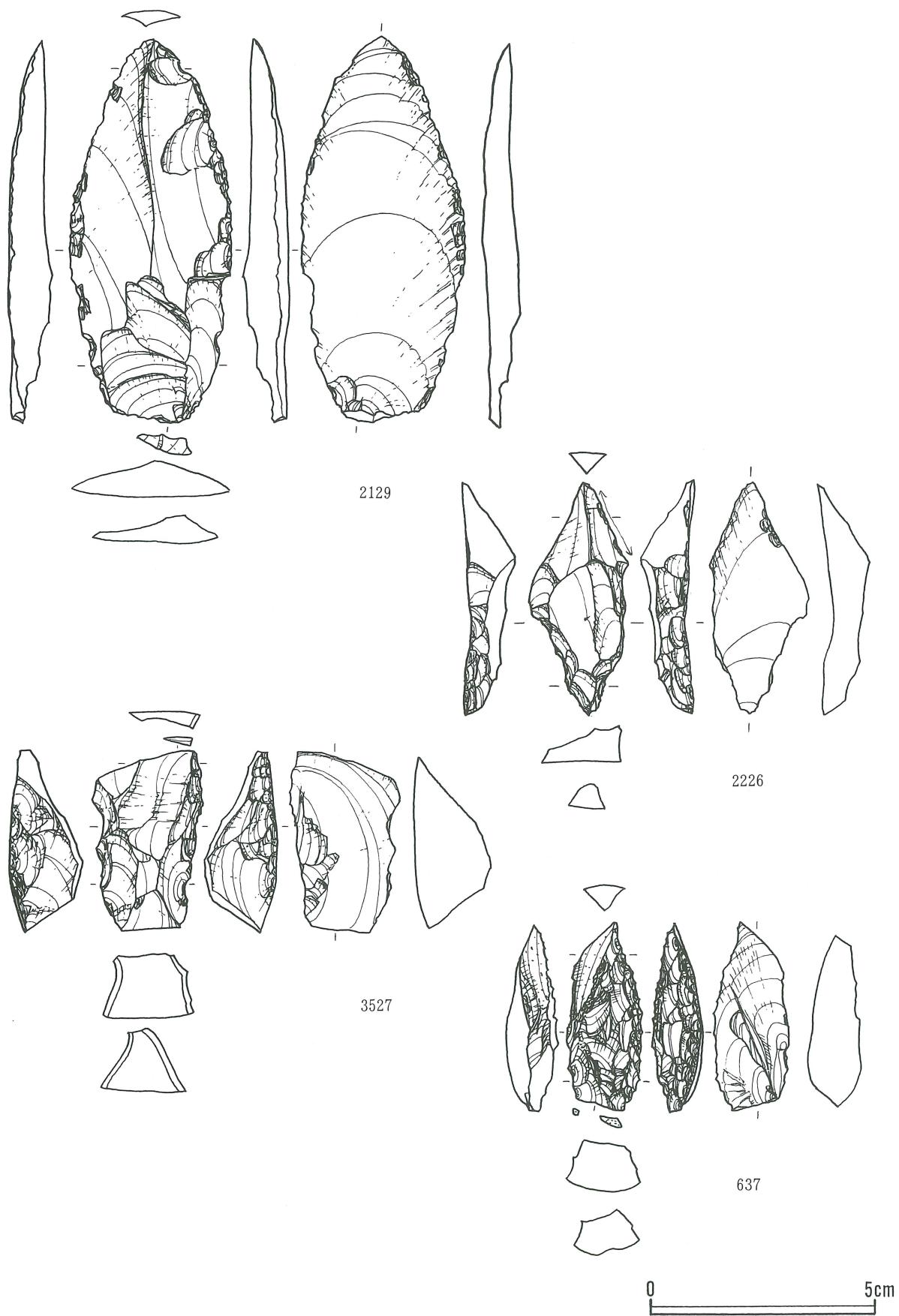
#### 原石(第68図2248)

黒曜石の大形の原石である。遺跡最南端のQ・R1グリッド付近を通っていた旧道路上から見つかった。本調査ではこの付近から石器は検出されていない。耕作等によって掘り出されたものが、路上に投げ捨てられたのだろうか。原石の質はやや灰色がかったり、細石器類よりも尖頭器製作に用いられた黒曜石にちかい。表面のかなりの部分を、通行する車両等によって破碎されている。

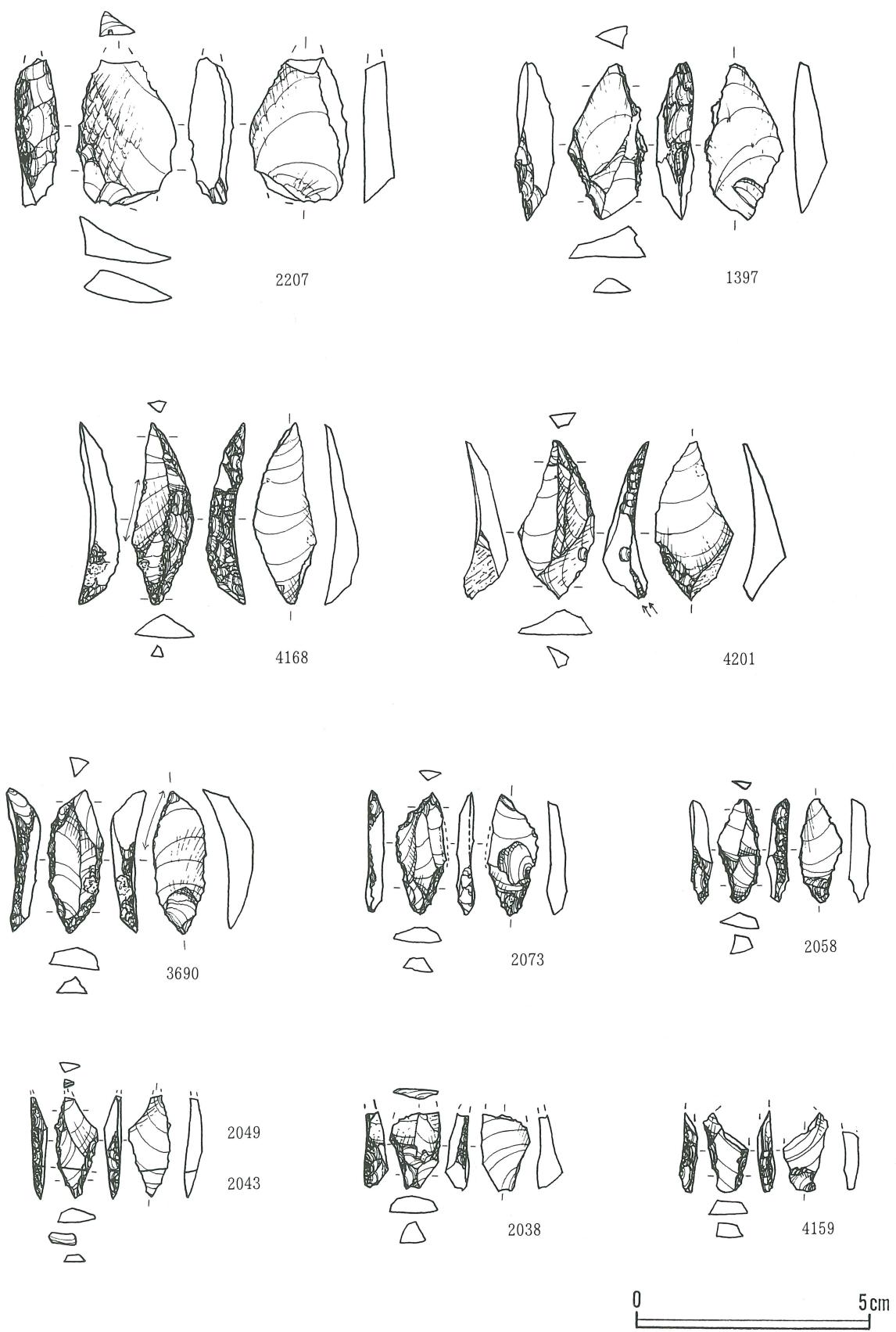
#### 剝片(第69図2150～2060)

第65図2024・4003のホルンフェルス製石核と、同一母岩の縦長剝片である。両側縁が並行する大形例が多い。打面はあまり細調整されることなく剝片を得ている。

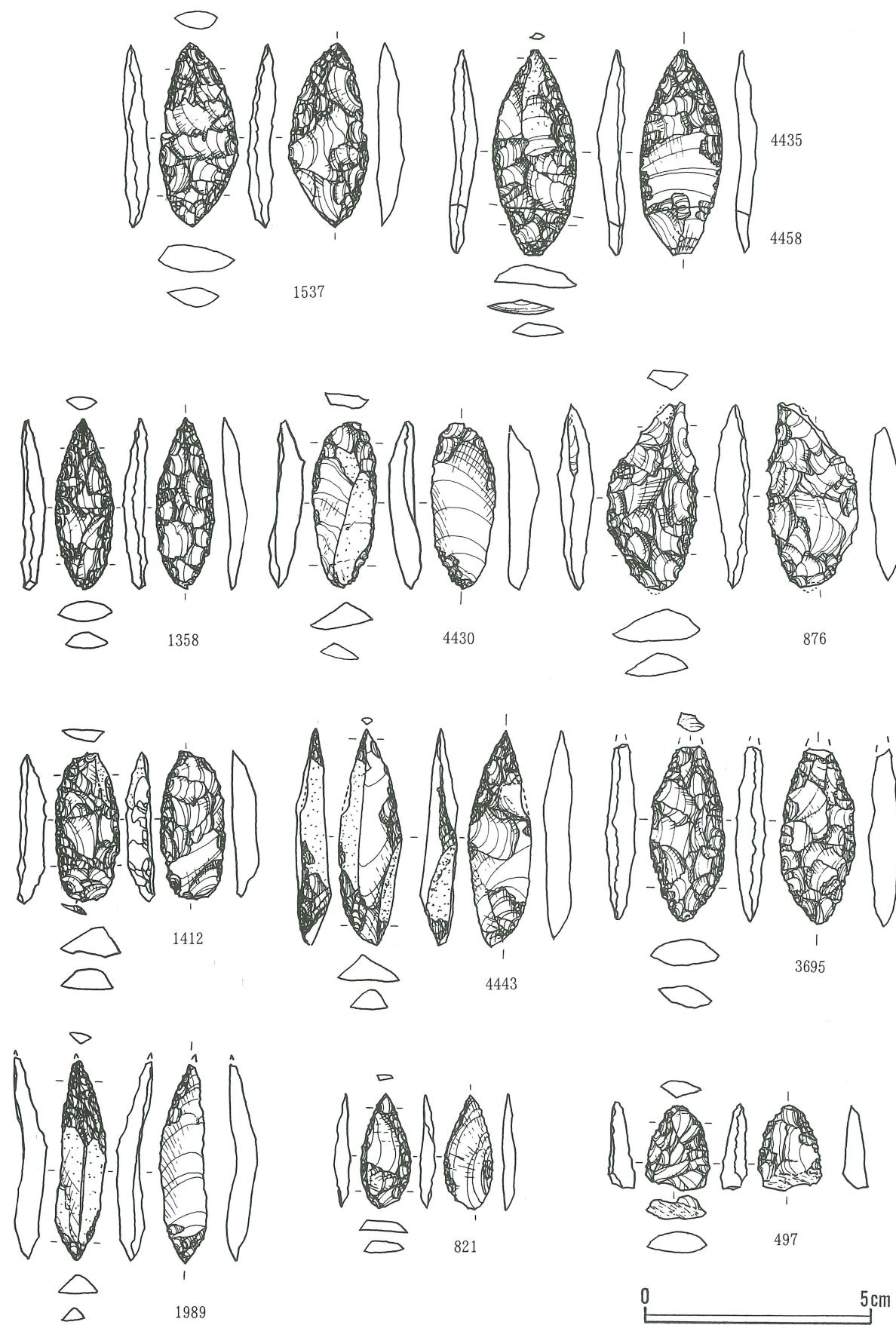
第33図 ナイフ形石器(1)



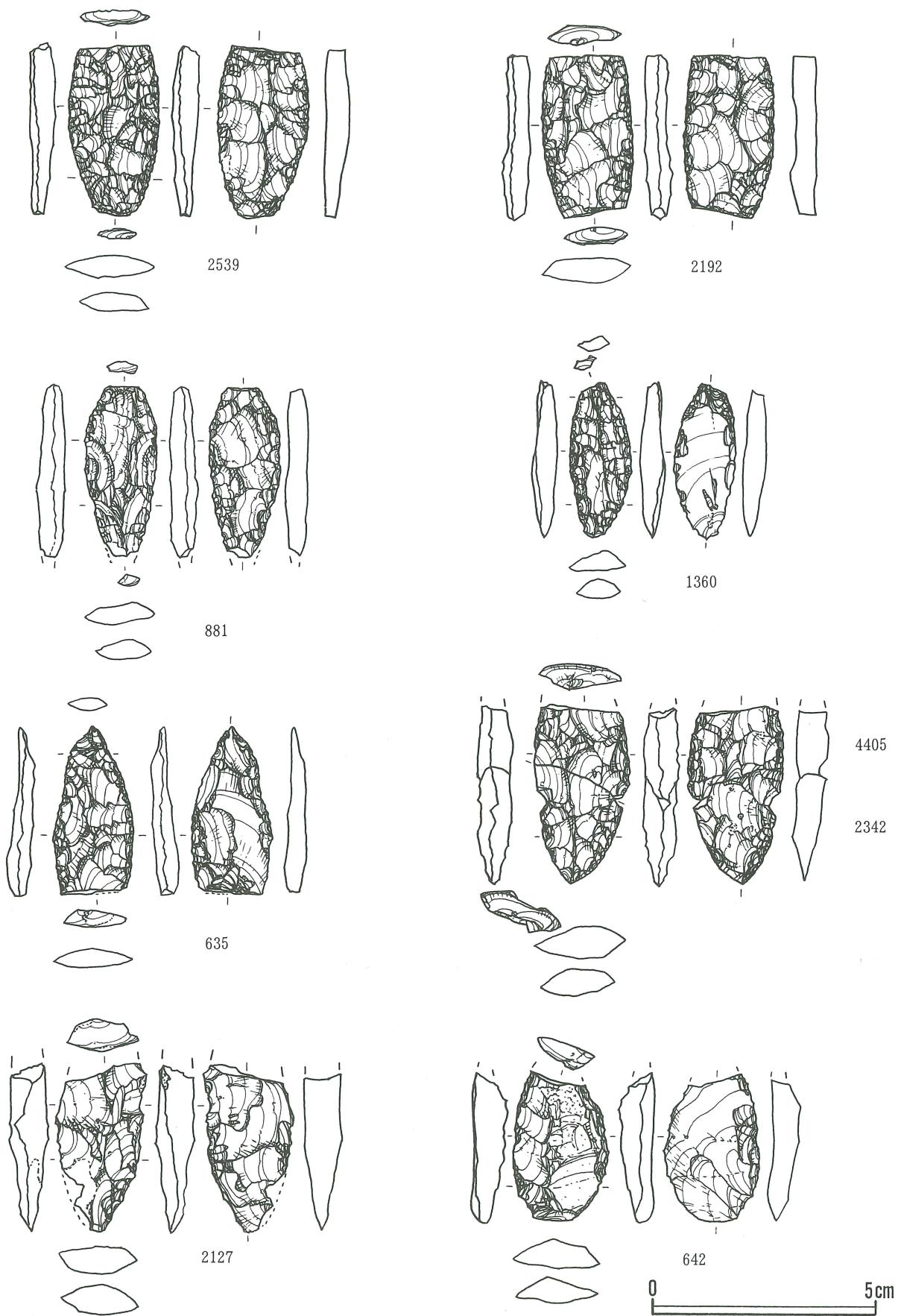
第34図 ナイフ形石器(2)



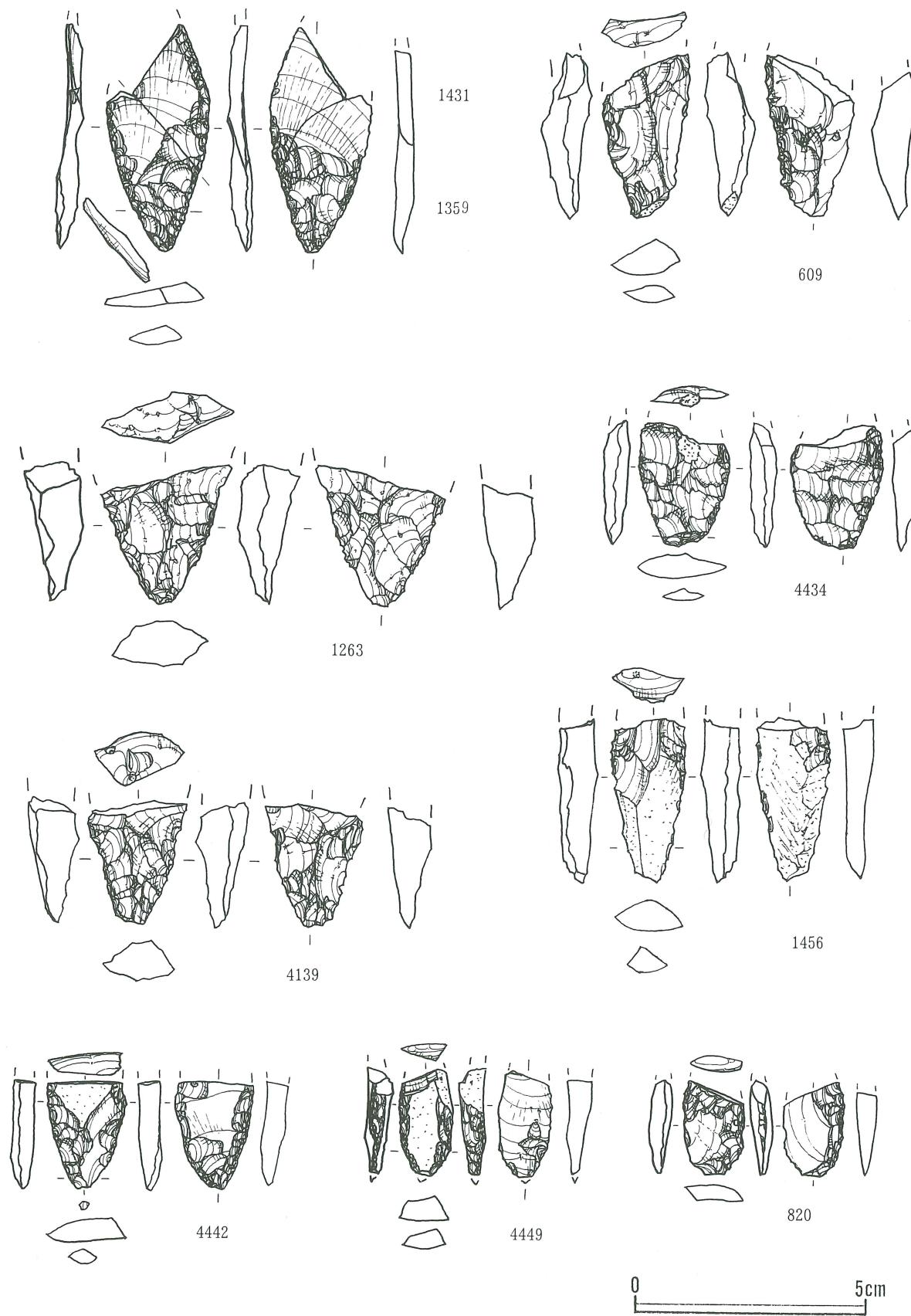
第35図 尖頭器(1)



第36図 尖頭器(2)

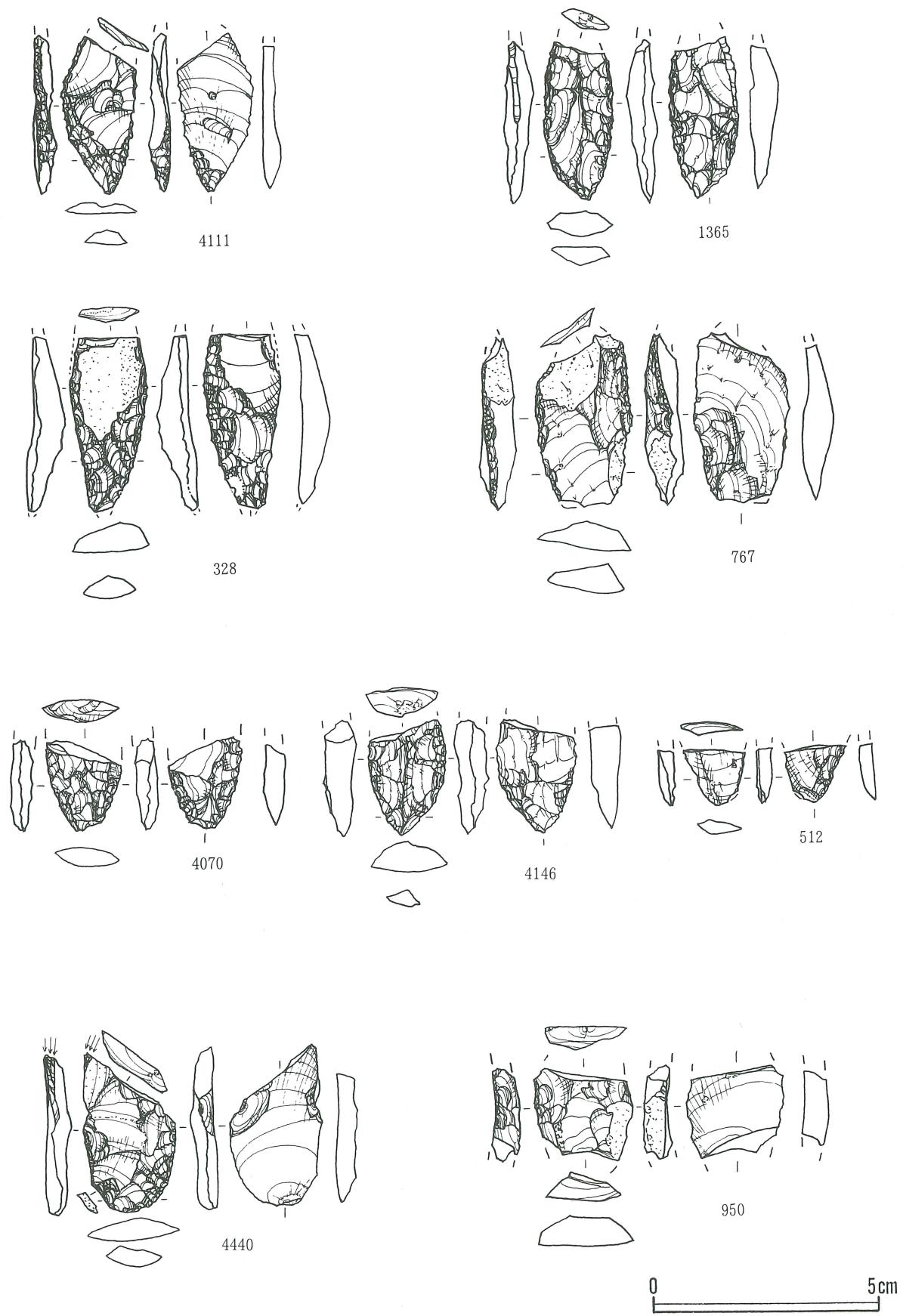


第37図 尖頭器(3)

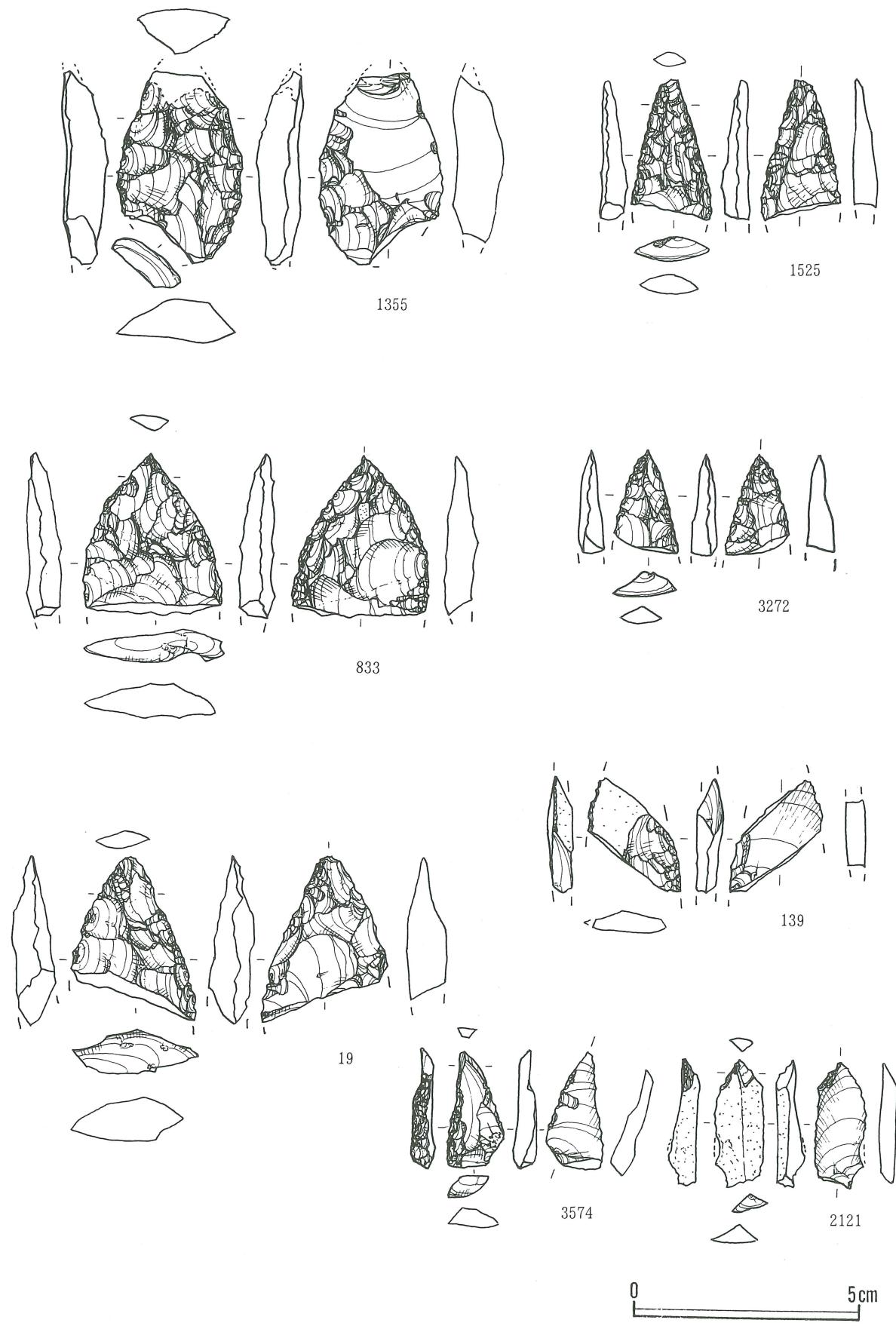


0 5cm

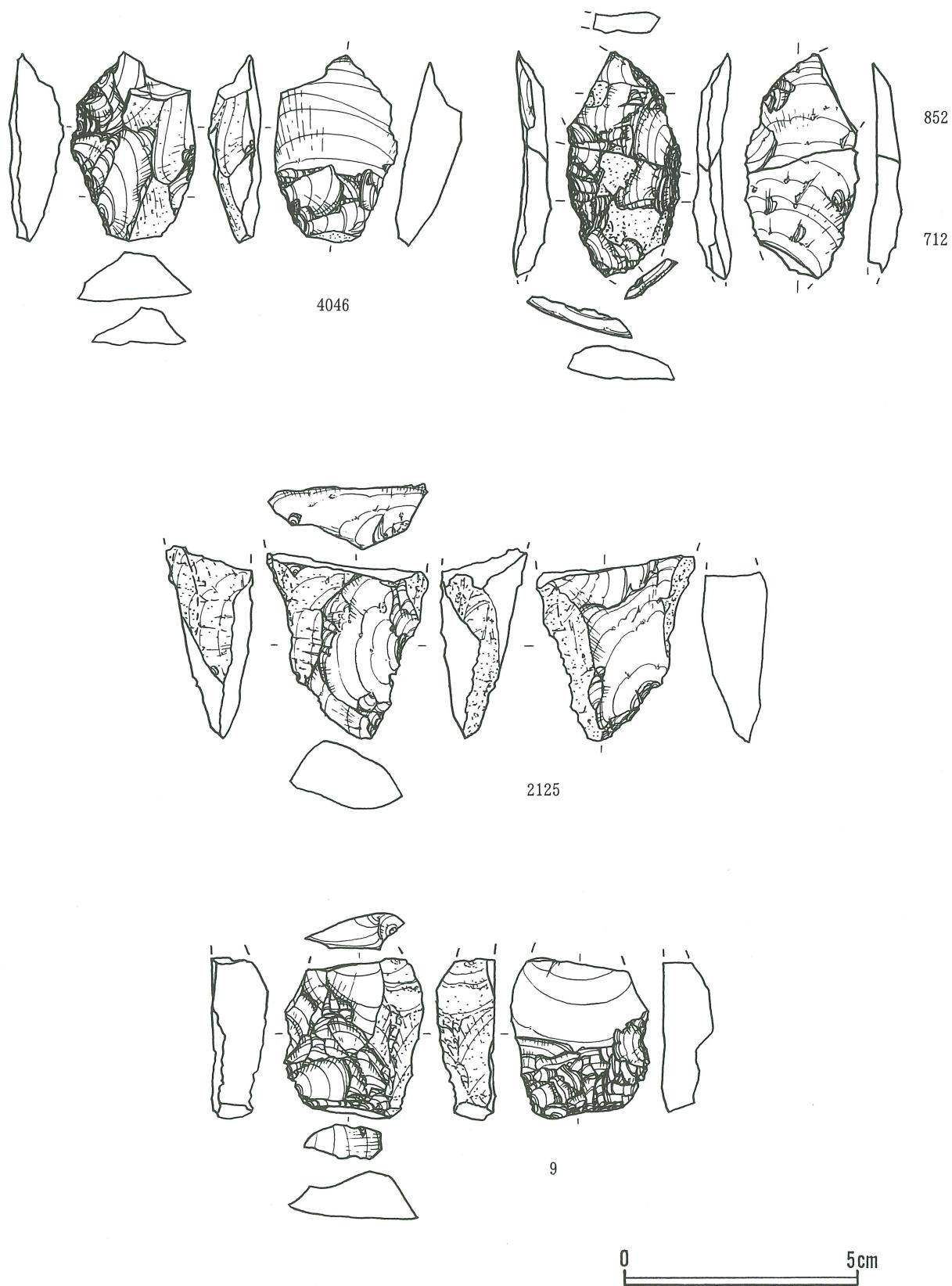
第38図 尖頭器(4)



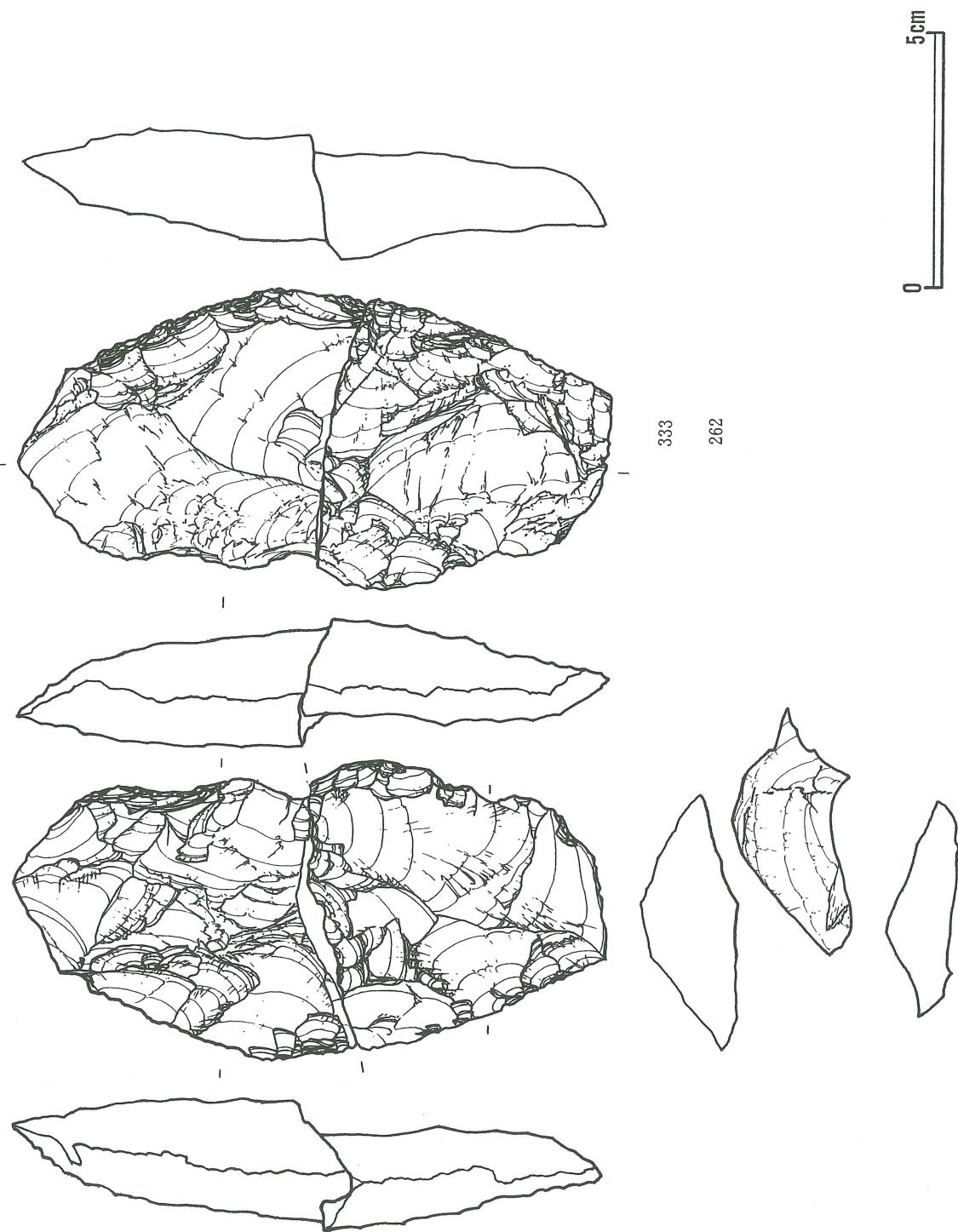
第39図 尖頭器(5)



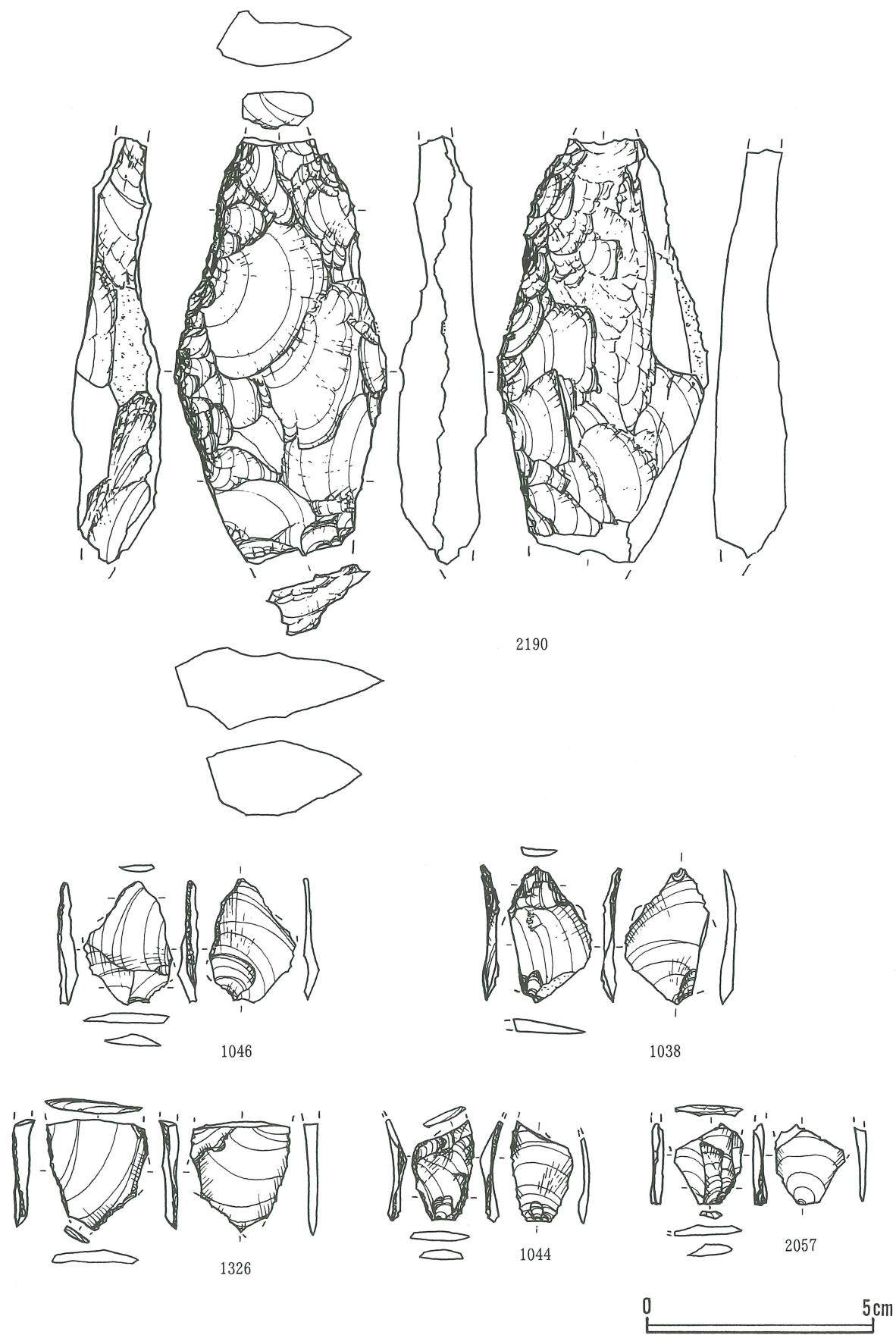
第40図 尖頭器(6)



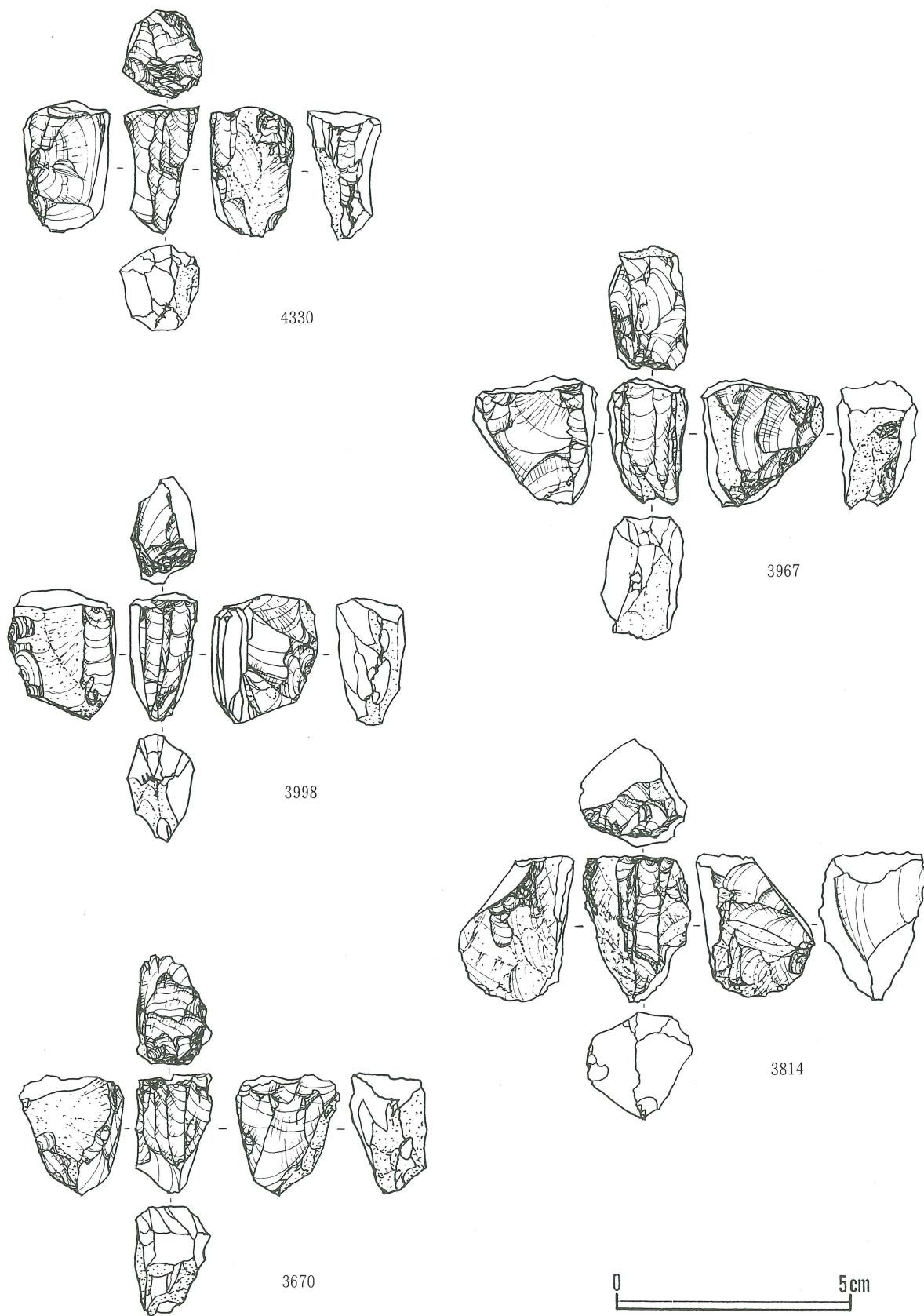
第41図 尖頭器(7)



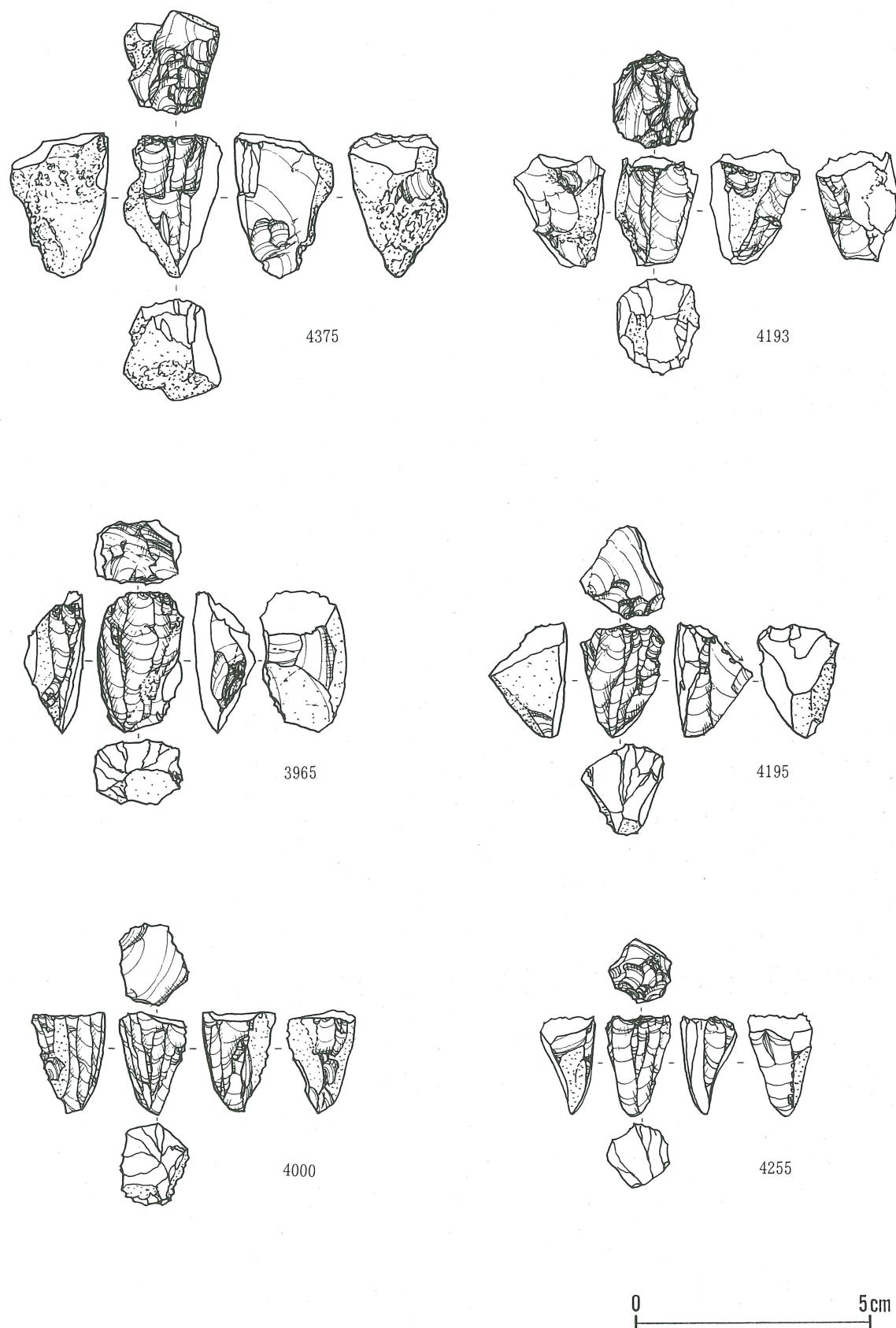
第42図 尖頭器(8)



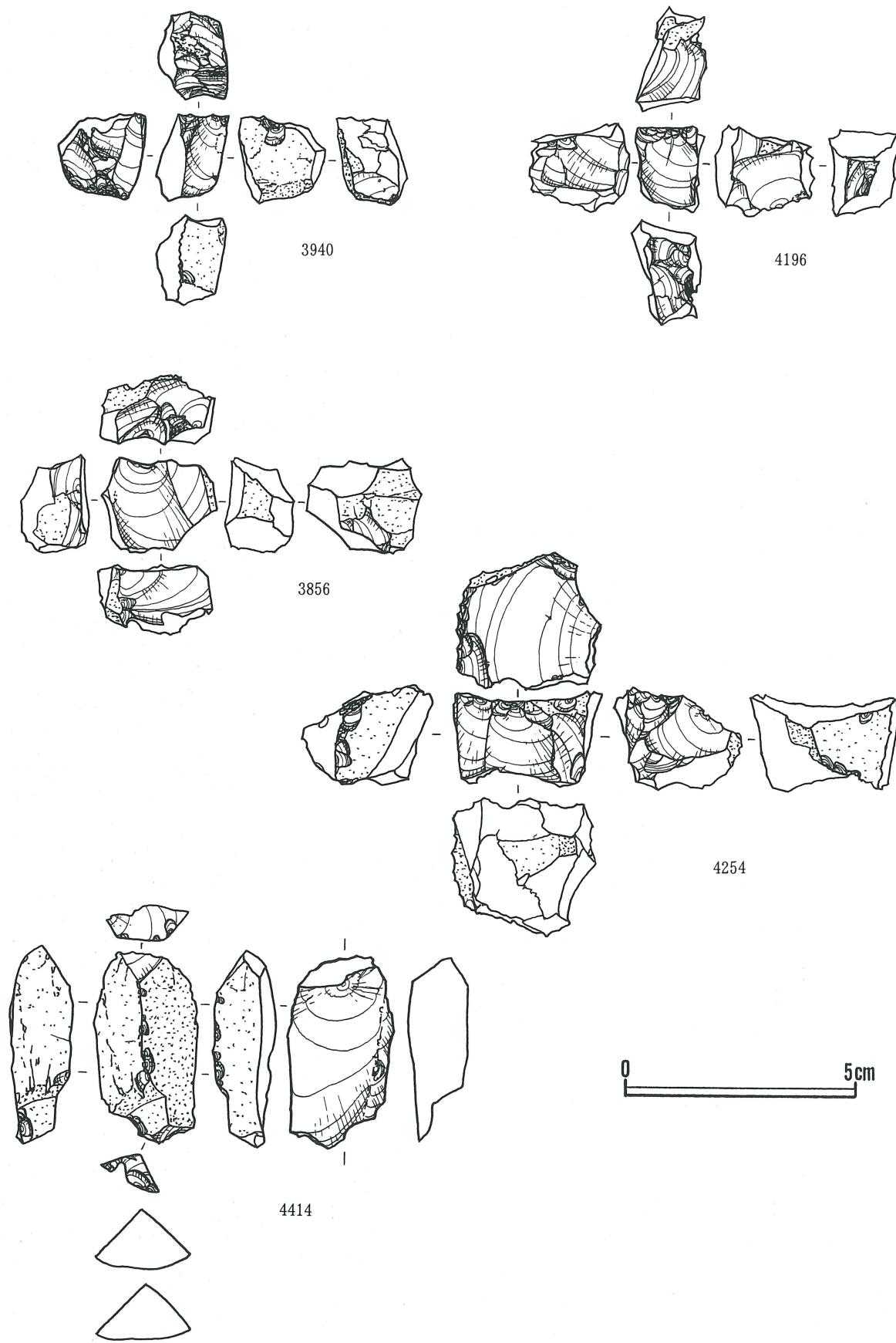
第43図 細石核(1)



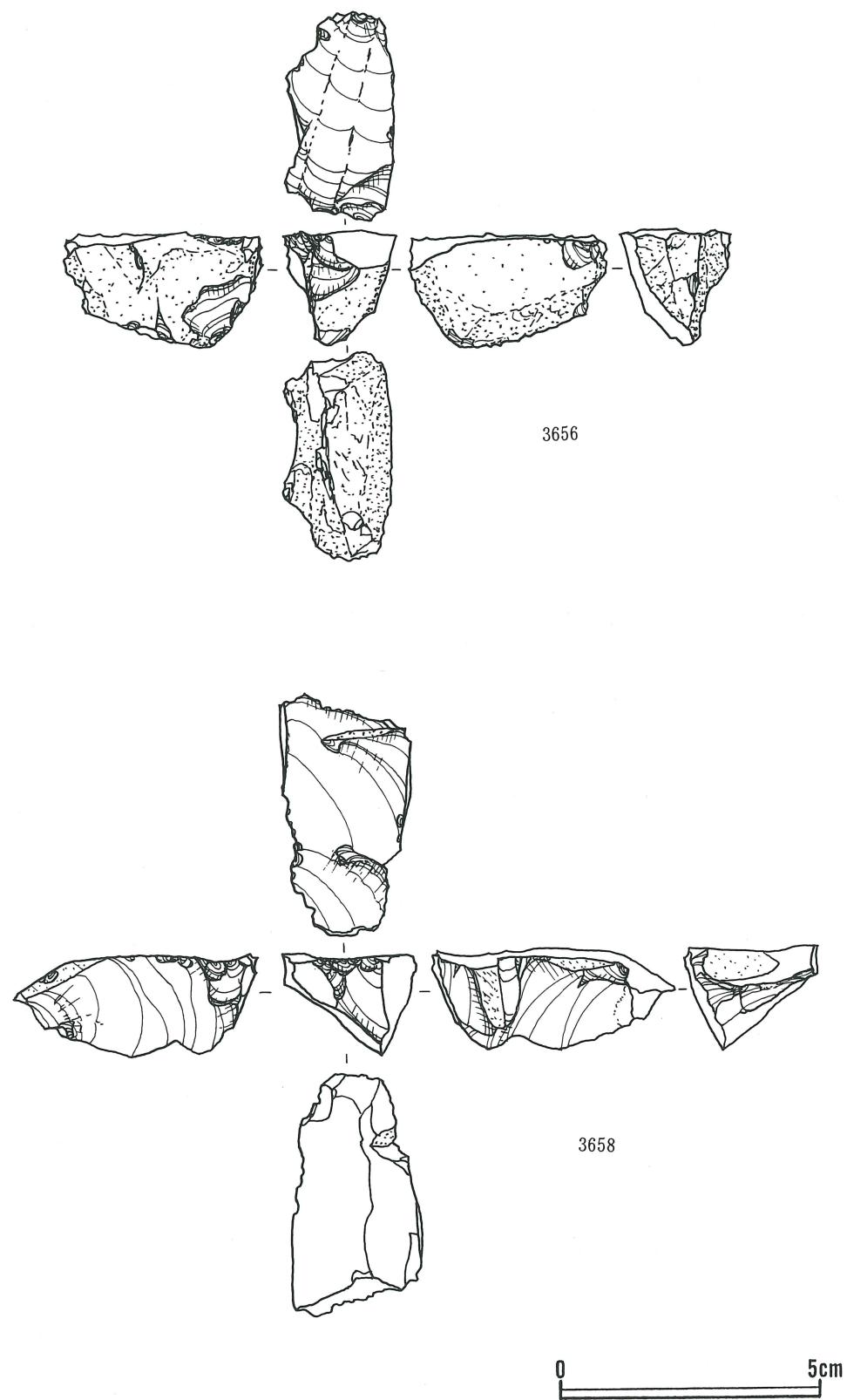
第44図 細石核(2)



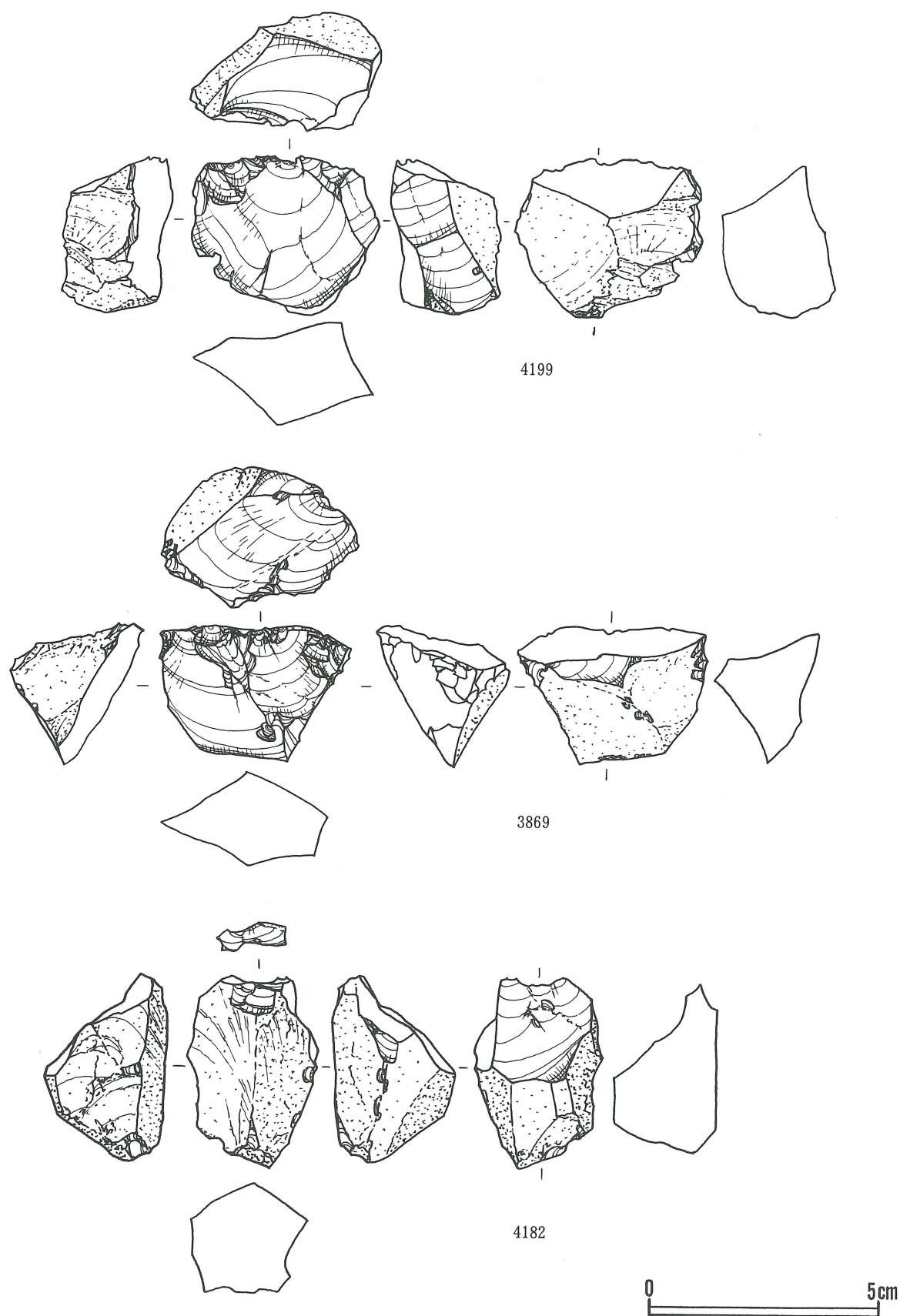
第45図 ブランク(1)



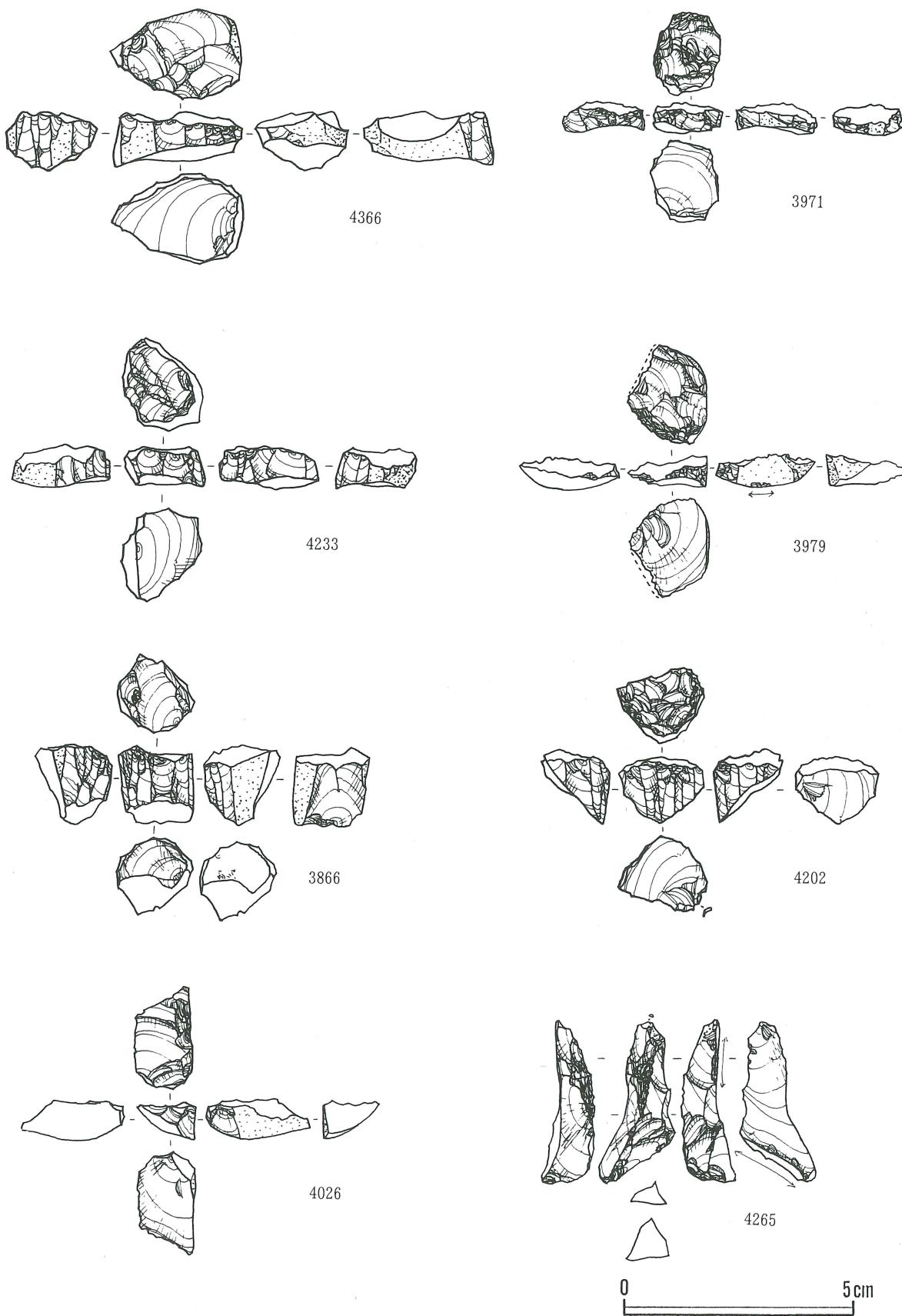
第46図 ブランク(2)



第47図 ブランク(3)



第48図 調整剥片

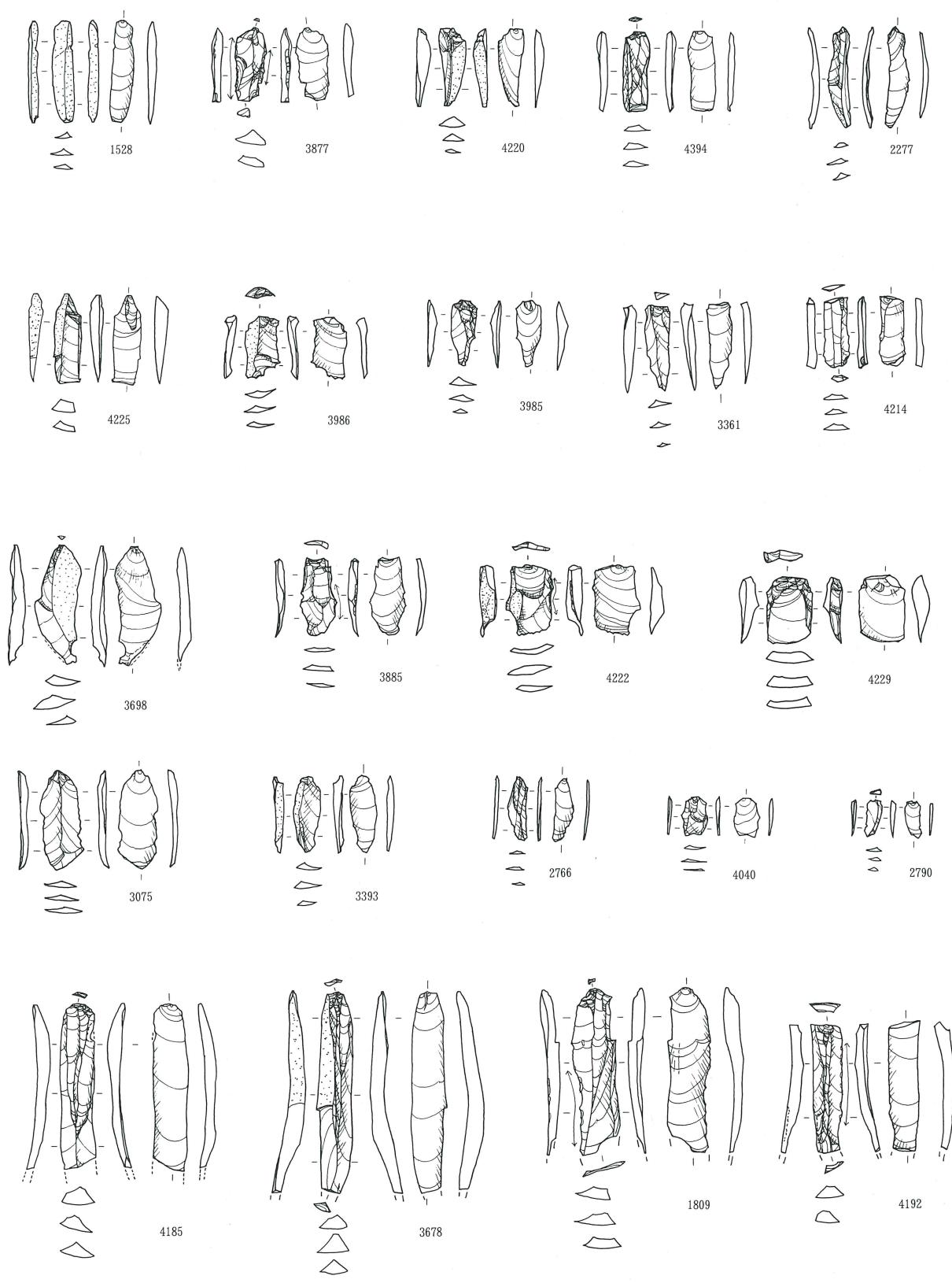


第49図 細石刃(1)

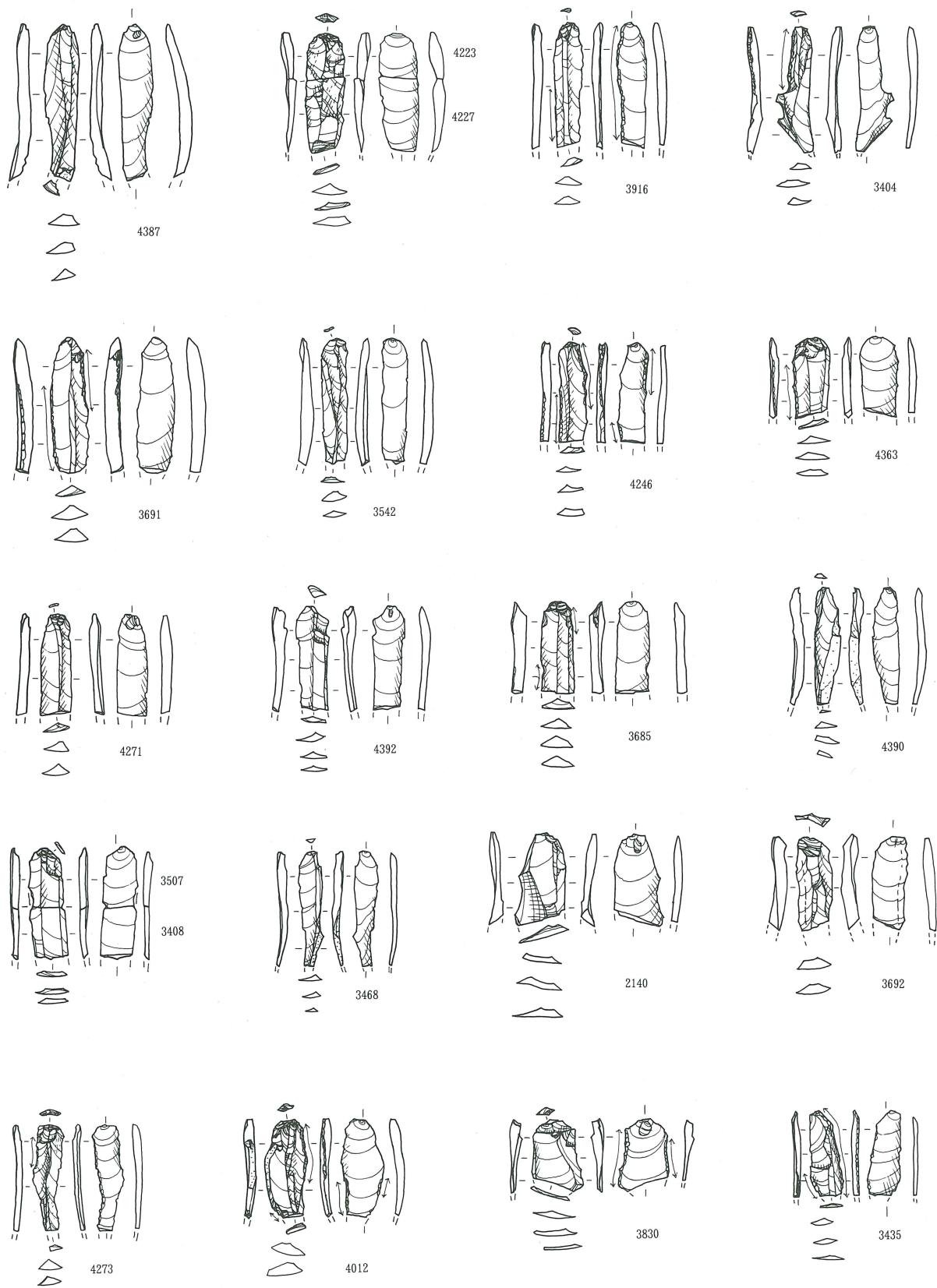


0 5 cm

第50図 細石刃(2)

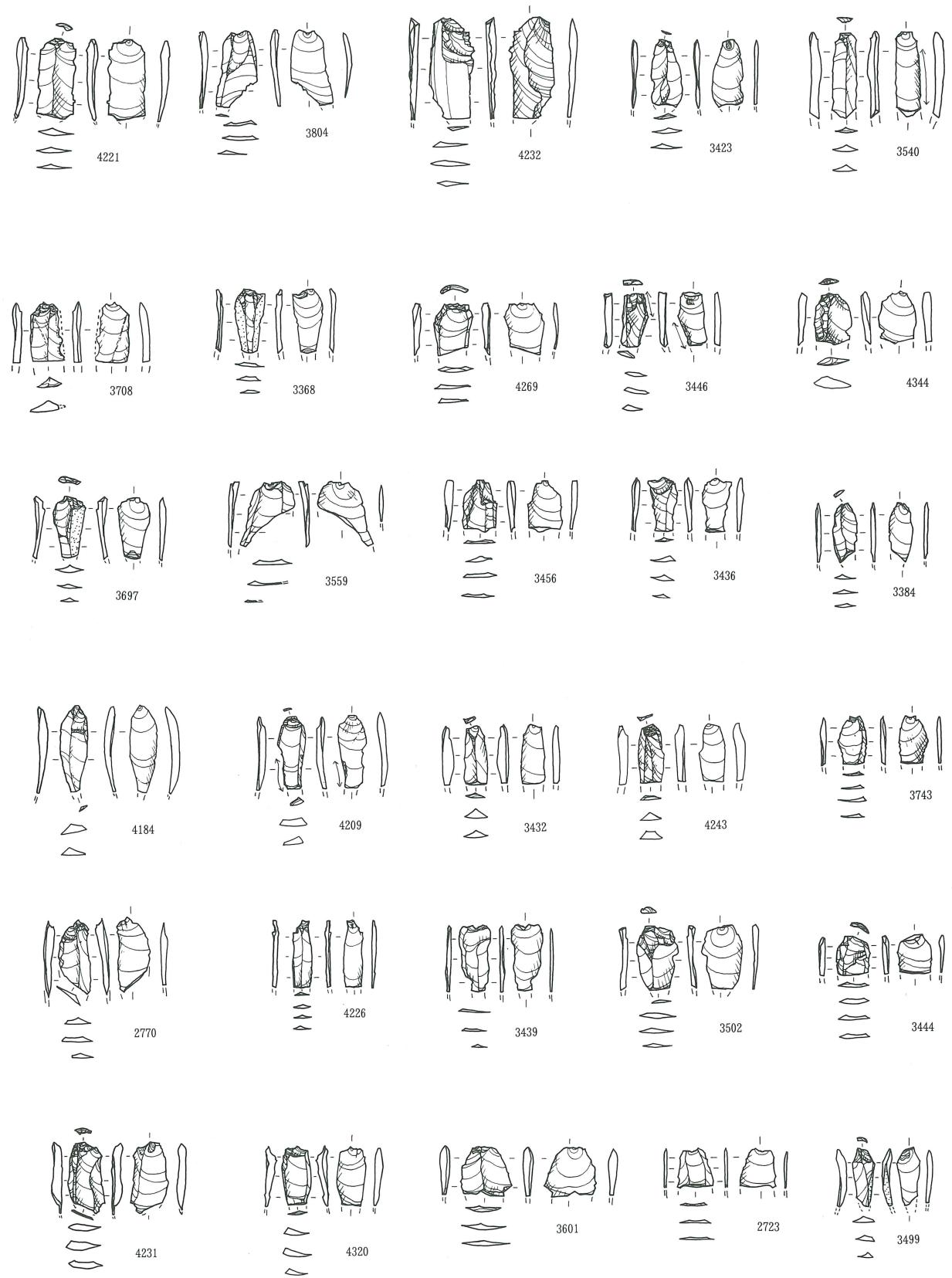


第51図 細石刃(3)



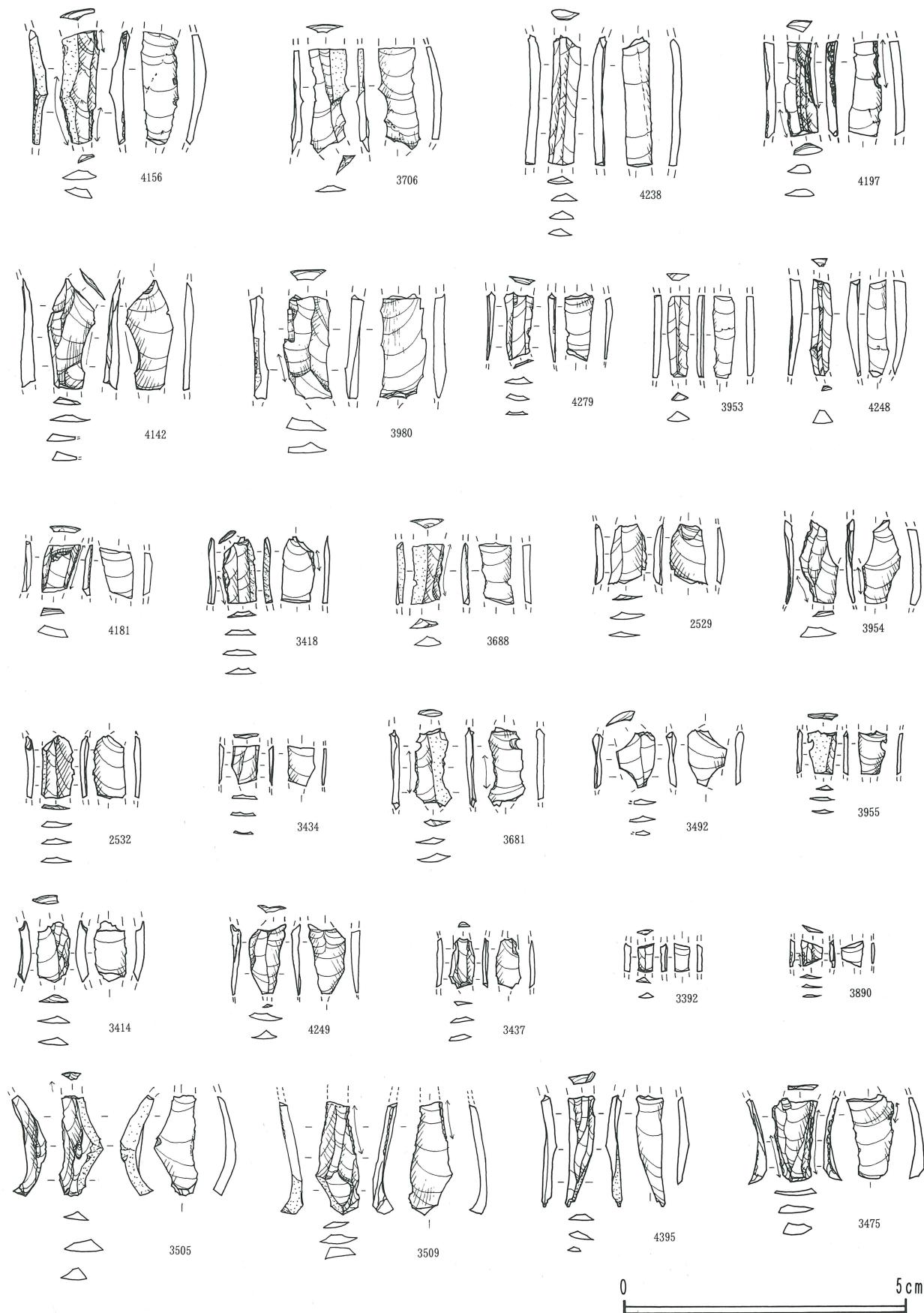
0 5 cm

第52図 細石刃(4)



0 5 cm

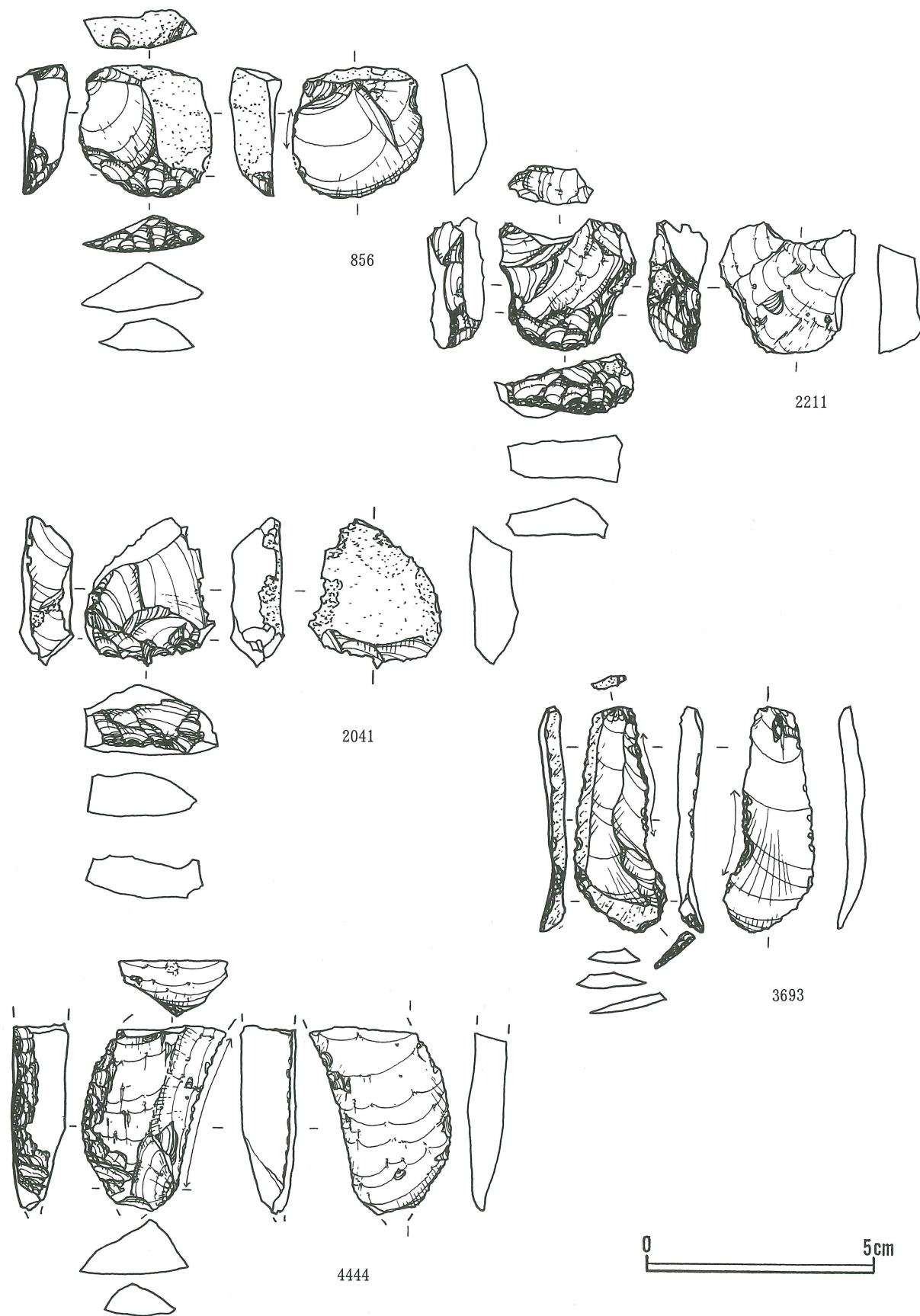
第53図 細石刃(5)



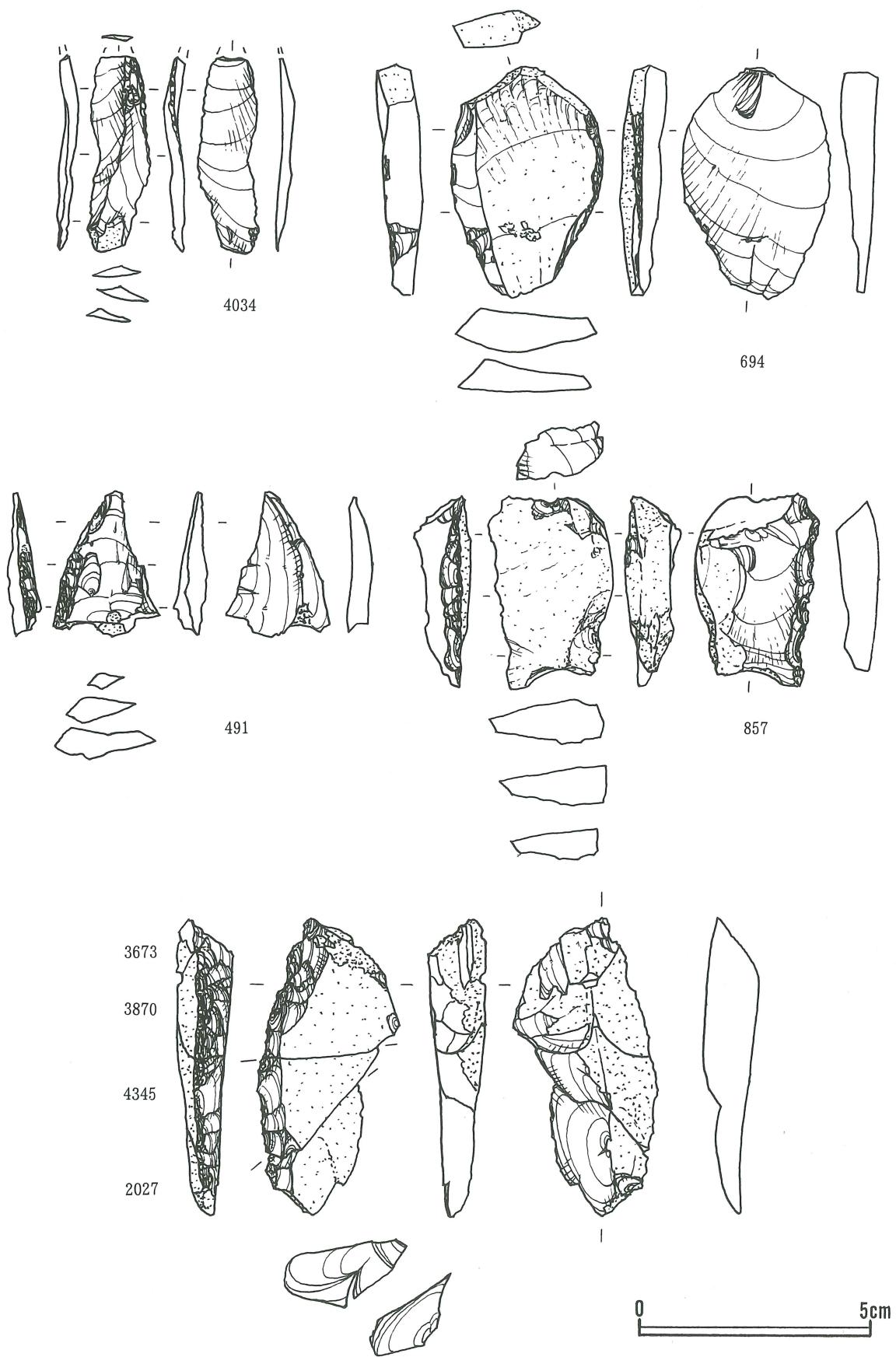
第54図 細石刃(6)



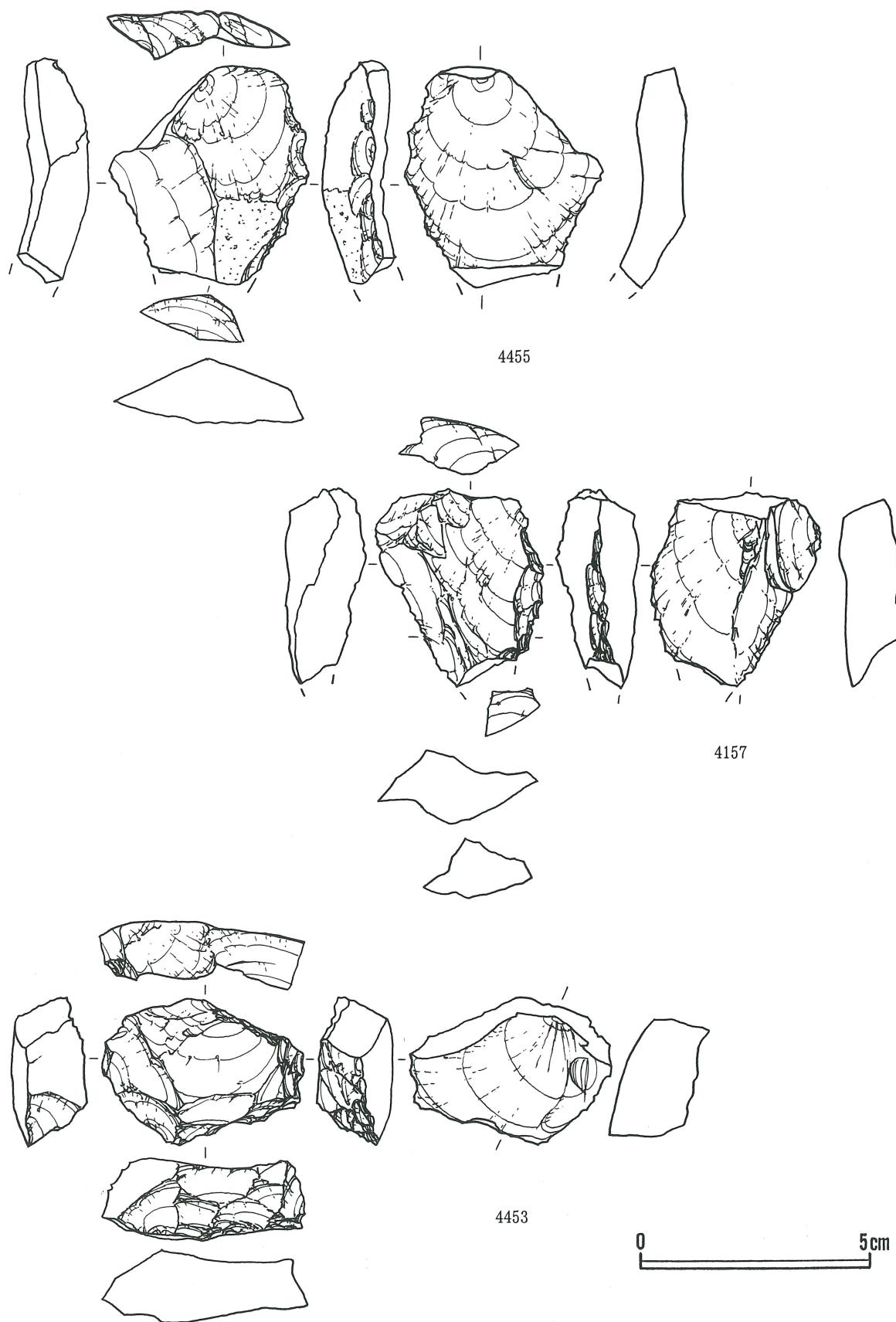
第55図 削器・搔器(Ⅰ)



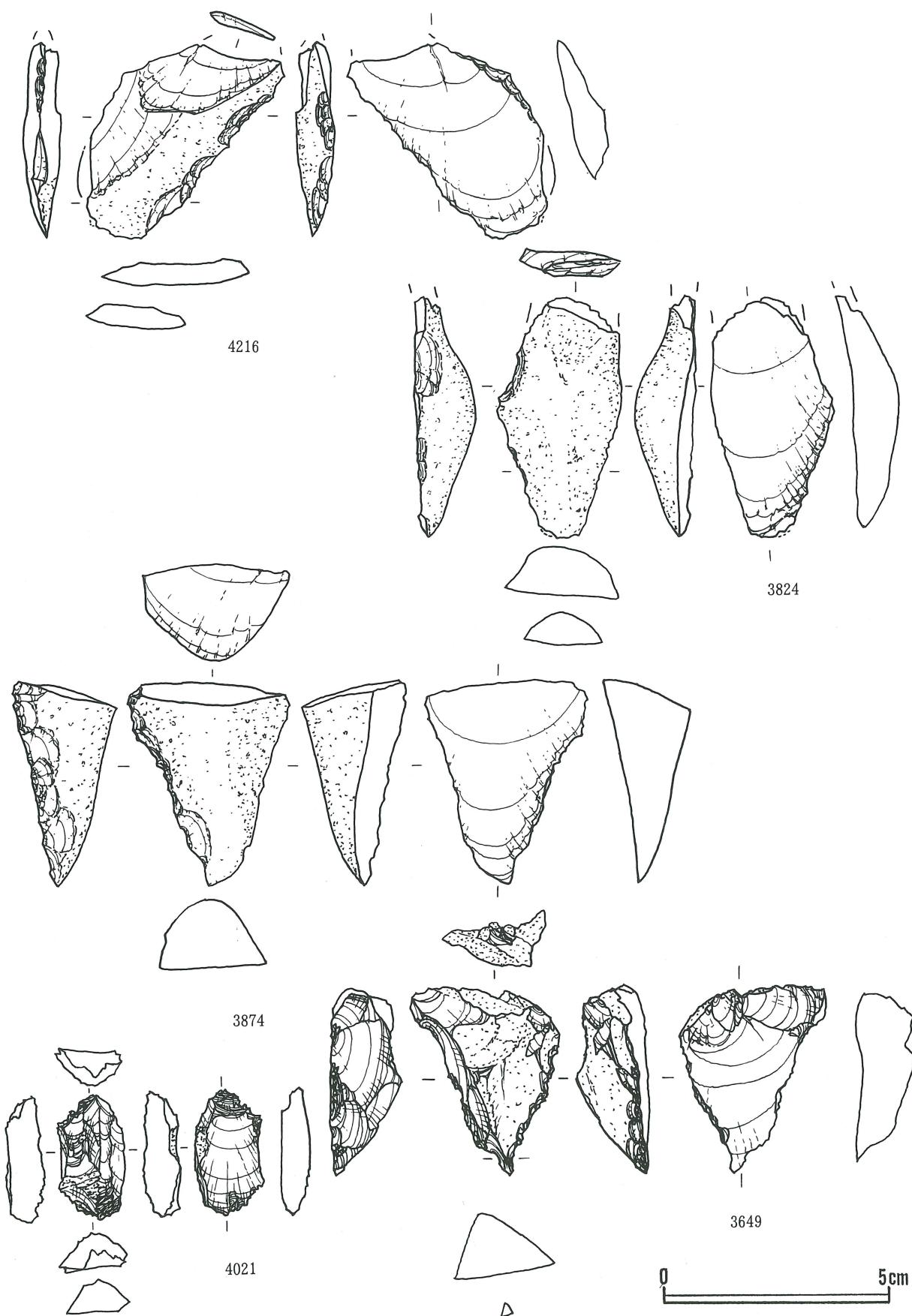
第56図 削器・搔器(2)



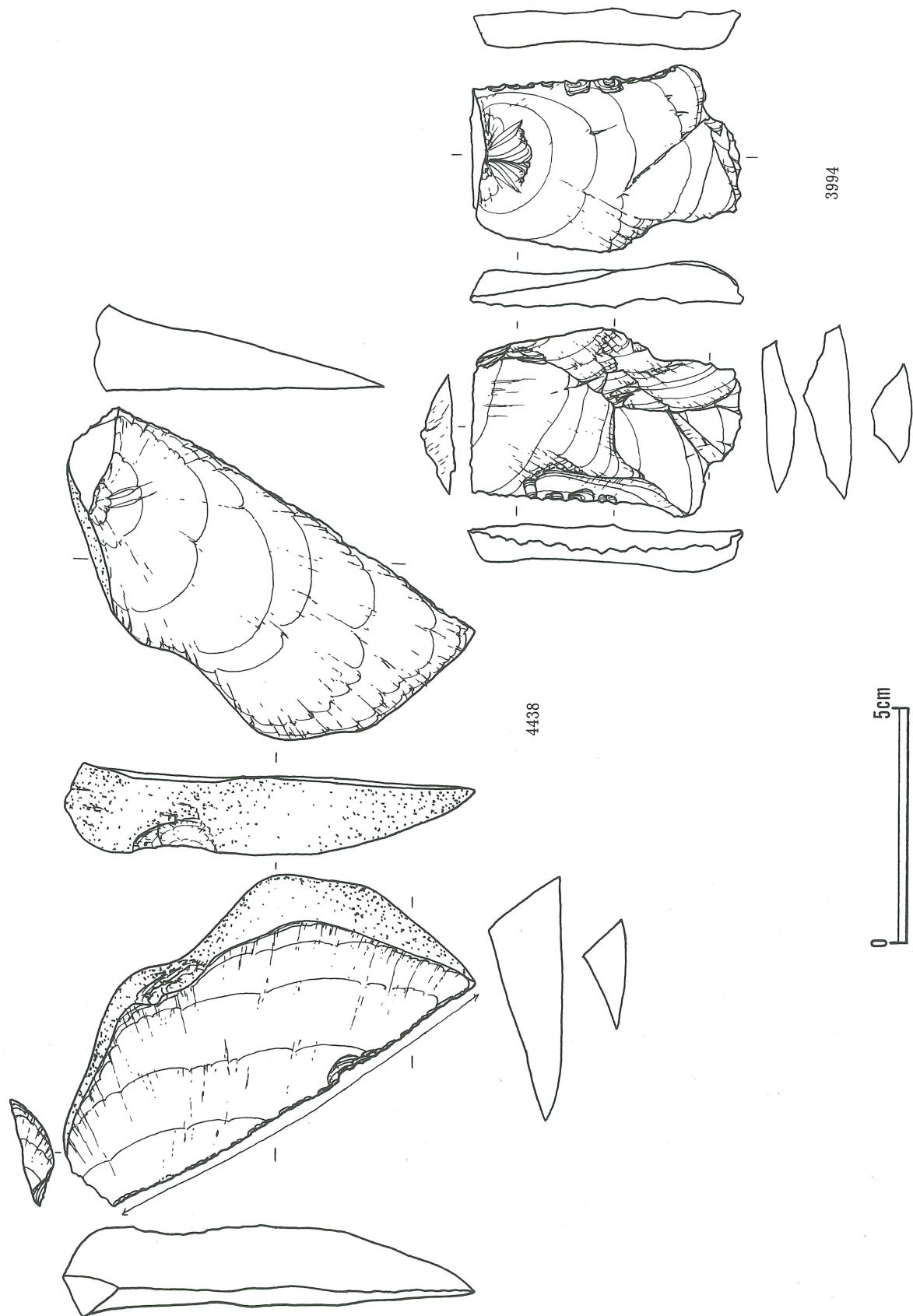
第57図 削器・搔器(3)



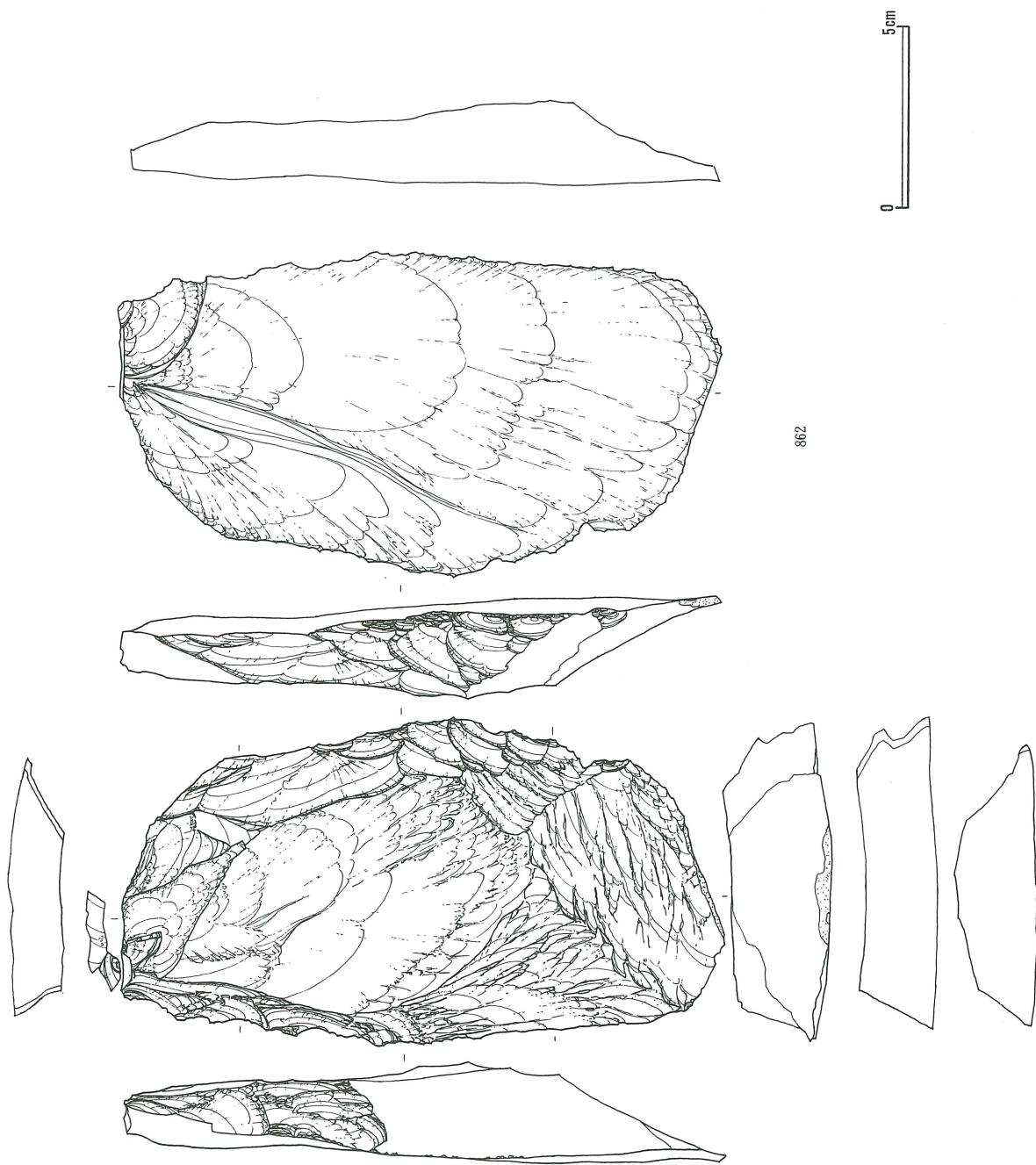
第58図 削器・搔器(4)・石錐・楔状石器



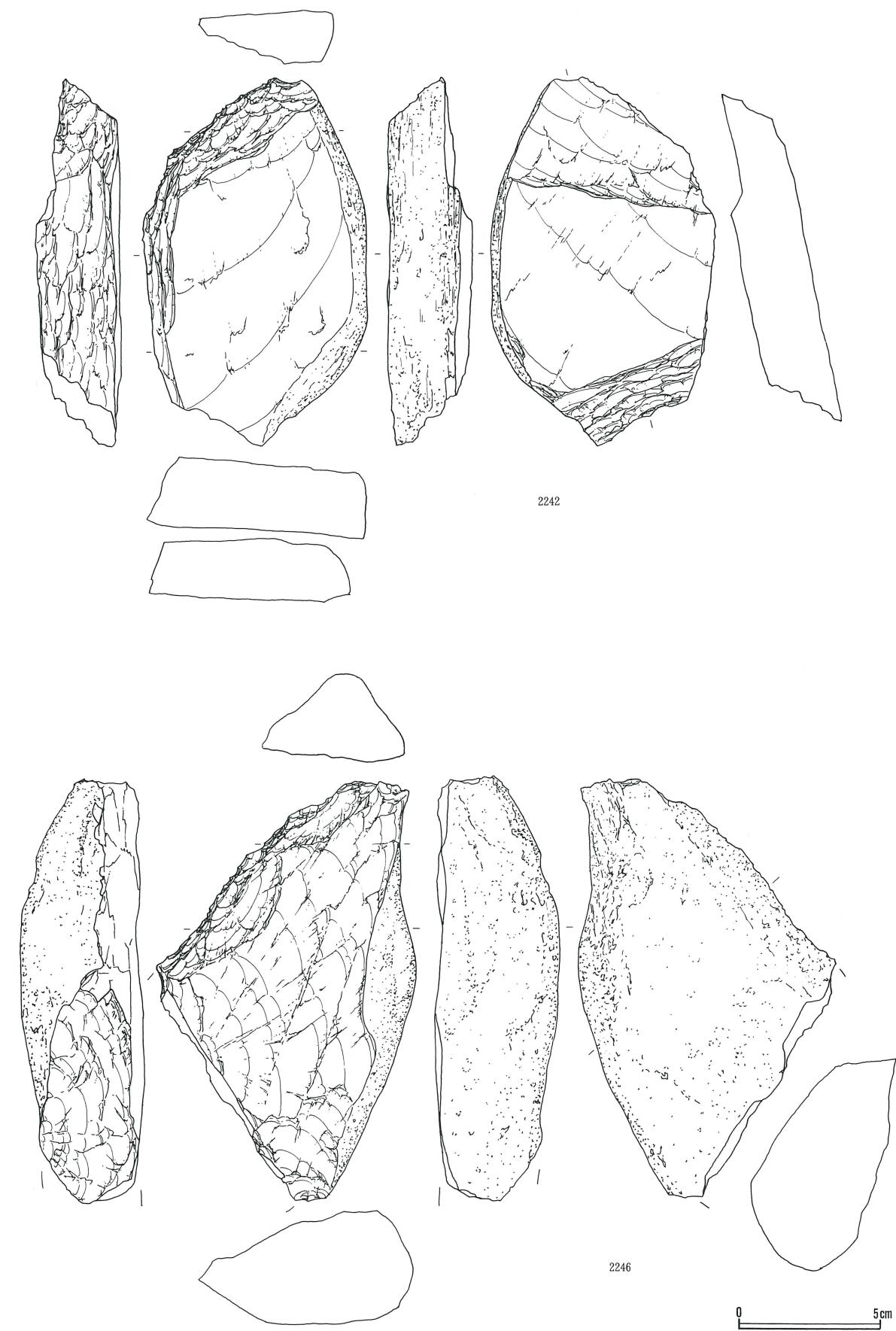
第59図 削器・搔器(5)



第60図 打製石斧



第61図 磚 器



第62図 敲 石

